

靈界物語 第七八卷 天祥地瑞 巳の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十八卷』天聲社

1974(昭和49)年05月18日 三版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

第一篇 はたう 波濤の神光 しんくわう

第一章 はまべ 濱邊の訣別 けつべつ 〔一九五七〕

第二章 はじやう 波上の追懷 つめくわい 〔一九五八〕

第三章 しま グロスの島 しま 〔一九五九〕

第四章 燒野の行進やけの かうしん（一九六〇）

第五章 忍ヶ丘しのぶがをか（一九六一）

第六章 燒野の月やけの つき（一九六二）

第二篇 燒野ヶ原やけのがはら

第七章 四神出陣ししんしゅつぢん（一九六三）

第八章 鏡の沼かがみ ぬま（一九六四）

第九章 邪神征服じゃしんせいふく（一九六五）

第一〇章 地異天變ち い てん ぺん（一九六六）

第十一章 初對面しよたいめん（一九六七）

第一二章 月下の宿りげつか やど（一九六八）

第三篇 葦原新國あしはらしんこく

第一三章	春野の進行 <small>はるの しんかう</small> 〔一九六九〕
第一四章	花見の宴 <small>はなみ えん</small> 〔一九七〇〕
第一五章	聖地惜別 <small>せいちせきべつ</small> 〔一九七一〕
第一六章	天降地上 <small>てんかうちじやう</small> 〔一九七二〕
第一七章	天任地命 <small>てんにんちめい</small> 〔一九七三〕
第一八章	神嘉言 <small>かむよごと</small> 〔一九七四〕
第一九章	春野の御行 <small>はるの みゆき</small> 〔一九七五〕
第二〇章	静波の音 <small>せは おと</small> 〔一九七六〕

第四篇 神戰妖敗しんせんえうはい

第二一章	怪體の島 <small>けたい しま</small> 〔一九七七〕
第二二章	歎聲仄聞 <small>たんせいそくぶん</small> 〔一九七八〕
第二三章	天の蒼雲河 <small>あま あをくもがは</small> 〔一九七九〕

第二章 國津神島彦（一九八〇）

第二十五章 歡の島根（一九八一）

~~~~~

序文

皇國日本の國體は、萬世一系の天皇之を統治し給ふ神聖無比の神國である。畏くも天皇は神聖不可犯にましまして天立君主であり、唯一絶對にして宇宙間何物も對立するものがなく、憲法は君主立憲制である。

日本の天皇は宇宙絶對なるが故に、時刻ならば必ず宇宙を統一遊ばす御方である。國防などと謂ふ消極的なものでなく、所謂破邪顯正の絶對的境地に御立ちにならなければならぬ。如何なる強國でも、横暴なれば押へ付けねばならぬ、如何なる小弱國と雖も、正義であるなれば援けねばならぬ。全く造化の御心持で、宇宙を生成化育する事が日本天皇の御心持であらせられる。故に皇道は君と臣下と對立

するものでなく、絶対唯一のものである。忠孝と謂つても、日本の忠孝は絶対の大忠大孝でなくてはならぬ。

吾人は斯かる尊き天津日嗣天皇の君臨あらせられし日本に、安逸なる生を送り得る事の大恩を感謝せなくてはならぬのである。そして皇道の大本源に溯り、その真相を闡明し奉るは吾等臣民の一大義務である。

この物語も、餘り廣範圍に亘るが故に、容易に諒解し難き憾みはあれども、日本人にして皇道を知らざる人士の多きは、非常時國家の今日忌々しき大事なれば、神務の閑を割きて、茲に本書を著述し、以て大本信徒をして宇宙の大本、皇道の本源を諒解せしむべく、天神地祇に祈願を怠らず、本書を發行する所以である。

昭和八年十二月二十日 舊十一月四日

於大坂分院蒼雲閣 口述者識

第一篇 波濤の神光

第一章 濱邊の訣別（一九五七）

萬里の大海原に浮びたる萬里の島ヶ根は、その面積約八千里にして、豊葦原の瑞穂の國の發祥地なりければ、土地殊に肥え、春夏秋冬の四季の順序正しく、萬物の發育又極めて良好なりければ、味よき果物や美しき花に害蟲の好んで簇生するが如く、八十曲津見は千代の棲處と此處に暴威を振り居たりけるが、八十柱の御樋代神の石柱とまします田族比女の神は、主の大神の神宣を畏み給ひ、十柱の女男の神將を率ゐて此島ヶ根に降臨し、生言靈の劍を抜き持ちて、荒ぶる神等を山の尾ごとに追伏せ河の瀬ごとに追攘ひて打ち譴責め給ひ、心安く心樂しき神國と定め給ひける。折しもあれ高地秀の宮居に親しく仕へ給ひし八柱御樋代神の中にても最も美はしく最も面勝神と射向ふ神なる朝香比女の神が、女男四柱の神



を従へ、しばし此土に御跡をとどめ給ひしより俄に國形新まり、其威光を日に月に加へ給ひけるこそ目出度けれ。加ふるに曲神の最も忌み恐るる眞火を切り出づべき燧石を、此國土の御寶として朝香比女の神御手づから授け給ひしより、日に國土治まり、總ての國津神等は其恩恵に浴し、火食の道を盛んに行ひにける。主の大神の生み給ひし八十國八十島の中にて、最も早く火食の道を始めたは狭野の里なれども、國內一般に火食の道を開きたるは、この萬里の島をもつて濫觴となす。故に一名火の國とも稱へける。

是より程經て朝香比女の神の勧めにより、太元顯津男の神は西方の國土を治め、朝香比女の神に國魂神の養育を任せおき、照男の神をして西方の國土を守らしめ置き、潮の八百路を渡りて萬里ヶ島に天降り給ひ、茲に田族比女の神に御水火を合せ給ひ、左右りの大神業を終へて國魂神を生ませ給ひ、國土の基礎定まるを見すまして再び高照山北面の稚國原を修理固成すべく進ませ給ひしなり。本卷に於て其經緯を略序せむと欲す。

朝香比女の神及び女男四柱の神々が、萬里ヶ島を立ち去らむとし給ふや、田族

比ひ女めの神かみは十と柱しらの神かみ々がみを率ひきゐて御み來くり矢やの濱はま邊へまで馬ば上やう豊ゆたかに見み送おくらせ給たまひ、訣けつ別べつの御み歌うたを互たがひに交かはし給たまひける。

茲ここに朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み舟ふねに乘のらせ給たまはむとして駒こまを下おり、田た族から比ひ女めの神かみに對たいして御み歌うた詠よませ給たまふ。

新あたしき國くに土にの榮さかえを祈いのりつつ

別わかれてゆかむ西にし方かたの國くに土にへ

田た族から比ひ女め御み樋ひろ代がみ神かみは平たいけく

安やすらけくませ國くに魂たま生うますと

四よ方も八や方もの雲くも霧きり晴はれて月つき日ひ稚わかき

國くに土にの榮さかえの思おもはるかな

顯あき津つ男をの神かみにしあへば汝なが神かみの

功いさをを審つぶさに語かたり傳つたへむ

美うるはしく雄を々をしくいます田た族から比ひ女めの

神かみの眞心まごころ傳つたへまつらな

短みじかけれどこの新國にひくに土にに留とどまりて

吾わが魂たましひ線しんは足たらひけるかな

御樋みひ代しろ神が手がづからたまひし寶石たからいしを

清きよき御魂みたまと朝夕あさゆふ仰あふぐも

曲津まがつかみ神かみ荒すさび狂くるはむ事ことあらば

眞火まひの力ちからに追おひそけたまへ

海原うなばらの雲霧くもぎり晴はれて浪なみの秀ほは

天津あまつ日光ひかげにかがやき渡わたるも

別わかれゆく今日けふの名殘なごりは惜をしめども

留とどまるよしなき吾われなりにけり〆

田族たから比女ひめの神かみは酬こたへの御歌みうた詠よませ給たまふ。

雄々しくて優しくいます朝香比女の

神に別ると思へば悲しも

顯津男の神に吾事まつぶさに

宣らすと言ひし公に感謝す

此國土の千代の固めの寶なる

燧石をたまひし嬉しさに泣く

何よりの貴の寶よ燧石もて

治まる國土に曲神はなし

公が御行天津日光も祝ぎまして

大海原を晴らさせたまへり

朝宵に公の御幸を祈りつつ

神の御前に仕へまつらむ

萬里ヶ丘に公が記念と美はしき

宮居造りて仕へまつるも

八柱の御樋代神の天降りましし

此の島ヶ根は特に尊し

萬世に傳へ傳へて朝香比女の

御魂を祀り守り神とせむ

火の神と御名を稱へて朝香比女の

大宮柱太しく仕へむ

永久に公が御魂を止めおきて

この新國土を守らせたまへよ

千早振る神世も聞かず朝香比女の

八柱神のいでまし尊し

今日よりは御空の月日も光清く

照り渡るらむ公の御稜威に

靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 御來矢の濱邊に公を見送りて

名殘惜しさに涙こぼるる

如何にしても止めむよしなき朝香比女の

神のいでたち惜しまるるかな

永久にこの新國土に御魂を

止めて吾等を守らせたまへ

新しき國土の寶を賜ひつつ

旅に立たすよ光の神は

いざさらば潮の八百路も恙なく

進ませたまへ面勝の神

輪守比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 天晴れ天晴れ光の神は歸りますかと

思へば惜しき今日の別れよ  
田族比女神に賜ひし燧石は  
公の光と千代を照らさむ  
天地に又なき寶を賜ひつつ  
出で立たす公を送る淋しさ  
曲神は如何に伊猛り狂ふとも  
光賜ひし國土はやすけむ  
曲津見の伊猛り狂ふ曉は  
焼き滅さむ山に火をかけて  
百萬の曲の猛びも何かあらむ  
ただ一點の眞火の光りに

若春比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 國くに土に稚わかく春はるの陽やう氣きの漂ただよへる

國くに土にに仕つかふる若わか春はるの神かみ

若わか春はるの神かみも悲かなしくなりにけり

朝あさ香かの比ひ女めの旅たび立たち送おくりて

瑞みづ御み靈たま一ひと日ひも早はやく天あ降もりませと

傳つたへたまはれ面おも勝かつの神かみよ

かかくのごと雄を々をしく優やさしく美うるはしき

女め神がみに別わかると思おもへば悲かなしも

惟かむ神ながらまた時ときあらば此この島しまに

天あ降もらせたまへ光ひかりの女め神がみよ

保もち宗むね比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 天あめ地つちの一いち度どに晴はれし思おもひせし



公きみ歸かへらすと思おもへば淋さびし

田た族から比ひ女め神かみに賜たまひし御み寶たからに

吾われは仕つかへむ公きみと仰あふぎて

萬ま里での島しまの生いきの命いのちの燧ひうち石いしこそ

千ち代よ萬よろづ代よの寶たからなりけり

國くに向むけの鋒ほこにもまして尊たふときは

公きみの賜たまひし燧ひうち石いしなりける  
」

直な道ほみち比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

久ひさ方かたの御み空そらはさやかに晴はるれども

吾わが魂たましひ線しんは曇くもらひにけり

幾いく千ち代よも萬ま里での島しま根ねにおはしませと

祈いのりし心こころも夢ゆめとなりしか

尊たふとかる八柱やはしら神がみの天降あもりましし

萬里までの國原くにはらは輝かがやきにけり

此この島しまの森羅すべてのものら萬象をおしなべて

今日けふの別わかれを惜をしみつつなく

許ゆるしあればせめて西方にしかたの國境くにさかひまで

御樋みひしろ代神がみを送おくりたきかな

田族たから比女ひめ神かみの功いさをは尊たふとけれど

一ひとしほ入たか貴きみき公きみが御光みひかり

萬世よろづよの記かたみ念きみと公きみが賜たまはりし

燧石ひうちは國土くにの光ひかりなるかも〆

田族たから比女ひめ神かみの神かみは朝香比女あさかひめの神かみに向むかひて御歌みうた詠よませ給たまふ。

☞ 朝香比女神あさかひめがみの神言みことよ直道なほみち比古ひこの

願ねがひをつばらに許ゆるさせたまへ  
直道なほみち比古ひこ神かみの御供みともに仕つかふるは  
吾わが御手代みてしろと思おぼし召めしまして  
』

朝香あさか比女ひめの神かみは酬こたへの御歌みうた詠よませ給たまふ。

雄を々をしかる直道なほみち比古ひこの眞心まごころを

吾われ嘉よみすれど許ゆるすすべなし

惟かむながら神かみの定さだめし十柱とほしらの

萬里まの島根しまねの柱はしらならずや

束つかの間まも十柱とほしら神かみの缺かくるあらば

萬里まの島根しまねは又またも動うごかむ

四柱よはしらの神かみを従したがへ出いでてゆく

吾われには何なんの艱なやみなければ

十柱とほしらの神かみを手足てあしと朝夕あさゆふを

國くに土に生うみの神わ業わざに使つかはせ給たまへ

御み樋ひ代しろ神がみの御み言こと葉は否いなむにあらねども

萬里まの新に國ひく土におも思おもふが故ゆゑなり」

田た族から比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 明あきらけき公きみの言こと葉はに照てらされて

答こたへの言こと葉は吾われなかりけり

御み教をしへを畏かしこみまつり十柱とほしらの

神かみと諸もろとも共に國くに土を拓ひらかむ

直道なほみち比古ひこの神かみよ心こころを落おち付つけて

公きみの御みの教のりに從したがひまつれよ」

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

二柱の女神の神言畏みて

高鳴る胸の火を鎮めなむ

万里の海は到る處に曲津棲めば

心し行きますせ朝香比女の御神

正道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

浪の音はいやさやさやに響かへど

心の海に浪たち騒ぐも

公が御舟かくるるまでも佇みて

見送る外にすべなかるべし

浪の上潮の八百路も安かれと

吾眞心われまごころに祈いのるのみなる

果はてしなき廣ひろき稚わか國くに土ま萬里でがヶ島しまの

記念かたみと賜たまひし燧石ひうちいしはも

田族たから比ひ女神めかみの御言みことば葉はをかしこみて

公きみが宮居みやゐを仕つかへまつらむ

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

顯津あきつ男をの神かみに會あはずと出いでたたす

公きみが旅路たびぢの遙はろけくもあるか

八潮路やしほぢの潮しほの八や百路ほぢも恙つつがなく

進すすませたまへ朝香あさか比女ひめの神かみ

四柱よはしらの御供みともの神等かみたちおはしませば

心こころやすけく御舟みふねを送おくるも

をりをりは思ひ出して萬里ヶ島に  
清き御魂を通はせたまはれ  
□

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

田族比女神の神言の眞心に

別れの涙止めあへぬも

朝香比女神の神言の御尾前を

守り進まむ御心安かれ

いろいろと生言靈のもてなしに

わが魂線はよみがへりつつ

なつかしき萬里の島ヶ根を後にして

潮の八百路を進みてゆかむ

此島は紫微天界の眞秀良場と

千代ちよに八千代やちよに榮さかえますらむ  
朝香あさか比女ひめの神かみに仕つかへて美うるはしき  
萬里まヶ島がしま根ねの國くに形がた見みしはや  
いざさらば名な残ごりは盡つきじ吾公わがきみの  
御尾み前を守さりて神國みくにに別わかれむ〆

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
〆

〆  
幾年いくとせもこの島しまヶ根がねに村肝むらきもの

心こころ清きよけく住すままく思おもひし

吾公わがきみの御供おんともなれば村肝むらきもの

心こころに任まかせぬ吾われなりにけり

牛頭ごづがみヶ峰ね白馬はくばヶ嶽がだけに立たつ雲くもを

遠行とほゆく舟ふねに仰あふぎて俣しのばむ



靈<sup>たま</sup>幸<sup>ち</sup>はふ神<sup>かみ</sup>世<sup>よ</sup>の初<sup>はじ</sup>めの田<sup>た</sup>族<sup>から</sup>國<sup>くに</sup>と

吾<sup>われ</sup>は思<sup>おも</sup>ひぬ萬<sup>ま</sup>里<sup>で</sup>の島<sup>しま</sup>根<sup>ね</sup>を

雲<sup>くも</sup>霧<sup>ぎり</sup>を吹<sup>ふ</sup>き拂<sup>はら</sup>ひたる萬<sup>ま</sup>里<sup>で</sup>ヶ島<sup>しま</sup>は

光<sup>ひかり</sup>にみつる貴<sup>うづ</sup>の國<sup>くに</sup>原<sup>はら</sup>よ

吾<sup>われ</sup>は今<sup>いま</sup>光<sup>ひかり</sup>の國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>を後<sup>あと</sup>にして

光<sup>ひかり</sup>の公<sup>きみ</sup>と海<sup>うな</sup>原<sup>ばら</sup>進<sup>すす</sup>まむ

田<sup>た</sup>族<sup>から</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>は光<sup>ひかり</sup>の神<sup>かみ</sup>とまして

萬<sup>ま</sup>里<sup>で</sup>の新<sup>に</sup>國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>を照<sup>て</sup>らさせたまへ

立<sup>た</sup>世<sup>つよ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

新<sup>あたら</sup>しき國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>の光<sup>ひかり</sup>を見<sup>み</sup>ながらに

吾<sup>われ</sup>は御<sup>み</sup>供<sup>とも</sup>に仕<sup>つか</sup>へて行<sup>ゆ</sup>くも

鳥<sup>とり</sup>獸<sup>け</sup>草<sup>くさ</sup>木<sup>き</sup>の端<sup>はし</sup>に至<sup>いた</sup>るまで

なつかしく思ふ萬里の島根は

すべてのものをみなわがとも  
森羅萬象皆吾友と親しみし

この新國土に別れむとすも

主の神の許しありせば吾も亦

この新國土に再び來らむ

田族比女神の神言の顔を

いや永久に若く守らむ

この島の別れにのぞみ田族比女の

神の優しさ若さを守らむ

十柱の神の御姿永久に

いや若かれと吾は祈るも

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

田族比女の神十柱の神いざさらば  
名残を惜しみて今や別れむ  
心若く永久にましませ萬里ヶ島の  
守りの神と光らせたまひつ

かく互に歌もて訣別の辭を述べたまひ、朝香比女の神初め四柱の神は駒諸共に  
磐楠舟にひらりと移らせたまへば、春とも初夏とも知れぬ陽氣にみてる清しき風  
は忽ち吹き來り、艫櫂を用ひたまはぬに御舟は波上靜に動き出でにける。

（昭和八・一二・二〇 舊一一・四 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録）

## 第二章 波上の追懷（一九五八）

朝香比女の神の乗らせる磐楠舟は、薄霞棚引く初夏の海原を悠々として辿り行

くを、御影の隠るるまで、田族比女の神の一行は名残惜しみつつ見送らせ給ひ、  
御歌詠ませ給ふ。

☐ 天晴れ天晴れ光の神は出でましぬ

浪の秀隈なく照らし給ひつ

懐かしき光の神に永久に

訣別ると思へば悲しき吾かも

美はしき優しき雄々しき比女神の

御舟を送る悲しき吾なり

手をあげて訣別を惜しみ給ひつる

比女の優しき心ばせかも

顯津男の神の天降らせ給ひてし

思ひするかな比女の出でましは

顯津男の神に訣別るる身のつらさ

思おもひ浮うかべて悲かなしき吾われなり

此この廣ひろき神みくに國くにの親おやと選えらまれて

吾われは悲かなしき今け日ふに逢あひける

今いまよりは心こころの駒こまを立たて直なほし

比ひ女めの心こころに報むくひ奉まつらむ

八やしほ潮ぢ路ぢの潮しほの八やほ百ぢ路ぢの八やしほ潮ぢ路ぢを

踏ふみ分わけ出いでます功いさを尊たふとき

永としへ久へに此この島しまヶ根がねに宮みや居や建たてて

比ひ女めの御みこころ心やす安やすんじ奉まつらむ

片かた時ときも早はやく御み舍あらか仕つかへ奉まつり

比ひ女めの御みたま魂たまを齋いつき奉まつらな

御みすがた姿がたはよし見みえずとも神かむな社びに

御みたま魂たま祀まつりて御みいさを功をし徳しのばむ

刻こく々こくに遠とほざかり行ゆく御おん舟ふねの

御影は吾を泣かしめにけり

萬斛の涙湛へて御來矢の

濱邊に御舟を送り奉るも

主の神の定めと思へど今一度

會はまくほしき公なりにけり

八潮路の浪の秀の旅安かれと

神言宣りて御神に祈らむ

輪守比古の神は海原を打見やりつつ御歌詠ませ給ふ。

天晴れ天晴れ御舟は遠くなりけり

吾は悲しさ彌まさりつつ

幾千代も公の御姿わが胸に

輝きまして忘れざるべし

けふひはなみたひらかにあまつひは

うららに照れり御舟幸あれ

振りかへ振りかへ振りかへついでませる

かみすがたのやさしくもあるか

たかちほのみねよりあも降りし神なれば

ひとしほたふとおはしける

みすがたふたたび見えむ術なしと

おもへば今日の訣別惜しまる

はてしなきおほうなばらの浪別けて

すすす公の幸かれと思ふ

たまやまひこのかみはみうたよたま  
靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

おんわかれあまをかなしさに  
御訣別餘り惜しさに悲しさに

われ言靈を參らせざりける

萬里の島の光を賜ひし比女神の

出でまし送りて何か淋しき

朝香比女神の珍しき出でましに

稚國原はよみがへりたり

浪路遙かに御舟小さくなりにつつ

吾眼界を離れむとすも

保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。

白馬ヶ嶽清き姿は彌永に

公の御行を送りまつらむ

吾眼小さくあれば公が行く

御舟は早くも見えずなりけり



白馬ヶ嶽の峰羨ましも比女神の

御行を永久に送りまつれば

御來矢の濱邊に立ちて送り奉る

御舟は早くも目路を離りぬ

永久に留まりたまへと祈りてし

光の公は歸りましける

此上は御樋代神に眞心を

盡して國土に仕へまつらむ

此國土の寶と比女の賜ひたる

燧石の光に世をまもらばや

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

此國土に光となりて天降りましし

神かみは情つれなく歸かへりましける

會あふ事ことの嬉うれしきものを今日けふはしも

悲かなしき訣わか別に御舟みふね送おくるも

永とこ久しへに忘わすれぬ公きみとなりけり

此この稚わか國かく土にに光ひかりを賜たまへば

朝あさ夕ゆふに火ひの若わか宮みやに仕つかへつつ

公きみの功いさをを讚たたへ奉まつらむ

心こころ清きよく優やさしくまして雄を々をしかる

比ひ女めは眞ま言ことの神かみなりけり

正まさ道みち比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

𠄎 舷ふなばたに打寄うちよす浪なみの響ひびさへ

いや次々つぎつぎに遠とほざかりける

輝ける白き優しき御面は

浪の秀高く隠れましけり

天津日の浪に沈ます思ひかな

光の神は目路を離れり

永遠に仕へ奉ると思ひてし

朝香の比女は此國土になし

田族比女神の神言に畏みて

吾は朝夕仕へまつらむ

白馬ヶ嶽の醜の曲津も比女神の

功に驚き逃げ失せにけむ

牛頭ヶ峰白馬ヶ嶽の頂を

振返りつつ御覽すらむ

白馬ヶ嶽の麓に小さき吾ありと

俣ばせ給へ朝香比女の神

雲川比古の神は御歌詠ませ給ふ。

今となりて惜しみ奉るも詮なけれ

只眞心を捧げ御魂に仕へむ

御舟の影さへ見えず歎かひの

涙しげしげまさり行くかも

此島の森羅万象おしなべて

公に名残を惜しみつつ泣かむ

百草の花も萎れて今日の日の

濱邊の訣別惜しむがに見ゆ

御空行く陽光も薄ら曇らひつ

今日の訣別を惜しませ給へる

山跡比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 天も地も照らして隈なき比女神の

御姿今は見えずなりける

せめてもの記念と賜ひし燧石は

萬里の神國の光なるかも

寶石の光は如何に貴くとも

國土を救はむ代にはならず

奉るものもなければ止むを得ず

卑しき寶を奉りける

心よく受けさせ給ひし比女神の

優しき心を忝なみ思ふ

如何にせむ光の神は歸りましぬ

萬里の海原の浪踏み別けて

永久に公の功を畏みて

火の若宮に仕へまつらむ』

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

國土稚き萬里の島根に吾ありて

今日の悲しき訣別に遇ふも

懐かしく優しく雄々しき比女神に

吾魂線はいつかひにけり

吾魂は公の御身にいつかひて

海原遠く守り行くらむ

御功の尊くませば比女神の

靈衣は廣く四方を照らせり

眞心の尊さ始めて覺りけり

御身に溢るる貴の光に

天も地も公の宣らす言靈に

従ひまつると思へば畏し

湯結比女の神は御歌詠ませ給ふ。

今日よりは比女の賜ひし燧石の

功に清き湯をむすぶべし

朝夕に火の若宮に仕ふべく

御湯をむすびて襖せむかな

みはるかす大海原は廣らかに

御舟の影も見えずなりける

いざさらば田族比女の神の吾公よ

萬里の聖所に歸りませずや

いつまでも浪の秀見つつ偲ぶとも

詮なきものを早や歸りませ

茲に田族比女の神一行は、目路を離りし御舟に諦めの心を定め、雄々しくも駿

馬こまの背せに跨またがり蹄ひづめの音おとも勇いさましく、其その日ひの黄たそが昏るる頃ころ、無ぶ事じ萬ま里での丘をかの聖すがど所に歸かへり着つき給たまひ、時ときを移うつさず夜よを日ひに繼ついで火ひの若わか宮みやの工こう事じにかからせ給たまひけるが、旬じゆん

日じつならずして神かみの幸さちひ彌いや厚あつく、莊さう嚴こんなる若わか宮みやは築きづかれにける。

茲こゝに湯ゆ結むす比ひ女めの神かみは朝あさ夕ゆふ火ひの若わか宮みやに仕つかへまし、主スの神かみを始はじめ火ひの神かみと稱たへまつりし朝あさ香か比ひ女めの神かみの生いく魂たまに白さ湯ゆを沸わかして笹さ葉さに浸ひたし、左さ右う左さに打うち振ふり朝あさ々ぎぎの身み魂まを清きよめ御み湯ゆを御み前まへに奉たてまつりて忠まめ實やかに仕つかへ給たまひける。是これより今いまの世よに到いたるまで何いづれの神じん社しゃにも御み巫かんなるものありて、御み湯ゆを沸わかせ、神しん明めいに奉たてまつる事こととはなりたるなり。朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み來くり矢やの濱はまを立たち出いで給たまひ、御み舟ふねの中なかより田た族から比ひ女めの神かみの一い行かうに訣わか別かれを惜をしみつつ、振ふり返かへり振ふり返かへり御み手てを擧あげさせ給たまひ御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 天あ晴はれ天あ晴はれ御み樋しろ代が神かみの現あれませる

萬ま里での島しま根ねに訣わか別かれむとすも

神かみ々がみの優やさしき心こころに絆ほだされて

思おもはず月つき日ひを重かさねけるかも



永久とこしへに住すみたたく思おもへど主スの神かみの

依よさしに背そむく術すべなき吾われなり

雄を心の大やまと和とこ心を振ふり起おこし

惜をしき訣わか別かれを告つげにけるかな

いつまでも訣わか別かれる機し會ほのなかるらむ

雄を々をしき健たけき心こころ持もたずば

神かみがみ々の心こころ知しらぬにあらねども

神みわ業び思おもひて吾われは訣わか別かれれし

神かみがみ々は濱はま邊べに立たちて吾わが舟ふねを

心こころ優やさしく見み送おくり給たまへる

萬よろづ世よの末すゑの末すゑまで忘わすれまじ

眞ま言こと輝かがく神かみがみ々の心こころは

百ひやく年ねんの親したしき友ともに會あへる如ごと

隔へだてなかりし神かみがみ々々を思おもふ

吾舟は浪路遙けくなりける

島の神々安くましませ

眞鶴の聲も悲しく聞えけり

萬里の新國土去らむと思へば

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

二柱比女神等の神宣

聞くにつけても涙ぐまるる

斯の如優しき清き神々の

生言靈を聞かざりにけり

比女神は斯くあるべきを大方の

心は嫉み妬みに滿つるも

御樋代の神と神との言問ひの

其その優やさしさになみだ涙ぐまれつ

御み來くり矢やの濱はま邊べにはろばる見み送おくりし

神かみの優やさしき心こころばせをおも思おもふ

地つち稚わかき國くに土ひらを拓くかす苦くるしさを

思おもへば吾われは心こころ畏かしこむ

眞ま心ごころの限かぎりをつく盡あし愛あい善ぜんの

道みちにすす進すすます百もも神かみ天あ晴はれ

吾わが舟ふねは浪なみの秀ほ遠とほく離さかりつ

濱はま邊べに立たたす神かみ見みえまさず

次つぎ々つぎに舟ふね遠とほざかり行ゆく海うな原はらに

益ます々ます近ちかく親したしき神かみ々かみよ

神かみ々かみの御み姿すがた見みえなくなりにけり

白はく馬ばヶが嶽だけの峰みねはひか光ひかりつ

白はく馬ばヶが嶽だけ聳そ立たつ國くに土におはします

神々等の御姿なつかし  
□

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。  
おきたつひこのかみはみうたよたま

廣き稚き國土は吾目路離りつつ  
ひろわかくにわがめぢさが

白馬ヶ嶽の峰のみ光れる  
はくばがだけみねひか

萬里の海に浮べる萬里の生島は  
まであうみうかまであいくしま

永遠に榮えよ天地と共に  
とほはさかあめつちとも

刻々に遠ざかり行く島ヶ根を  
こくこくとほゆしまがね

懐かしみつつ吾は行くなり  
なつわれゆく

果しなき此海原の中にして  
はてこのうなばらなか

萬里の島根は戀しき國土なり  
までしまねこひくに

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。  
たつよひめかみはみうたよたま

御樋代の神に仕へて萬里ヶ島の

聖所に清く吾は遊びぬ

草も木も百鳥千鳥も稚國土の

春をうたひて長閑なりけり

雲霧も隈なく晴れて天津日の

御影清しき萬里の國土はや

御樋代の神御自ら御來矢の

濱邊に公を見送りましたまひし

吾舟は浪の鼓を打ちながら

比女に訣別を告げにけらしな

比女神の優しき姿目に浮きて

忘れぬ君となりにけらしな

顯津男の神に見合ひす其日まで

若く優しくいませと祈るも

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 天も地も晴れ渡りたる海原を

公に訣別れて行くは淋しも

比女神を始め十柱神等の

優しき心仰がるかな

優しくて雄々しくいます神々は

醜の曲神を退ひ給ひし

漸くに御來矢の濱も遠くなりて

白馬ヶ嶽はひとりかがよふ

吾舟は太平の浪を辿りつつ

公を守りていや進むなり

海原を包みし霧も晴れ渡り

楽しき今日の舟の旅かも

(昭和八・一二・二〇 舊一一・四 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

### 第三章 グロスの島しま（一九五九）

紫微天界しびてんかいは未だ國土くに稚わかく、國形くにがたも完全くわんぜんには端々はしばしに到りては定さだまらざりければ、  
あちこちの稚國わかくに原はらには妖邪えうじゃの氣き凝り固かたまりて種々しゆじゆの動植物どうじよくぶつを生うみ、特に異樣いやうの動  
物ぶつ數多あまた棲息せいそくして妖邪えうじゃの氣きを四方よもに飛散ひさんせしめ、森羅萬象しんらばんしやうの發育はついくを妨さまたぐるも是非ぜひな  
き次第しだいなりける。

ここに主すの大神おほかみは完全くわんぜん無缺むけつの神かみの國くにを開設かいせつし給たまはむとして、天之道立あめのみちたつの神かみ、太  
元もと顯津男あきつをの神かみの二柱ふたはしらに靈界れいかい現界げんかいの神業みわざを委任ゐにんし給たまひければ、天之道立あめのみちたつの神かみは惟神かむながら  
の大道だいたうを宣布せんぷし、日夜にちやう倦うませ給たまはず、顯津男あきつをの神かみは國土くにを治をさむべき司神つかさがみを造つくらむ  
として、國土くにのあちこちを經廻へめぐり給たまひ、主すの神かみの生うませ配くばり置おき給たまひし御樋代神みひしろがみ  
と見合みあひまして、國魂くにたま神生がみうみの神業みわざにいそしみ給たまふ神定かむさだめとはなりける。

邪神の中には數箇の頭をもてる龍あり、大蛇あり、又翼の生えし虎あり、狼、熊等ありて島の中に棲息し、水陸兩方面を兼ねて棲まへるなどありて、容易に正しき神の日々の經綸を許さざりける。故に主の大神はこの妖魔を根底的に言向けやはし、征服し、全滅せしめむとして英雄的素質を持たせる神々を紫微天界の四方に派遣し給へるなりける。

御樋代の神は總て女神にましませども、いづれも優美なる容姿に似ず、勇猛剛直にして神代の英雄神のみを選まし給ひければ、その御行動の雄々しくましますことは自然の道理におはしましけるぞ畏けれ。

萬里の島根を永久に  
基礎を固むる御樋代の  
八柱神と生れませる  
朝香比女神は雄々しくも  
長の旅路に立ち給ひ  
百の艱みをしのびつつ  
あなたこなたの國形を  
うま怜に委曲に固めつつ  
狹野の島ヶ根生み終へて  
天中比古を司とし



いよいよ進んで萬里の島　この稚國土を固めむと

御樋代神に迎へられ　萬里ヶ丘なる聖所に

生言靈をとり交し　國土の寶と燧石

田族の比女に贈らせつ　七日七夜の逗留を

漸く終へて御來矢の濱より舟に乗らせつつ

永久の別れを惜しみまし　萬里の海原靜々と

波路を分けて進みます　ああ惟神々々

神の言靈幸はひて　朝香の比女の恙なく

瑞の御靈の現れませる　雲霧深き西方の

國土に出でます物語　うま伶に委曲に落ちもなく

述べさせ給へと瑞月が　蒼雲閣に端坐して

生言靈の幸はひを　大本皇大神の

御前に畏み願ぎ奉る　うすき冬陽の輝ける

蒼雲閣の清庭に　吾立ち居れば大空を

轟かせつつ三臺の飛行機來りて舞ひ狂ひ

非常時日本の光景をしみじみ吾に思はせり

ああ惟神々々わが述べてゆく物語

生言靈の幸はひて非常時日本を救ふべき

よすがとなれば道の爲御國の爲の幸はひと

謹み敬ひ述べてゆく吾言靈に幸あれよ

吾言靈に生命あれ。

朝香比女の神の乗らせ給へる磐楠舟は、大小の島々を右に左に縫ひながら日の  
黄昏る頃、曲神の集まると聞えたるゴロスの島に近より給へば、名にし負ふ曲  
神の島は俄に黒煙を四方に吐き散らし、海面を闇に包みて御舟さへ見えなくなり  
ける。

このゴロスの島には、ゴロスと言ふ猛悪なる大蛇の神棲息して、數多の醜神を  
使役し、隙あらば總ての島々を侵さむとしつつ待ちかまへ居たるに、今ぞ御樋代

神の御舟、この島に近づきければ、グロスの島の曲津神グロノス、ゴロスの二巨頭は、あらゆる曲神を呼び集め、必死となりて御舟の近づくを妨害せむと伊猛り狂ひける。

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

二百漕吾渡り来て黄昏れつ

グロスの島に近づきしはや

此島にグロノス、ゴロスの曲津神

潜むと聞きて舟よせにける

曲津見はここを先途と黒煙を

吐き散らしつつ四方を包めり

言靈の水火の光りと鋭敏鳴出の

神のたまひし燧石にかためむ

曲神の勢如何に猛くとも

火をもて焼かば容易に滅びむ

曲神は如何に勢強くとも

眞言の力なきものぞかし

黄昏の闇に戦ふ不便さに

波にうかびて朝を待たばや

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

比女神の神言畏し曲神は

朝日を待ちて滅すぞよき

天界にさやる曲津の種をたやし

安き神國と定め奉らむ

黄昏の闇は海原悉く

包めど吾には火をもてりけり

御舟おんふねに眞火まひを照てらして明方あけがたを

静しづかに待またむ魔まの島しま近ちかく

面白おもしろき海路うなぢの旅たびよ曲神まががみの

百もものいたづら見みつつ進すすむも  
〆

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。  
〆

狭野さぬの島しまの魔神まがみもこここゝに集あつまりて

行手ゆくてにさやると伊猛いたけるならむ

黒雲くろくもの幕まくに包つつめど吾舟わがふねは

眞火まひの光ひかりに安やすかりにけり

明あけ方がたを待まちていよいよ魔まの島しまを

焼やき滅ほろほすと思おもへば樂たのしき

曲神まががみよ吾上陸わがじやうりくに先さき立だちて

服従まつろひ來きたれしからば許ゆるさむ

比ひ女め神がみに汝なれら等らが生いのち命こ乞こひうけて

眞ま言ことの道みちに救すくひ助たすけむ

一ひと夜よの生いのち命ちと思もへば曲まが神かみの

身みこそあはれになりなりにけるかな

グロスの島しまより湧わき立たつ黒くろ雲くもは、次し第だい々し々だいに雲くもの峰みねの湧わく如ごとくふくれ上あり、擴ひろごり、四あ邊たりの海うみ面もを眞しんの闇やみと包つつみ、青あ白をき火くわ團だんは御み舟ふねの周しゅう圍ゐを螢ほ合たる戰がの如ごとく飛とび交かひ狂くるひめぐり、凄せい慘さんの氣き闇やみと共ともに漂ただよひにける。

朝あ香さ比か女ひめの神かみは少すこしも驚おどろき給たまはず、平へい然ぜんとして曲まが神かみの種くさ々くさの業わざを御み覽そしなながら、御み歌うた詠よませ給たまふ。

面おも白しろき曲まが神かみなるかかも闇やみの海うみに  
青あ白をき火ひとなりなりて飛とべるも

曲神まががみの火ひは青白あをしろく光ひかりなし

鬼火おにびか陰火いんくわか熱あつからぬかな

火ひの玉たまと見みれども光ひからず熱あつからず

海月くらげの如ごとくただよへるかも

明日あすさらばグロノス、ゴロスを言こと向むけて

この魔まの島しまを清きよめむと思おもふ

八潮路やしほぢの長ながき旅路たびぢに疲つかれはてて

曲津まがのすさびを見みるは樂たのしき

百千萬ひやくせんまんの火團くわだんとなりて猛たけり狂くるふ

状面さま白おもしろく舟ふねの上へに見みつ

吾わが舟ふねは波なみに浮うかべど動うごかざり

生言いくこと靈たまの錨いかりにつなげば

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ 炎々えんえんと御空みそらの月つきをかくしつつ

魔まの島しまヶ根がねゆ黒雲くろくも立ちたつ

曲神まががみは黒雲くろくも起おこしおく深くふか

しのびつ怖おぢつ狂くるふなるらむ

曲神まががみの數あまた多つど集つどへるゴロスしの島しまを

今日け珍めづしく黄昏たそがれて見みつ

黄昏たそがの海うみにうつらぬ火ひの玉たまは

正まさしく陰火いんくわのしるしなりけり

眞火まひなれば波なみの底そこまで輝かがかむを

青白あをしろきのみ光ひかりだになし

言靈ことたまの生いける光ひかりに照てらされて

グロノス、ゴロスも滅ほろび失うすべし

御樋代みひしろの神かみの出いでましに魔まの島しまは

清きよきすがしき國くに土つと生なれむむ ㊦



天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 吾こそは御供に仕ふる天晴の

比女神なるよ御空晴らさむ

一二三四五六七八九十

百千萬の神集ひませ

大空の月を照らして魔の島の

曲津見の頭を現はさむかも

斯く歌ひ給ふや、魔の島の上空を包みし黒雲は次第々に科戸の風に吹き散ら  
されて、天空明く清く圓滿清朗の月影は浮ばせ給ひ、波の底深く輝き給ひける。

ここにグロノス、ゴロスの曲津神は夜の明くるまでに御舟の神等を滅しくれむ  
と死力を盡し一百有餘旬の龍蛇の姿を現し、數頭の頭には各自太刀の如き角をか  
ざししながら、頻りに御舟に向つて火焰を吹く光景はもの凄きまでに見えにける。

朝香比女の神は平然として微笑みながら御歌詠ませ給ふ。

☐ 勇ましやグロノス、ゴロスの雄猛びは

吾行く旅をなぐさめにける

火を吐けど角はふれども眼は光れど

吾には何の難み覺えず

力限り雄猛び狂ふ曲神の

心思へばあはれなるかも

兔も角も曉まではこの舟に

吾休らはむ心安けく

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 一夜の生命と思へば曲神も

最後の荒びあはれなるかな  
常闇をうすら照らして曲神は

あまたの口より焰を吐くも

光にぶき松明と思へば面白し

月は御空に輝き給へど

月讀の光りますますさやかにて

魔の島ヶ根の雲はあせたり

ところどころ魔神の吐き出す黒雲は

次第々々にうすらぎしはや

斯くの如浅き奸計の曲神の

雄猛び見れば雄心わくも

明日さればこの島ヶ根を悉く

焼き清むべし曲神退け

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

海中わだなかに永久とほに浮うかべる魔まの島しまの

雲くもは晴はれけり月の光ひかりに

月つき冴さゆる萬里まの海原うなばらに浮うかびたる

グロスの島しまは全またく現あれけり

この島しまも思おもひしよりは廣ひろくして

あまたの曲まがみ神さわ騒まはぎ廻まはれり

この島しまも主すの大神おほかみの生うみませる

生島いくしまなれば清きよめ奉まつらむ

日けなら竝なべて神かみの神業みわざに仕つかへつつ

又またも樂たのしき明日あすを迎むかへつつ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 黒雲は島のあちこちに太く高く

立てども明日は跡形もなけむ

黒雲を時じく起して天地の

水火を濁せる曲神の島かも

この島の曲神ことごと言向けて

稚き國原生むは樂しも

この島に御樋代神の籠らすと

聞きしは夢か黒雲立ちたつ

御樋代の神も悪魔の雄猛びに

暫し御姿をかくし給ふか

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 天も地も生言靈の御光りに

照らして稚き國土を生まばや

天晴比女神の御供に仕へつつ

この島ヶ根の雲を晴らさむ

各神々はグロスの島に向つて明日の征途を樂しみながら御歌詠ませつつ、一目も眠らせ給はず磐楠舟の上にあんざして、種々のことを面白可笑しく語り合ひつつ夜の明方を靜に待たせ給ひけるぞ畏けれ。

（昭和八・一二・二〇 舊一・四 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録）

#### 第四章 燒野の行進（一九六〇）

東の空は漸く東雲めて、海面を飛交ふ鷗の聲は彼方此方よりものやさしく響き來り、グロスの島ヶ根はカラリと明けて鷹巢の山は屹然と島の東方に聳えたち、

天津日は悠然として紅の幕を別けながら昇らせ給ひ、昨夜の物凄き光景はあとなく消え失せ、眞鶴の聲、鵲の聲、冴えに冴えつつ、朝香比女の神の一行を迎へまつるものの如し。

朝香比女の神は御舟を千引巖の碁列せる濱邊に静々と寄せ給ひ、駒諸共に御舟を出でて陸地に一行出でさせ給ひ、初頭比古の神は御舟を濱邊の片方にかたく結びつけ、起立比古の神外二柱の女神と共に陸に上らせ給ひつつ、萱草、葦の莽々と道のなきまで生ひ茂りたる原野を御覽しつつ初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

荒れ果てし島にもあるか萱草の

生ひ茂りたる野は限りなし

よしあしの道を塞ぎて茂りたる

島根は曲津の潜むも宜なり

駒の脚いるる隙さへなきまでに

生ひ茂りたるよしあし原よ

わがきみ公に畏れ多おほけれどいや先さきに  
駒こまをうたせて道別みちわけせむかな〆

朝香比女あさかひめの神かみは馬上ばじやうに跨またがり、御歌詠みうたよませ給たまふ。

見みはるかす島しまのことごと醜草しこぐさに〆

包つつまれけるかも曲津まがの棲處すみかは

曲神まががみはこの草原くさはらに潛ひそみゐつ

百ももの災起わざはひおこすなるらむ

見みの限かぎり雲立くもたち昇のぼり霧湧きりわきて

風かぜさへ冷ひゆるあらしき國原くにはらよ

この國土くにを拓ひらかむとして葦原比女あしはらひめ

神かみは早はやくも渡わたらせ給たまへる

葦原比女神あしはらひめがみの神言みことのみあらかに



進<sup>すす</sup>み語<sup>かた</sup>らむ時<sup>とき</sup>の待<sup>ま</sup>たるる

グロノスやゴロスの潜<sup>ひそ</sup>むこの島<sup>しま</sup>は

鳥<sup>とり</sup>の鳴<sup>な</sup>く音<sup>ね</sup>も悲<sup>かな</sup>しげに聞<sup>きこ</sup>ゆ

眞<sup>まなづる</sup>鶴<sup>つばさ</sup>は翼<sup>つばさ</sup>揃<sup>そろ</sup>へて鷹<sup>たか</sup>巢<sup>しやま</sup>山の

尾<sup>を</sup>根<sup>ね</sup>をよぎりつ近<sup>ちか</sup>づき來<sup>きた</sup>るも

この島<sup>しま</sup>も眞<sup>まなづる</sup>鶴<sup>あまた</sup>數<sup>す</sup>多<sup>す</sup>棲<sup>す</sup>みけるか

翼<sup>つばさ</sup>の音<sup>おと</sup>の近<sup>ちか</sup>づき來<sup>きた</sup>るも<sup>〇</sup>

起<sup>おき</sup>立<sup>た</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>の神<sup>かみ</sup>に仕<sup>つか</sup>へて今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>も亦<sup>また</sup>

御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>がみ</sup>に會<sup>あ</sup>ふぞ目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>き

目<sup>め</sup>路<sup>ぢ</sup>の限<sup>かぎ</sup>り生<sup>お</sup>ひ茂<sup>しげ</sup>りたる草<sup>くさ</sup>の生<sup>ふ</sup>に

眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>を放<sup>はな</sup>ちて曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>を焼<sup>や</sup>かばや

この島しまにありとしあらゆる曲津見まがつみを

焼き滅ほろぼすと思おもへば樂たのしき

曲神まががみの眼まなこを醒さます眞火まひの光ひかりは

又またと世よになき寶たからなるかも〚

立世比女たつよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

曲神まががみといへどももとは主すの神かみの

水い火きより出いでし神かみなりにけり

鋭敏うな鳴出りづの神かみのたまひしこの眞火まひは

曲津まがを清きよむる劍つるぎなるかも

比女神ひめがみの生言靈いくことたまにグロスしまの島しまの

曲神まががみはいつかかけをかくしぬ

ひろびろと限かぎりも知らぬグロス島しまの

雑草あらくさの野のに風かぜさやぐなり〆

天晴あめはれ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

〆  
黒雲くろくもの覆おほひし昨夜よべに引替ひきかへて

御空みそら晴はれつつ日光ひかげ清すがしも

曲津まがつ見みは天津あまつ日の光ひに驚おどろきて

草葉くさばのかげに身みをひそめけむ

いろいろに言こと靈たま宣のりてさとせども

曲津まがつの耳みみは木耳きくらげなりしよ

かくならばこの生島いくしまを拓ひらく爲ために

眞火まひの荒すさびも是非ぜひなかるらむ

雲くもをぬく鷹巢たかしの山やまの山麓やまもとに

御樋みひ代神しろがみはおはしますらむ

御樋代の神のまします清宮居は

廣き流れにかこまると聞く

この野邊に火を放つとも御樋代の

神の宮居は恙無からむ

朝香比女の神は再び御歌詠ませ給ふ。

科戸邊の風は出でたりいざさらば

眞火を放てよこの草の野に

吾公の神言畏みいざさらば

眞火を放たむ初頭比古われは

かく御歌もて應へ給ひつつ初頭比古の神は、  
朝香比女の神の御手よりうやうや  
しく燧石を受取り、荒金の如き石もて燧石を、  
神言を奏上しつつカチリカチリと

打ち出で給へば、眞火は邊りに飛散し、忽ち幾年ともなく積れる萱草の茂れる根もとの枯草に眞火は移りける。折しもあれ、海面よりはげしく吹き來る風に吹きまぐられ、見る見る四方八方にひろがり、紅蓮の舌は四邊かまはず、木も草も生物もあとを絶てよとばかり舐めまはりける。

幾千里に亘る大原野は、見る見る黒焦げとなりて彼方此方に龍神、大蛇、猛獸等の焼け亡びたる姿、天日に曝され、無殘の光景をとどめけるにぞ、御樋代神は四柱の神に命じて各自その遺骸を土中に埋めさせ給ひつつ、數多の月日を費し給ひけるぞ畏けれ。

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

あはれなる醜の魔神は亡びたり

その遺骸をわれ葬りつ

グロノスやゴロスの曲津の司等は

未だ滅びず逃げ失せにける

曲津見は鷹巢の山の空指して

雲を起して逃げ去りしはや

かくの如焼き浄めたる大野原は

國魂神を移すによるしも

國魂の神をこの土に移し植ゑて

グロスの島を拓かむと思ふ

よしあしの群がり生ひしこの島は

土自ら肥えにけらしな

曲神の棲處はことごと焼かれたり

いざこれよりは神國をひらかむ

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神の姿の雄々しさよ

燃ゆる火の如輝きましつ

わが公は光の神にましませば

常世の闇も晴れ渡るなり

御空飛ぶ百鳥千鳥も驚きて

いづくの果てか姿かくしぬ

目路の果てに白煙たつはまさしくや

野火の燃えたつしるしなるらむ

風のあし如何に速けく走るとも

燃えつつ進む眞火はおくれむ

上べのみは燃え盡せども草の根は

未だ燃えつつ煙たちたつ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御供おんともに仕つかへまつりて今日けふの如ごと

雄々ををしき樂たのしき日ひはあらざりき

燃もえさかる野の火びの勢いきほひながめつつ

公きみの力ちからの功いさををおもふ

何なによりも尊たふときものと悟さとりけり

公きみが持もたせるこれの燧ひうち石いしは

萬ま里での島しまも公きみの賜たまひし燧ひうち石いしにて

魔ま神がみの潛ひそむ棲すみ處かは絶たえむ

ここきに來きて眞ま火ひの力ちからの功いさをし績しを

さとりけるかな起おきた立たつ比ひ古こわれは

數す十じ里ふりの野の邊べはみるみる燒やけ失うせぬ

風かぜの力ちからと眞ま火ひの功いさをに

立た世つよ比ひ女めの神かみは御みうた歌たよ詠よませ給たまふ。



☐ 黒雲くろくもの包つつみしグロスの島しまヶ根がねも

晴はれ渡わたりつつ月つき日ひかがよふ

晝ひる月つきの光かげ冴さえにつつ大おほ空ぞらに

吾われ等らが振ふる舞まひを見みつつ笑ゑませり

わが駒こまの脚あし下もと廣ひろくなりにけり

百もも草ぐさ千ち草ぐさ焼やきはらはれて

大おほ野の原はらにすくすくたてる太ふと幹みきの

松まつと楠くすとは蒼あをく残のこれり

火ひにさへもひるまぬ常とき磐は樹ぎの心こころこそ

朝あさ香かの比ひ女めの操みさをに似にたるも

天あめ晴はれ比ひ女めの神かみは御みうた歌た詠よませ給たまふ。

☐ 曲まが神かみの醜しこの棲す處みかは悉ことごとく

眞火まひの力ちからに拂はらはれにけり

海うみゆ吹ふく潮うしほの風かぜの強つよくして

見みる見みる荒野あらのは淨きよまりしはや

今日けふよりは如何いかに曲津まがつ見み荒あぶとも

恐おそれざるべし眞火まひの功いさをに

火ひを吹ふきて吾等われらをおどせしグロノスや

ゴロスの曲津まがつはいづらへ行きけむ

グロノスとゴロスの曲津まがつ見み罰きためずば

この國原くにはらは安やすからざるべし

葦原あしはら比ひ女神かみのみあらかを今いまよりは

勇いさみ進すすみて探たづねゆくべし

いざさらば御前みさきに立たちて仕つかふべし

天晴あめはれ比ひ女の神かみはうたひつ

果<sup>は</sup>てしも知<sup>し</sup>らぬ大野原<sup>おほのはら</sup>

眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>の力<sup>ちから</sup>に悉<sup>しつじつと</sup>く

焼<sup>や</sup>き拂<sup>はら</sup>はれし面白<sup>おもしろ</sup>さ

科<sup>し</sup>戸<sup>な</sup>の風<sup>かぜ</sup>にたすけられ

眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>は忽<sup>たちま</sup>ち四方<sup>よも</sup>八方<sup>やも</sup>に

ふくれ擴<sup>ひろ</sup>がりゴウゴウと

火<sup>くわえん</sup>焰<sup>ん</sup>の舌<sup>した</sup>を吐<sup>は</sup>きながら

總<sup>すべ</sup>てのものを焼<sup>や</sup>き盡<sup>つく</sup>す

その勢<sup>いきほひ</sup>の凄<sup>すさま</sup>じさ

馬<sup>ば</sup>背<sup>はい</sup>に跨<sup>またが</sup>り眺<sup>なが</sup>むれば

火<sup>ひ</sup>の海原<sup>うなばら</sup>の如<sup>ごと</sup>くなり

ああ惟<sup>かむながら</sup>神<sup>かむながら</sup>々々

御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>がみ</sup>の御<sup>み</sup>尾<sup>を</sup>前<sup>さき</sup>に

仕<sup>つか</sup>へて進<sup>すす</sup>む焼<sup>や</sup>野<sup>け</sup>原<sup>はら</sup>

駒こまの蹄ひづめもカツカツと

果はてしも知らしに進すすみゆく

この稚わか國くに土にの稚わか野の原はら

未まだあちこちに煙けむりたち

靄もやの如ごとくに棚たなび引ひけり

常とき磐はの松まつや楠くすのきは

彼かなた方こなた此こなた方げんとうの原げんとう頭に

緑みどりの梢こすえかざしつつ

グロスしの島しまの瑞ずゐ兆てうを

壽ことほぐ如ごとく見みえにけり

鷹たかし巢しの山やまに雲くも湧わきて

峰みねの百もも樹きは青あを々あをと

緑みどりに映はゆる目め出で度たさよ

御み樋ひ代しろ神がみと天あ降もります

葦原比女の神司  
あしはらひめ かむつかさ

五柱の神從へて  
いつはしら かみしたが

鷹巢の山の山麓に  
たかし やま やまもと

廣き流れをめぐらしつ  
ひろ なが

朝香の比女の出でましを  
あさか ひめ い

喜び迎へ待たすらむ  
よろこ むか ま

駒の歩みは速くとも  
こま あゆ はや

この高原の末遠く  
たかはら すゑとほ

鷹巢の山の麓まで  
たかし やま ふもと

進むは容易にあらざらむ  
すす ようい

この駿馬に大いなる  
ここの はやこま おほ

翼のあらば大空を  
つばさ おほぞら

鷹の如くに天翔り  
たか ごと あま かけ

進まむものを如何にせむ  
すす い か

焼野ヶ原をチヨクチヨクと

吾等は氣ながく進むべし

ああ惟神々々

公の御行に幸あれよ

公の御行に光あれ

かく歌はせつつ、大野ヶ原を五柱の神は吹き來る風に御髪を梳りつつ意氣揚々と、葦原ヶ丘の聖所を指して進ませ給ひける。

（昭和八・一二・二〇 舊一一・四 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録）

## 第五章 忍ヶ丘（一九六一）

朝香比女の神の一行は、際限もなき焼野ヶ原を馬背に跨り進ませ給ふ折もあれ、

野原のの眞中まんなかに小ちひさき丘をかありて、常磐樹ときはぎの松まつ數千本すうせんぼん、野火のの焰ほのほにも焼やかれず、青々あをあを  
と茂しげり居ゐたりける。

茲ここに一行いつかうは長途ちやうとの疲つかれを休やすめむと、駒こまを一いち々いち常磐樹ときはぎの幹みきに繋つなぎつつ、際限さいげんもなき大野おほのヶ原がはらを國見くにみし給たまひける折をりしも、いづくともなく悲かなしき聲こゑつぎつぎに聞きこえ來きたるにぞ、朝香比女あさかひめの神かみは怪あやしみに堪たへず、四邊あたりを見みまはしながら御歌詠みうたよませ給たまふ。

百鳥ももとりの聲こゑにもあらず駿馬はやこまの

嘶いななきならず怪あやしき聲こゑすも

ひそびそと歎なげき悲かなしむ聲こゑすなり

國津神くにつかみ等のひそみゐるにや

放はなちたる野火のの焰ほのほに身みを焼やかれ

國津神くにつかみ等の歎なげく聲こゑにや

國津神くにつかみこれの近處ちかどに住すみまさば

とくに出いでませよ慰なぐさめくれむ

吾こそは天津高宮ゆ天降りてし

御槌代神よ心安かれ

曲神をきたため亡ぼし國津神の

安きを守る吾は神なり

斯く歌ひたまふや、丘の南側を穿ちて此處を安處と永住し、附近の野邊を拓きて、穀物を植ゑ育てつつ、安き生活を送り來りし數十柱の國津神の男女は、蟻の穴を出づるがごとく、つぎつぎに神言の前に集り來り、恭敬禮拜久しうし、歌もて答へらく、

吾こそはこの島ヶ根に永久に住む

國津神等の群なりにけり

朝夕にグロノス、ゴロスの曲神に

虐げられて穴に住むなり



神々の御稜威に曲津は逃げしかども

吾ははその母傷つけり

吾母は煙にまかれかしらべの

髪ことごとく焼かれてなやめり

玉の緒の命も如何と思ふまで

ははその母はなやませ給ひぬ

主の神の恵みによりて吾母の

なやみを直に癒やさせ給はれ

朝香比女の神はこれを聞きて憐れみ給ひ、

火に焼けて傷つきし汝が母の身を

ただに癒やさむここに出でませ

曲津見の伊猛る國土も今日よりは

安く楽しく榮えゆくべし』

斯く歌ひ給ふや、國津神の野槌彦は、急ぎ土穴にむぐり入り、頭髪の焼け爛れて苦しみ悶ゆる老母を背に負ひ、御前に涙ながらに進み寄り、

『ははその母は傷つき給ひけり

命のほどもはかられぬまでに』

朝香比女の神は、直ちに數歌を宣り給ひつつ伊吹き給へば、老母の焼け爛れたる頭部顔面は元の如くに見る見るをさまり、頭髪は漆の如く黒々と瞬く間に若き女の如く生ひ立ちにける。

老母は嬉しさに堪へず、

『不思議なる野火に焼かれてなやみてし

吾もとのごと安くなりぬる

天津神の貴の恵みに助けられて

吾氣魂はよみがへりつも

比女神の恵みは永久に忘れまじ

天と地との續く限りは

野槌彦は感謝の歌をうたふ。

野槌彦われは久しくこの丘に

生きて始めて眞火を見たりき

天津神の光と燃ゆるこの眞火に

すべてのの曲津は亡び失すらむ

わが母は生言靈の幸はひに

神魂安けくなりけらしな

この恵めぐみいつの世よにかは忘わすれむや

御み樋ひ代しろ神がみの光ひかり仰あふぎつ  
□

朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。  
。

□  
國くに津つ神かみの日ひ々びの禍わざはひ除めかむと

大おほ野のヶ原がはらに火ひを放はなちつる

吾わが放はなつ眞ま火ひに焼やかれて汝なが母ははの

なやみし思おもへばあはれなりけり

曲まが津つ見みの禍わざはひ如いか何かに強つよくとも

天あまの數かず歌うた宣のりて被はらへよ

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七ゆ八な九な十や

百も千ち萬よろづと言こと靈たま宣のらさへ  
□

野槌彦は歌ふ。

有難し天津御神の神宣

國津神等に傳へて生きむ

果しなき大野ケ原のただ中に

永久の住處と定めし丘かも

この丘に生ふる常磐の松ケ枝に

鶴の來りて時々休むも

めでたかる常磐の松を神として

國津神等は齋きまつりし

今日よりは昔の手振改めて

主の大神を齋きまつらむ

有難き神世となりけり久方の

高日の宮ゆ神天降りまして

嬉うれしさの限かぎりなきかな黒雲くろくもの

御空みそらは晴れつつ神かみは天降あもれり

耕たがやしの業わざを損そこなふ曲津まがつみ見も

燒野やけのがはらヶ原すに棲すむ術すべなけむら

野槌ぬづちひめ姫ひめは野槌ぬづちひこ彦ひこのしりへに蹲うづくまりつつ、感謝かんしやの歌うたを詠よむ。

有ありがた難たき神かみの御稜威みいづに照てらされて

母ははの病やまひはをさまりにけり

今け日ふよりは神かみの傳つたへし數歌かずうたを

朝あさな夕ゆふなに稱たたへ奉まつらむ

この丘をかに永と久はに住すまへる國津神くにつかみも

神かみの御稜威みいづを永と久はに稱たたへむ

御諭みさとしの天あまの數歌かずうた日けなら竝ならべて

宣のりあげにつつ曲津まを祓ははむ

この丘をかは忍しのぶヶ丘をかと稱となふなり

曲津まの荒すさびを忍しのびて住すめば

この島しまを拓ひらかむとして十年ととせまへ前

龍たつの島しまより渡わたり來こしはや

龍たつの島しまは岩がん石せき多おほく地つち瘠やせて

醜しこの曲津まの棲すみ處かなりける

曲津ま見みの猛たけびを避さけて此この島しまに

移うつりつまたも曲津まに侵をかされし  
□

初頭うぶが比古みひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
□

□ 國津くにつ神かみのはや住すますとは知しらざりき

この荒あれはてし曲津ま見みの島しまに

主スの神かみの貴うづの經綸しぐみの尊たふとさを

國津神等くにつかみらの住居すみゐに見みしかな

御樋代みひしろの葦原比女あしはらひめの神司みつかさは

いづくにますか心こころもとなや

あまりにも荒あれはてにつる島しまなれば

御樋代神みひしろがみも黙もだしるにけむ

わが公きみの功いさをにこれの國津神くにつかみの

火傷やけどは忽たちまちをさまりしはや

言靈ことたまの御稜威みいづかしこ畏かすく數歌かずうたの

光ひかりは神かみを永とほ久いに生いかせる

果はてしなき千里せんりの野邊のべを涉わたり來きて

國津神くにつかみ住すむ丘をかに着つきぬる

常磐樹ときはぎの松まつの青々あをあをしげ茂しげりたる

忍しのぶヶ丘がをかの眺ながめよろしも



目路遠く輝くものは池水か  
一鞭馳せて見とどけむと思ふ

野槌彦は歌ふ。

目路はるか白く輝く鏡こそ

大蛇の棲みし沼なりにけり

朝夕に大蛇は沼に潛みつつ

黒き煙を吐きいだすなり

沼底にひそむ大蛇を諸神の

御稜威にきたため給へと祈るも

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ グロノスもゴロスも沼ぬまに潛ひそみゐて

この島しまヶ根がねを汚けがすなるらむ

黄昏たそがれにまた間まもあれば一ひと走はしり

駒こまに鞭むちうち吾われ進すすまばや  
㊦

朝香あさか比女かひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ 沼ぬまの邊へに進すすまむ道みちはいや遠とほし

明日あすにせよかし夕ゆふべ近ちかければ

兔とも角かくも今こよひ宵ひは忍しのぶヶ丘がをかに寝いねて

無限むげんの勇氣ゆうきを養やしなはむかな  
㊦

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

ㄣ  
吾<sup>わが</sup>公<sup>きみ</sup>の神<sup>みこと</sup>言<sup>こと</sup>畏<sup>かしこ</sup>みいざさらば

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>の征<sup>きた</sup>伐<sup>ため</sup>を明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>に延<sup>の</sup>ばさむ

國<sup>くに</sup>津<sup>つか</sup>神<sup>かみ</sup>の百<sup>もも</sup>のなやみを拂<sup>は</sup>ふべく

進<sup>すす</sup>まむ明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>のたのもしきかな

晝<sup>ひる</sup>月<sup>つき</sup>のかげは漸<sup>やう</sup>く吾<sup>わが</sup>上<sup>うへ</sup>に

貴<sup>うづ</sup>の光<sup>ひかり</sup>を投<sup>な</sup>げさせ給<sup>たま</sup>へり

天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>は波<sup>な</sup>間<sup>ま</sup>にかくれ給<sup>たま</sup>ふとも

月<sup>つき</sup>の光<sup>ひかり</sup>に夜<sup>よる</sup>は明<sup>あか</sup>るき  
ㄣ

立<sup>た</sup>世<sup>つよ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

ㄣ  
時<sup>とき</sup>じく<sup>く</sup>に黒<sup>くろ</sup>雲<sup>くも</sup>湧<sup>わ</sup>きし島<sup>しま</sup>ヶ根<sup>がね</sup>も

生<sup>いく</sup>言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>に清<sup>きよ</sup>まりしはや

沼<sup>ぬま</sup>の底<sup>そこ</sup>に潜<sup>ひそ</sup>める醜<sup>しこ</sup>の曲<sup>まが</sup>神<sup>かみ</sup>を

退やひて進すすまむ明日あすは聖すが所どへ  
□

天あめ晴はれ比ひ女めの神かみは御みう歌た詠よませ給たまふ。  
。

□  
天あめも地つちも清きよく晴はれたり今こ宵よひはも

忍しのヶ丘ぶがをかにあかつき待またむか

天あま津つ日は漸やっやく海うみに傾かたむきつ

黄たそ昏がれの幕まく迫せまり來くるかも

大おほ空ぞらの月つきの光ひかりを力ちからとし

荒あらの野のの果はてに小さ夜よを眠ねむらむ

國くに津つ神かみ數あまた多つど集つどへるこの丘をかに

駒こまもろともに夜よるを守まもらむ  
□

野ぬ槌づち彦ひこは歌うたふ。

五柱いつはしらの尊たふとき神かみよ心こころ安やすく

わが住すむ館たちに休やすらはせませ

天あも降りましし神かみの姿すがたの尊たふとさに

國津神等くにつかみらは畏かしこみてをり

顔かほをあげてあて伏ふし拜をがむさへ畏かしこしと

國津神等くにつかみらは俯うつぶしにつつ

今日けふよりは神かみの功いさをに照てらされて

國津神等くにつかみは安やすく榮さかえむ

吾われは今いまこれの集つどひの司つかさとし

耕たがやしの業わざに日ひ々びを仕つかふる

穀物たなつものこれの島根しまねにみちみちて

國津神等くにつかみらの榮さかえをたまへ

今日けふよりは忍しのぶがヶ丘をかの頂いただきに

神かみの御舍みあらかつかへ奉まつらむ

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 國津神の言葉宜なり主の神の

貴の御舎ここにつかへよ

主の神をあした夕なに齋きつつ

生言靈を朝夕に宣れ

主の神の御靈を齋きしかつきは

百の曲津見もさやらざるべし

野槌彦は歌ふ。

□ 有難し御供の神の神宣

畏み齋き仕へ奉らむ

この丘に生ひ茂りたる常磐樹を

伐り透しつ御舎つかへむ

春されば數多の眞鶴集ひ來て

梢に巢ぐひ子を生みてゆくも

眞鶴の巢ぐふ常磐樹を残り置きて

御柱選りて宮居を造らむ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

百神よ國津神たちいざさらば

今宵は安く眠りにつかむ

駿馬は疲れけるにや嘶きて

松の樹かげに足掻きして居り

駒よ駒早く休めよ明日はまた

汝が力を吾は借るべし

斯く歌ひ給ふや、御供の神も國津神も五頭の駒も、月下の丘に照らされながら、  
平和の夢を結びける。

（昭和八・一二・二〇 舊一・四 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）

## 第六章 焼野の月（一九六二）

忍ヶ丘の國津神が潜める村に一夜の雨宿りをなしたる神々は、何處となく心勇  
みて眠られぬままに、焼野原を彼方此方と逍遙しつつ、月を仰ぎながら御歌詠ま  
せ給ふ。

初頭比古の神の御歌。

☞ 晴れ渡る月のしたびに照らされて  
われは焼野の風に吹かれつ



大空おほぞらの蒼あをの限かぎりを照てらしつつ

焼野やけのヶ原がはらを月つきは覗のぞけり

焼やき捨すてし百草ももぐさの根ねに黒々くろくろと

積つもれる灰はひに光ひかれる露つゆかも

餘あまりにも月つきの光ひかりの強つよければ

烏羽うばたま玉たまの黒くろき灰はひも光てりつつ

森閑しんかんと静しづまりかへるこの丘をかの

夕ゆふべの月つきは一ひとしほ入いさやけし

見みの限かぎり荒野あらのの原はらの眞中まんなかに

忍しのぶがヶ丘をかの松まつは生はえたり

眺ながめよき忍しのぶがヶ丘をかの松まつがえヶ枝えに

今宵こよひの月つきは宿やどり給たまへり

松まつがえヶ枝えを透すかして仰あふぐ月光つきかげは

千々ちぢに碎くだけて風かぜにさゆれつ

何時までも夜の明けざれと思ふかな

忍ヶ丘に冴ゆる月見れば

一點の雲かけもなき蒼空の

海渡りゆく月舟清し

顯津男の神の御靈ゆ生れましし

月は一人かけ美はしも

天渡る月の面輪を眺めつつ

顯津男の神の功を偲ぶも

西方の國土にまします顯津男の

神も今宵の月見ますらむ

遙々と遠の海河渡り來て

忍ヶ丘の月を見るかな

グロノスやゴロスのかけも消え失せて

四邊輝く月の荒野よ

國津神も黒雲散りし大空の  
今宵の月を初めて見るらむ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

小夜更けて眠られぬままに起立の

われは忍ヶ丘に登りし

丘の邊の窟を立ち出で露光る

松の梢の月を見るかな

松ヶ枝に月をかけつつ外しつつ

忍ヶ丘に遊ぶは樂しも

明日の日の健びおもひてわが心

いきりたちつつ眠られぬかな

目路遠く輝く沼の水底に

潜<sup>ひそ</sup>める曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>も月<sup>つき</sup>を見<sup>み</sup>るらむ

輝<sup>かがや</sup>ける月<sup>つき</sup>の面<sup>おも</sup>輪<sup>わ</sup>に照<sup>て</sup>らされて

沼<sup>ぬま</sup>の曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>は驚<sup>おどろ</sup>きあるらむ

今<sup>こよひ</sup>宵<sup>ひ</sup>われ沼<sup>ぬま</sup>のほ<sup>ほ</sup>とりに進<sup>すす</sup>まむと

心<sup>こころ</sup>はやれど御<sup>み</sup>許<sup>ゆる</sup>しなきも

そよそよと夜<sup>よ</sup>半<sup>は</sup>吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かぜ</sup>の音<sup>おと</sup>清<sup>きよ</sup>み

御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>に月<sup>つき</sup>は軽<sup>かる</sup>くふるへり

初<sup>しよ</sup>夏<sup>か</sup>ながら未<sup>ま</sup>だこの島<sup>しま</sup>は春<sup>はる</sup>なりき

鷹<sup>たかし</sup>巢<sup>し</sup>の山<sup>やま</sup>に朧<sup>おぼろ</sup>の雲<sup>くも</sup>湧<sup>わ</sup>く

晝<sup>ひる</sup>の如<sup>ごと</sup>明<sup>あか</sup>るき野<sup>の</sup>邊<sup>べ</sup>にわれたちて

西<sup>にし</sup>行<sup>ゆ</sup>く月<sup>つき</sup>を惜<sup>を</sup>しみけるかも

見<sup>み</sup>の限<sup>かぎ</sup>り御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>の蒼<sup>あを</sup>にわが魂<sup>たま</sup>は

ひたされにつつ蘇<sup>よみがへ</sup>りけり

明<sup>あ</sup>けぬれば沼<sup>ぬま</sup>の魔<sup>ま</sup>神<sup>がみ</sup>を罰<sup>きた</sup>めむと

心の駒ははやり立つなり  
御樋代の神の御許しあるならば  
明日をも待たで進まむものを

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

南の御空の果てにぼんやりと

薄ら白雲おきたちにけり

白雲は次第々々に擴がりて

月のかたへに及びけるかも

大空に白玉眞玉かけし如

輝き給ふ今宵の月の男

月讀の舟の明るさが魂は

乗りて進むも高地秀の峰に

高地秀の峰より天降らす御樋代神の

御魂照らして清き月はも

いろいろの艱みを忍ヶ丘に來て

伊吹き拂ひぬ松吹く風に

右左蟲の聲々喧ましく

常世の春を壽ぎにける

種々の蟲の音さやかに聞えけり

焼野ヶ原に命保つか

吹く風に火は力得て荒野原の

百草千草焼きつくされぬ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ひぬ。

爽かに晴れ渡りたる大空を

薄ら白雲包まむとすも

白雲は御空に軽く遊びつつ

月の光にさやらざりけり

顯津男の神の御靈と天渡る

月讀の舟は冴えきらひつつ

澄みきらひ澄みきらひたる大空を

澄みきる月の渡る清しさ

草枕旅の夕べを大空の

月に照らされ蘇へりつつ

駿馬の嘶きかそかに聞えけり

月夜に駒は目を醒しけむ

國津神の安き眠りを醒しつつ

嘶く駒の心なきかな

御樋代の神の御息は静かなり

草くさの枕まくらにみ寝ねましながらも〚

かく歌うたひ給たまふ折をりしも、御み樋ひ代しろ神がみは夜よ半はの眼まなこを醒さまさせ給たまひ、御み髪くしの亂みだれを繕つくろひな  
がら静しづ々と四よ柱しらの神かみの月つきに憧あこがれゐる側そば近ちかく現あらはれ給たまひ、

〚 四よ柱しらの神かみは夜よ更ふけを眠ねむらずに

月つき照てる丘をかにさまよへるかも

蟲むしの音ねもひたにしづまる眞ま夜よ中なかを

休やすませ給たまへ明あけ近ちかからむを

明あけぬれば生いく言こと靈たまのあらむ限かぎり

言こと擧あげすべき公きみ等らならずや

草くさも木きも安やすく眠ねむれる小さ夜よ更けを

ささやき給たまふはいぶかしきかも

明あけぬれば醜しこの魔ま神がみと戦たたかひて



烏鷺を定むるその身ならずや  
□

初頭比古の神は御歌に酬へて、

□ 餘りにも空行く月のさやけさに

わが魂線は蘇へりつつ

一夜をわれ眠らずも言靈の

戦に立てば必ず勝たむ

二夜ともなき望月の光なれば

眠らむとして眠らえぬわれ  
□

かく歌ひ給ふ折しも、國津神の野槌彦は恐る恐る五柱の神の御前に這ひより、

□ 久方の天津神たちうら安く

これの清床に休ませ給へ

大空の月はさやかに照れれども

明け方近し御床に入らせよ

漸くにして、忍ヶ丘の夜は明けぬれば、ここに神々は國津神の歡呼の聲に送られつつ遙の野邊に水面輝く醜の沼を眺めつつ、馬上靜かに進ませ給ひける。

(昭和八・一二・二〇 舊一一・四 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

天祥地瑞第六卷第一篇の口述を終りたる午後六時なりき。分院の清庭に立ち出で見れば、舊十一月四日の上弦の月の右方に太白星の影附着し、又五寸ばかり上方に稍光薄き星一つ輝ける珍しき御空を仰ぎつつ世の移り行く非常時日本の空氣を悟りたり。

口述者識

第二篇 焼野ヶ原

第七章 四神出陣（一九六三）

東ひがしの空そらは漸やうやく東雲しののめの陽氣やうきただよ漂たひ、忍しのぶヶ丘をかの森林しんりんに囀さへつる小鳥ことりの聲こゑも賑にぎはしく、常世とこよの春はるをうたふ。茲ここに朝香あさか比女ひめの神かみは忍しのぶヶ丘をかの最高さいかう所に幄舍あくしやを造つくり、惡魔あくませい征伐いばつの大本だいほん營えいと定め、野槌ぬづち彦ひこを傍かたはらに侍はべらせ觀戰くわんせん場ぢやうと定め給たまひ、新進しんしん氣銳きえいの英雄えいゆう神かみ初頭うづが比古みひこの神かみ、起立おきたつ比古ひこの神かみ、立世たつよ比女ひめの神かみ、天晴あめはれ比女ひめの神かみの四柱よはしらをして、沼ぬまの大蛇おほいづちの征服きために向むかはしめ給たまふ。此この沼ぬまの名なはグロス沼ぬまと古來こらい稱となへられ、グロノス、ゴロスの邪神じやしん

は永遠えいゑんの棲處すみかとしてグロス島たうの天地てんちを攪亂かうらんし、暴威ばうゐを振ふふるに至りいたし邪神じゃしんの根據地こんきよちなりける。

朝香比女あさかひめの神かみは生言靈いくことたまの御稜威みいづと眞火まひの力ちからにて、大蛇をろちの深く潜ひそめる大野原おほのほらは拭ぬぐひし如ごとく焼拂やきはらはれたれども、邪神じゃしんどもは此沼このぬまに潜入せんじふして何時いつ又また其暴威そのばうゐを振ふふるやも計はかり難がたければ、其不安そのふあんを一掃いつさうしてグロス島たうの平和へいわを永遠えいゑんに維持ゐぢせむが爲ための征服戰せいふくせんなりけるぞ畏かしこけれ。

朝日あさひに輝かがやく沼ぬまの面おもては仄ほのかに眼界がんかいに入いるとは雖いへども、忍しのぶヶ丘がをかの高所かうしよよりの眺ながめなれば里程りていは餘あまり近ちかからず、茲ここに四柱よはしらの神かみは駿馬はやこまに鞭むちうち、即戰そくせん即勝そくしょうを期きしながら勇氣きりんりん凛々りんりんとして、御歌みうたうたはせながら一直線いつちよくせんに進すすませ給たまひける。

☐ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

眞言まことの力ちからは世よを救すくふ

神かみが表おもてに現あらはれて

善神邪神を立て別ける  
紫微天界を生まします  
主の大神の神言もて  
百八十國や八十の島  
さやる曲津を悉く  
生言靈に言向けつ  
聞かざる曲津は討ち罰め  
荒野を涉り山を越え  
河の瀬渡り荒金の  
此地の上に一塵の  
穢れも残さじものと惟神  
神の任に任に御樋代の  
貴の神等彼方此方に  
配らせ給ふ畏さよ

吾等仕ふる神柱われらつかかむばしら

朝香の比女の御樋代はあさかひめみひしろ

高地秀の宮を立ち出でてたかちほみやたたい

醜の魔神のさやぎをもしこまがみ

恐れ給はず山渉りおそたまやまわた

廣河越えて漸くにひろかはこやつや

萬里の沼路を渡りましばんりぬまぢわた

狭野の島根の曲神をさぬしまねまがかみ

言向け和し國土造りことむやはくにつく

造り終りて天津神つくをはあまつかみ

國津神等を司としくにつかみつかさ

永遠の礎定めつつとはいしずゑだ

再び霧に包まれしふたたびきりつつ

黑白もわかぬ海原のあやめつなばら

浪なみの秀ほ分わけて進すすみます

面勝おもかつがみ神がみの出いでましに

靡なびかぬ曲ま津がはなかりけり

それより萬ま里での島しまケ根がねに

渡わたらせ給たまひつ八や十そ比ひ女めの

田た族からの比ひ女めの知しろ食しめす

萬ま里でケ丘かなる聖すが所どこに

言こと向むけ給たまひ萬よろづよ世よの

國く土にの寶たからと燧ひ石うちいし

贈おくらせ給たまひつ神かみ々がみに

惜をしき別わかれを告つげながら

再ふたび海うな原ばら乗のり切きりて

グロスの島しまに着つき給たまひ

グロノス、ゴロスの曲ま津が見みを

生言靈の御光と

眞火の力に追ひ拂ひ

菝ひ清めて大野原

駒を竝べてかつかつと

忍ヶ丘に着き給ひ

野中の沼の醜神を

言向け和し稚國土の

曲津の災除かむと

忍ヶ丘に陣取らせ

吾等を遣はせ給ふなり

ああ惟神々々

主の大神の賜ひたる

生言靈の劍もて

醜の曲津を悉く



言こと向むけ和やはし或あるは斬きり

此この國くに原はらを安やす國くにと

治をさめむ爲ための首かど途でぞや

勇いさめよ勇いさめ諸ももの神かみ

進すすめよ進すすめ曲まが神かみの

永と遠はに潜ひそめる野の中なかの沼ぬまへ

生いく言こと靈たまの神み軍いくさに

刃は向むか敵てきは世よにあらじ

勇いさめよ勇いさめ進すすめよ進すすめ

吾われ等らは神かみと俱ともにあり

ああ惟かむ神ながら々々かむながら

生いく言こと靈たまに光ひかりあれ

吾わが言こと靈たまに幸さちあれよ。

地つち稚わかきグロスの島しまに潜ひそみたる

曲ま津がを罰きたむと吾われは進すすむも

限かぎりなき廣ひろき大野おほのの眞ま中なかに

沼ぬまを造つくりて大蛇をろちは潜ひそむか

葭よしあし葦あしの茂しげれる野の邊べは焼やきつれど

沼ぬまの底そこひを乾ほす由よしもなし

天あまつ津つ日は御空みそらに清きよく輝かがきて

沼ぬまの表面おもてを伊照いてらし給たまへり

今け日ふこそは御樋みひ代神しろがみの神言みこと以もて

征途きために上のぼる初陣うひぢんなりけり

振返ふりかへり見みれば忍しのぶヶ丘がをかははや

霞かすみの幕とぼりに包つつまれにけり

陽かげろひ炎もの燃もゆる野のなか中の沼底ぬまそこに

潜ひそむ大蛇をろちの身みの果はてなるも

目めにひと一つさやるものなく焼やかれたる

大野おほのの中なかに照てれる醜しこの沼ぬまよ

いざさらば四柱よはしむちから力を一いつにして

生言いくことたま靈たまの征矢そやを射いむかも

次々つぎつぎに沼ぬまの面も近く見みえにつつ

吾駿馬わがはやこまの息いきづかひ高たかし

常磐樹ときはぎの松まつの一本ひともとそり立つ

樹蔭こかげに駒こまを休やすめて進すすまむ

斯かく歌うたひつつ進すすませ給たまへば、原野げんやの眞中まんなかに屹然きつぜんとして立たてる老松おいまつは、何なにもの

制縛せいばくも受うけざるが如ごとく四方しほう八方はつぱうに枝えだを伸のばし、恰あたかも大おほいなる傘からかさを開ひらきたる如ごとき姿すがたにて

天てんを封ふうじ、太陽たいやうの光ひかりも地ちに届とどかぬばかり枝えだ細こまやかに榮さかえぬたるを見みたりければ、

これ幸さいはひと四柱よはしちの神かみは駒こまを乗のり降おり、暫しばし休やすらひながら、いろいろと作戦さくせん計畫けいかくに

神力みちからを集注しふちうし給たまひける。

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

野の中に御空を封じて聳り立つ

傘松の蔭は心安しも

吾々は今や曲津の征服に

向はむとして元氣を養ふ

曲神も百の奸計の穴掘りて

待迎へ居らむ心し行かばや

八千尋の底ひも深き沼底に

潜む曲神の罰めは難し

さりながら生言靈の力にて

水底の曲津を浮ばせてみむ

面白しああ勇ましし曲津見の

罰めの戦の首途と思へば

駿馬はやこまの息いきを休やすませ吾々われわれも  
英氣えいきを養やしなひ敵てきに向むかはむ  
□

起立おきたつひこ比古かみの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□  
醜神しこがみの伊吹いぶきにやあらむ遠とほの野のに

かすかに醜しこの黒雲くろくも涌わくも

數限かずかぎりなき曲津まがつ見みは彼方あち此方こちに

吾等わららを待まち伏ふせ射向いむかひ來きたらむ

幾萬いくまんの曲津まがつの軍攻いくさせめ來くとも

言靈劍ことたまじのぎに斬きり放はなりてむ

天津日あまつひの豐榮とよさかのほ昇あらす大空おほぞらに

眞鶴まなづるの聲清こゑきよく聞きこゆる

松まつが枝えに鶯うぐひすまでも止とどまりて

吾<sup>わが</sup>首<sup>かど</sup>途<sup>い</sup>を言<sup>こと</sup>祝<sup>ほ</sup>ぎ啼<sup>な</sup>けるも

迦<sup>かり</sup>陵<sup>よう</sup>頻<sup>びん</sup>伽<sup>が</sup>の啼<sup>な</sup>く聲<sup>こゑ</sup>聞<sup>き</sup>けば吾<sup>わが</sup>軍<sup>いくさ</sup>

かつよかつよと響<sup>ひび</sup>き來<sup>く</sup>るかも

目<sup>め</sup>に一<sup>ひと</sup>つさやるものなき焼<sup>やけ</sup>野<sup>の</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>に

一本<sup>ひともと</sup>松<sup>まつ</sup>の影<sup>かげ</sup>はしるきも

常<sup>とき</sup>磐<sup>は</sup>樹<sup>ぎ</sup>の松<sup>まつ</sup>の操<sup>みさを</sup>を心<sup>こころ</sup>とし

ひたに進<sup>すす</sup>まむ野<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>の沼<sup>ぬま</sup>に

御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>の神<sup>かみ</sup>は忍<sup>しの</sup>ヶ丘<sup>ぶがをか</sup>の上<sup>へ</sup>に

吾<sup>わが</sup>戦<sup>たたか</sup>ひを守<sup>まも</sup>りますらむ

立<sup>た</sup>世<sup>つよ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

天津<sup>あまつ</sup>日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>さやけき地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>に

如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>で曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>の射<sup>い</sup>向<sup>む</sup>ふべきやは

われわれ おもかつがみ  
吾々は面勝神と雄々しくも

まが すみか いむか  
曲の棲處に伊向ひ進まむ

すす すす ししぞ  
進み進み退く事を知らざれば

かなら いくさ  
必ず戦は勝つものぞかし

わがきほひ じやう  
さりながら吾勢に乗じつつ

かる すす こと  
軽く進まむ事のあやふき

むらきも こころおちつ しづしづ  
村肝の心落付け静々と

まが いくさ いむか  
曲津の軍に伊向ひ進まむ

あめはれひめ かみ  
天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

かみがみ いづ をたけ き  
神々の稜威の雄健び聞きながら

こま はや た われ  
心の駒の逸り立つ吾は

はやこま あが いなな  
駿馬は足掻きしながら嘶けり

曲津の征途を駒も勇むか

陽炎の燃え立つ野邊の奥にして

醜の曲津の棲むとも覺えず

平和なる此天地の中にして

グロノス、ゴロスと戦ふ今日かな

いざさらば諸の神々出でませよ

野中の沼はまだ遠ければ

天津日の輝き給ふ日の中に

言向け和さむ醜の魔神を

斯くの如く神々は首途の御歌を詠ませつつ、再び駒の背にひらりと跨り、意氣揚々として進ませ給ひける。

(昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)



第八章 鏡の沼（一九六四）

初頭比古の神の一行は、際限もなき焼野ヶ原の中央に、天津日に輝くグロスの沼を目あてに駒を速めて進ませ給ひける。折しもあれ、血にまみれたる老媪の一人路傍に横はり、息も絶え絶えに四柱神に向つて両手を合せ、救ひを乞ふ事頻なりければ、初頭比古の神は駒を止め、馬上より老媪に向ひ、聲も涼しく宣らせ給ふ。

曲津見の征途に進む道の邊に

何を悩むかこれの老媪は

よく見れば汝が面は無惨しく

血のただれあり理由聞かむ

言靈の水火の力に汝が悩み

ただに救はむ名をなのれかし

老媪をぐなは息いきも絶たえ絶だえに歌うたもて答こたふ。

☐ 吾われこそは荒野あらのの奥おくに潜ひそみ住すむ

名なもなき小ちさき國津神くにつかみぞや

グロス沼ぬまに棲すまへる大蛇をろちはかくのごと

吾われを傷きずつけ逃にげ去さりにけり

この病癒やまひさせたまへ天津神あまつかみ

大蛇をろちの言向ことむけ取り止やめたまひて

天津神あまつかみ進すすませたまふも詮せんなけれ

曲神まがみの去さりしあとの沼邊ぬまべは

吾われこそは焼野やけのの雉子きぎすと言いへるもの

夫つまも子こも皆殺みなころされにけり

沼底ぬまそこにひそみし曲津まがは天津神あまつかみの

出いでましと聞ききて逃にげ失うせしはや

この先は醜の曲神の畏多し  
進ませたまふな危かりせば

初頭比古の神は儼然として御歌宣らせ給ふ。

☐ 汝こそはゴロスの化身よ惟神

吾さとき目を濁さむとするか

ゴロスの曲の言葉を畏みて

吾を止めむ心なるべし

ゴロスもゴロスも神の言靈に

射向ふ力あらざるべきを

汝は今雉子老媪と身を變じ

吾神軍を止めむとすも。

ひとふたみよいつむゆななやこのたり  
一二三四五六七八九十

ももちよろしちよろづ  
百千萬千萬の

かみことたまさち  
神の言靈幸はひて

まがみけしん  
これの曲神の化身なる

きぎすをくなしやうたい  
雉子の老媪の正體を

あらかむながら  
現はせたまへ惟神

まこといきことたま  
眞言の水火の言靈を

きよういね  
清く打ち出で願ぎまつる

かむながらかむながら  
ああ惟神々々

いくことたまひかり  
生言靈に光あれ

わがことたまいのち  
吾言靈に生命あれ

かくうた  
かく歌ひたまふや、  
きぎす  
雉子と言へる老媪は  
たちま  
忽ち  
さんかくさんとう  
三角三頭の  
ちやうだ  
長蛇と  
へん  
變じ、  
さんこ  
三箇の  
くち  
口  
よりくわえん  
より火焰を吐き  
は  
こくえん  
黒煙を吐き、  
ぜんごさいう  
前後左右に  
【のたうち】  
まは  
廻り、  
グロス沼の  
かた  
方をさし

て一目散いちもくさんに雲くもを霞かすみと逃にげ去さりにける。

起立おきたつひこ比古かみの神かみは驚おどろきながら御歌みうた詠よませ給たまふ。

巧たくみなる大蛇をろちの化身けしんも汝なが神かみの

生言靈いくことたまに逃にげ失うせにけり

曲津見まがつみはいろいろさまさまに身みをやつし

吾行わがゆく道みちを遮さへぎらむとすも

神軍みいくさの出立いでたち恐おそれ曲津見まがつみは

かくも姿すがたを變へんじたりけむ

傷きずつきし彼かれの面おもては燃もえさかる

野火のびに焼やかれしあとなりにけむ

グロノスもゴロスも野火のびにやかれつつ

水底みそこに潜ひそみて苦くるしみ居をるらむ

かくなれば醜しこの曲神まがみの雄猛をたけびも

憐れ催し躊躇心わく

さりながら吾雄心に躊躇の

わくも曲神の經綸なるべし

御樋代の神の依さしを飽くまでも

仕へまつらで歸るべきやは

數々の罨のありとは偽りか

ゴロスの化身の言の葉怪し

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

面白き今日の首途よ曲津見は

吾等を道に伊迎へまつりぬ

天日の下にゴロスは身を變じ

吾等を迎ふることの雄々しさ

何事なにごとの奸計たくみあるかは知らねども

神かみと俱ともなる吾等われらは恐れおそれじ

恐おそるべきものは心こころにわきたてる

躊躇ためらひ心の曇くもりなりける

いざさらば公きみの神言みことを畏かしこみて

ただ一筋ひとすぢの道みち進むのみ

天晴あめはれ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐ 天あめ清きよく大地だいちは廣ひろく遠とほの野のに

陽かげろひ炎ひ立ちて春風はるかぜ渡わたれり

春風はるかぜに吹ふかれて進むすす駒こまの背せの

吾氣魂わがからたまの心地こころちよきかも

春はるの野のを行ゆく心地こころちして曲津まがつ見みの

罰<sup>きた</sup>めの戦<sup>いくさ</sup>の首途<sup>かど</sup>と思<sup>おも</sup>へじ

綽<sup>しやく</sup>々として餘裕<sup>よゆう</sup>ある此<sup>この</sup>戦<sup>いくさ</sup>

曲<sup>まが</sup>の滅<sup>ほろ</sup>びは夢<sup>ゆめ</sup>のごとけむ

張<sup>は</sup>り切<sup>き</sup>りし心<sup>こころ</sup>も俄<sup>にはか</sup>にゆるみけり

ゴロスの曲<sup>まが</sup>津<sup>が</sup>の姿<sup>すがた</sup>見<sup>み</sup>しより

種<sup>くさくさ</sup>々に心<sup>こころ</sup>しゆかばや曲<sup>まが</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>は

身<sup>み</sup>を變<sup>へん</sup>じつつ現<sup>あら</sup>はれ來<sup>きた</sup>らむ

遠<sup>とほ</sup>の野<sup>の</sup>をふりさけ見<sup>み</sup>れば彼<sup>あ</sup>方<sup>ち</sup>此<sup>こ</sup>方に

曲<sup>まが</sup>神<sup>み</sup>の息<sup>いき</sup>か黒<sup>くろ</sup>雲<sup>くも</sup>立<sup>た</sup>ちたつ

陽<sup>かげ</sup>炎<sup>ろひ</sup>のもえ立<sup>た</sup>つ春<sup>はる</sup>野<sup>の</sup>の奥<sup>おく</sup>にして

黒<sup>くろ</sup>雲<sup>くも</sup>立<sup>た</sup>つは怪<sup>あや</sup>しかりけり

見<sup>み</sup>の限<sup>かぎ</sup>り焼<sup>やけ</sup>野<sup>の</sup>は廣<sup>ひろ</sup>し醜<sup>しこ</sup>雲<sup>くも</sup>の

影<sup>かげ</sup>は見<sup>み</sup>ゆれどかたまりもせず

いざさらばグロスの沼<sup>ぬま</sup>に進<sup>すす</sup>むべし



吾駿馬も勇み出でつつ

茲に四柱の神々はグロスの沼をさして急がせ給ひ、汀に立ちて眺め給へば、殆んど東西十里南北二十里に餘る大沼なりければ、四柱の神は沼の周圍を四分し、東西南北に一柱づつ陣どり一齊に天津祝詞を奏上し、七十五聲の言靈を宣りあげ、一二三四五六七八九十、百千萬千萬の神、この言靈軍に加はりたまへ、援けた

まへ、守らせたまへ

と一生懸命に宣り上げ給ふにぞ、速にグロノス、ゴロスの曲神も言靈の力に敵し兼ね、苦しみ悶えながら沼底より大噴火の如き水泡を吹き出し、六角六頭の巨大なる惡龍となり、グロノスは水面高く立ち昇り、ゴロスは三角三頭の長大なる蛇身と還元し、水面を「のたうち」廻り、遂には黒雲を起し中天高く立ちのぼり、鷹巢の山の方面さして雷鳴のとどろく如き音響を立てて馳け出し逃げ失せける。其爲に沼の水は大半雲となりて御空に舞ひ昇り、再び雨となつて地に下る勢は、高照山の中津瀧を數百千集めたるが如く、廣く激しく、到底晏然として起立し得

ざる 凄まじき 光景とはなりにける。 斯の如く 大蛇の脆くも 逃げ失せたるは、 朝香  
比女の神を 蔭ながら 守らせた まふ 鋭敏 鳴出の神のウ 聲の力なりけるぞ 畏けれ。  
四柱の神は 各自 駒を速めて 元來し 道を 驅りつつ 傘松の蔭に やうやくにして 集は  
せ給ひ、 勇ましく 凄まじかりし 戦況を 互に 語り合ひつつ 哄笑の幕をつづかせ 給ひ  
ける。

初頭比古の神は 御歌詠ませ給ふ。

千早振る神世も 聞かず 例なき

曲津の軍に向ひぬるかな

四柱の神の言靈の幸はひに

曲津見の神は 稍おとるへぬ

さりながら 大蛇の神の 執拗さ

生言靈に 容易に 亡びず

百雷の一度に 轟く如くなる

ウご象聲ことの言たま靈にひるむ曲まが津つ見み  
御み樋ひ代しろの神かみをまも守らず鋭う敏なり鳴り出づの

神かみの言こと靈たまに逃にげ失うせにけり

名なにし負おふグロスぬまの沼まがの曲かみ神も

今け日ふを限かぎりと逃にげ失うせにけり

曲まが神かみは野の火びに焼やかれて傷きずつきしか

その面おも見みれば糜た爛だれみたりぬ

恐おそろしき六ろく角かく六ろく頭とうの巨き大よなる

惡あく龍りゅう水みの面もにのたうち廻まはりし

三さん頭とう三さん角かくの長ちやう蛇だとなりて曲まが津つ見みの

ゴロスはらは腹はらを眞ま白しろく見みせたり

大おほき小ちさき數かず限かぎりなき龍りゅう蛇だ神しんの

狂くるへるさまは見み物ものなりけり

初はじめての曲まが津つの征き途たに向むひつつ

如何いかになるかと危あやぶみしはや  
』

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

山嶽さんかくの如ごとき荒浪あらなみ立たてながら

狂くるひ立たちたる曲津まがつみ見みあはれ

水柱みづばしらてん天ちんに冲ちゆうして噴水ふんすゐの

吐はき出だす如ごとき曲津まがつみのすさびよ

曲神まがかみの苦くるしき息いきより进ほとほしる

水みづは御空みそらに高たかくのぼりぬ

かくのごと勇いさましき軍いくさは見みざりけり

生言靈いくことたまの比ひなき力ちからに  
』

立世たつよひめ比女ひめの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

♀ 女神吾もいかなるよと束の間は

危ぶみにけり曲津の荒びに

曲神の逃げ去りしより沼の面は

鏡の如く光りかがやけり

この沼を鏡の沼と改めて

この食國のしめりとなさばや

莽々と生え繁りたる醜草も

焼き拂はれて沼のみ照れる

御樋代神の持たせる眞火のなかりせば

この曲津見は亡びざりけむ

葦原比女の御樋代神の御艱み

今日の戦にはじめて覺りぬ

手も足も出す隙もなき此島に

御樋代神のおはす雄々しさ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

曲津見は黒雲に乗りて逃げゆきし

あとの御空は晴れ渡りけり

言靈の軍の功詳細に

わが公許に復命せむ

吾公の功尊し曲神の

罰めの軍に光をたまへり

神光は忍ヶ丘の御空より

いや輝きて曲津亡びけり

葦原比女神のまします聖場は

またもや曲津に襲はれにけむ

中野河の廣き流れにささへられ

野火はここに止まりにけむ

曲津見は中野河原の空渡り  
鷹巢の山に棲處定めむ  
兔も角も忍ヶ丘に急ぎつつ  
公が御前に復命申さむ

かく歌ひ給へば、初頭比古の神は、

天晴比女神の言靈諾ひて  
いざや歸らむ忍ヶ丘に

茲に四柱の神は轡を並べて、忍ヶ丘の朝香比女神の本營に凱旋し給ひけるこ  
そ、目出度けれ。

（昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録）

第九章 邪神征服（一九六五）

忍ヶ丘の本營には、朝香比女の神、野槌彦を話相手としながら、今日の戦況如何に成り行きしかと稍不安の面色をたたへつつ、四柱神の凱旋を心待ちに待たせ給ひける折もあれ、駒の蹄の音勇ましく鈴の音もシヤンシヤンと四邊の空気を響かせながら、四神將の先に立ちたる初頭比古の神は一目散に忍ヶ丘の本營に馳せ参じ、御歌もて戦況をうま怜に委曲に報告し給ひたり。

御樋代神の神言もて

グロスの沼に潛みたる

曲津の軍をきたためむと

四柱神は大野原

駒の蹄の音高く

進む折しも常磐樹の



一本松ひとまつの下蔭したかげを  
見出みいでてこれに休憩きうけいし  
駒こまの鋭氣えいきを養やしなひつ  
言靈戰ことたまいくさの作戦さくせんを  
語り合あひつつ時ときを經へて  
再びふたたび駒こまに跨またがりて  
はてしも知らぬ焼野原やけのはら  
進むすす折をりしも道みちの邊へに  
面おもてただれし國津神くにつかみ  
雉子きぎすと名な乗のる老嫗らうおは  
沼ぬまの大蛇おろちはいち早はやく  
逃にげ失うせたれば神々かみがみは  
進すすませ給たまふも詮せんなしと  
言葉ことばを極きはめて止とどめける

媪おつなは泣なきつつ言いひけらく

グロノス、ゴロスの醜しこがみ神かみは

吾等われらを悉傷ことごとききずつけて

親子おやこの命いのちを奪うばひとり

國津神等くにつかみらを悉ことごとく

滅ほろぼしおきて鷹巢山たかしやま

方面ほうめんさして逃にげ去さりぬ

神々等かみがみたちは駿馬はやこまを

忍しのぶヶ丘がに引ひき返かへし

曲津まがの征途きためを止とどめませ

などなごと細々こまこま言いひわけを

言葉ことばを極きはめて宣のりけるが

正まさしく曲津まがの偽いつはりと

吾われは早はやくも悟さとりしゆ

生言靈を打ち出せば  
曲津は大蛇と還元し  
雲を霞と逃げ去りつ  
グロスの沼の底深く  
怪しき姿をかくしけり  
ここに吾等は勇み立ち  
駒を速めて沼の邊に  
近寄り見ればいや廣し  
うす濁りたる沼水は  
あなたこなたと泡立ちて  
數萬の曲津見潜む状  
吾目のあたり見えければ  
吾等四柱神等は  
沼の東西南北に

部署ぶしよを定さだめて陣取ぢんどりつ

天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし

七十五聲しちじふごせいの言靈ことたまを

いや廣ひろらかに打うち出いだし

天あまの數歌かずうた宣のりつれば

さすがの曲津まがも辟易へきえきし

ひるむと見みえし折をりからに

御空みそらゆ高たかく聞きこえ來くる

ウ聲しゑの言靈ことたま幸さちはひて

沼ぬまの大蛇をろちは正體しやうたいを

水上すゐじやう高たかく現あらはしつ

【のたうち】廻まはるあはれさよ

御空みそらに聞きこえしウこゑの聲こゑは

御樋代神みひしろがみを守まもります

鋭敏鳴出の神の功績か

ああ惟神々々

生言靈の幸はひに

沼の曲神は跡もなく

雲を起して逃げ去りぬ

吾等はそれより天地の

神に感謝の太祝詞

宣り上げ終りめいめに

元來し道をたどりつつ

一本松の下蔭に

集ひて戦況語り合ひ

又もや駒に跨りつ

遠の野路をば恙なく

公のいませるこの丘に

勝鬨揚げて歸りけり

いざこれよりは中野河

速瀬を渡り御樋代の

比女神います聖所へ

國津神等を率き連れて

進ませ給へ惟神

神の御前に願ぎ奉る

と復命し給ひけるにぞ、  
歌詠ませ給ふ。

朝香比女の神は四柱神の功績を甚く賞め讚へ給ひつつ御

四柱の神の功の尊さに

忍ヶ丘は蘇りたり

千早振る神世も聞かぬ功績を

あらのがはら  
荒野ヶ原にたてし神はも

まがつみ  
曲津見は生言靈に怖ぢ恐れ

くも  
雲を霞と逃げ去りしはや

けふ  
今日よりは焼野ヶ原の國津神も

うらやす  
心安らかに世を送るらむ

ひろ  
はてしなき廣き國原隈もなく

かがや  
輝き渡らむ神の御稜威は

ま  
待ち待ちし軍の公は歸りけり

われぬ  
吾居ながらに言靈放ちつ

ことたま  
言靈の光りにまさるものなしと

けふ  
今日の戦に深く悟りぬ

まがつみ  
曲津見は再び鷹巢の山の根に

うつ  
さやらむとして移りけむかも

けふ  
今日よりは中野大河を打ち渡り

鷹巢の山をさして進まむ

四柱の神の功は永久に

グロスの島の語り草とならむ

國津神野槌彦は歌ふ。

神々の貴の恵に浸されて

今日より安けむ國津神等は

十年の長きを艱みし曲津見の

禍消えて蘇りけり

諸々の國津神等はことごとく

この地の上に大らかに住まむ

地を掘りて深く潛みし國津神も

荒金の土の上に生くべし



土つちの上うへに家居いへゐを造つくり今日けふよりは  
天津あまつひ日の光かげの恵めぐみに浴よくせむ  
いざさらば御樋みひしろ代神がみの御供おんともに  
仕つかへ奉まつりて聖所すがどに進すすまむ  
𠄎

朝香あさか比女かひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
𠄎

𠄎  
國津くにつ神野かみぬづ槌彦ちひこの言ことの葉はを

諾うべなひ吾われは聖所すがどに進すすまむ

諸神ももがみよ駒こまの用意よういを急いそぎませ

いざ立たち行ゆかむ河かはのあなたへ  
𠄎

初頭うぶが比古みひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
𠄎

吾<sup>わ</sup>公<sup>が</sup>の神<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>畏<sup>かしこ</sup>み四<sup>よ</sup>柱<sup>はしら</sup>は

御<sup>み</sup>後<sup>あと</sup>に仕<sup>つか</sup>へ急<sup>いそ</sup>ぎ進<sup>すす</sup>まむ

天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>は輝<sup>かがや</sup>き渡<sup>わた</sup>り大<sup>おほ</sup>空<sup>そら</sup>は

澄<sup>す</sup>みきらひたる今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の旅<sup>たび</sup>かも

曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>の影<sup>かげ</sup>を潜<sup>ひそ</sup>めし焼<sup>やけ</sup>野<sup>の</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>

照<sup>て</sup>る天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>はさやかなるかも

白<sup>しら</sup>梅<sup>うめ</sup>の花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>く野<sup>の</sup>邊<sup>べ</sup>を駒<sup>こま</sup>竝<sup>な</sup>めて

進<sup>すす</sup>まむ道<sup>みち</sup>のさやかなるかも

右<sup>みぎ</sup>左<sup>ひだり</sup>の面<sup>をか</sup>を封<sup>ふう</sup>じたる

梅<sup>うめ</sup>は漸<sup>やうや</sup>くほぐれ初<sup>そ</sup>めたり

白<sup>しら</sup>梅<sup>うめ</sup>の花<sup>はな</sup>の香<sup>か</sup>りに送<sup>おく</sup>られて

聖<sup>すが</sup>所<sup>ど</sup>に進<sup>すす</sup>む今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の樂<sup>たの</sup>しさ

起<sup>お</sup>立<sup>き</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

☐ 勇いさましく曲ま津がの軍いくさに勝かちおほせ

又またも進すすまむ貴うづの聖すが所に

吾わが公きみの今け日ふの御み行ゆきを壽ことほぐか

迦かり陵よう頻びん伽がは梅うめに轉さへる

眞ま鶴なづるは翼つば揃さそへてこの丘をかの

御み空そらに圓えんをえん描がきて舞まへるも

鶺鴒かざさぎの聲こゑ勇いさましく聞きえ來くる

忍しのヶ丘ぶがは貴うづの聖すが所とよ

一ひと夜よの露つゆの宿やどりの忍しのヶ丘ぶがに

名な殘ごり惜をしみて吾われは立たつなり☐

立た世つよ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 御み樋ひ代しろの神かみの御み供ともに仕つかへつつ

曲津の軍に立ち向ひしよ

言靈の嚴の光の功績を

悟りし吾は恐るるものなし

駿馬は鬣ふるひ嘶きぬ

今日の首途を急ぎけるにや

國津神の艱みを拂ひし今日こそは

天地晴れし心地するかも

久方の御空は高く荒金の

地は廣げし吾中を行かむ

ここに御樋代神の朝香比女の神は、四柱の從神と國津神野槌彦を案内役とし、  
グロスの島を横ぎれる中野河の濁流を渡るべく用意萬端ととのへ終り、暴虎馮河  
の勢にて御歌うたひつつ進ませ給ひける。

(昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録)

第一〇章 地異天變（一九六六）

御樋代神と生れませる  
朝香の比女神諸神を

從へ給ひ松茂る  
忍ヶ丘をあとにして

鷹巢の山の麓なる  
葦原比女の神います

聖所に急ぎ進まむと  
駒の轡を竝べつつ

大野ヶ原をすくすくと  
進ませ給ふ勇ましさ

彼方此方の野の面は  
春風薫り鳥うたひ

陽炎燃えたつ長閑さを  
嘉し給ひつやうやうに

グロスの島を横ぎれる  
中野の河の河岸に

黄昏るる頃着き給ふ。

國津神野槌彦は河の流れを指さしながら、

㊦ 上つ瀬は瀬速し下つ瀬は

ぬるくて深し中津瀬ゆきませ

河水はひた濁りつつ水底は

いや深くして渡るに難し

向つ岸に渡らふ術も無きままに

御樋代神の御姿知らずも

朝香比女の神は馬上より、中野河の濁流を打見やりながら、御歌詠ませ給ふ。

㊦ 曲津見の息の雫のしたたりか

この河水はいたく濁れり

駒の脚入るるもきたなきこの河を

ただに渡らむ事のうたてき

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

東の河の流れに比ぶれば

濁りたれども河幅狭し

朝香比女神の神言の言靈に

天馬となして渡らまほしけれ

大いなる翼はやして東の

河を渡りし吾駒なるも

駒よ駒生言靈の幸はひに

二つの翼を直に生やせよ。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

百千 萬千 萬の

生言靈の幸はひに

駒は變じて鷲となり

河は變じて土となれ

これの流れは深くとも

河の面は濁るとも

主の大神の賜ひてし

澄みきらひたる言靈に

山河野邊もことごとくに

歸順ひ來べき國土なるよ

地稚く未だ國土稚く定まらぬ

この島ヶ根は言靈の

水火のままなり言靈の

光に總ては固まりて

紫微天界の眞秀良場と



茂れよ榮えよ永久に  
しげ さか とことは

御樋代神は二柱まで  
みひしろがみ ふたはしら

この島ヶ根に天降りましぬ  
しまがね あも

ああ惟神々々  
かむながらかむながら

神は愛なり力なり  
かみ あい ちから

如何なる曲津も山河も  
いか ながる まが やまかは

愛と善との力にて  
あい ぜん ちから

蘇るべき國柄よ  
よみがへ くにかがら

わが駒の翼生えずば止むを得ず  
こま つばさは や

この廣河を荒金の  
ひろかは あらがね

土と固めつ向つ岸に  
つち かた むか きし

雄々しく進まむわが首途  
ををすす かどで

守らせ給へと主の神の  
まも たま ス かみ

御前に謹み願ぎまつる  
みまへ つつし ね

天津日は照る月は盈

この浮島に春さりて

百草千草は花開き

小鳥は歌ひ蝶は舞ふ

かかる目出度き國中に

公の出でまし妨ぐる

濁りも深き廣河は

八十曲神の雄猛びか

醜の曲津の奸計か

引けよ引け引け中野河

水も凍りて土となれ

高地秀山より天降りませし

御樋代神の出でましよ

グロノス、ゴロスの醜神も

公きみの光ひかりに怖おそぢ恐おそれ

雲くもを霞かすみと逃にげ去さりぬ

かかたふとる尊たふときわが公きみの

御行みゆきに障さはる廣河ひろかはを

わが言こと靈たまの幸さちはひに

陸地くがちと爲なして進すすむべし

いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ

うゐのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせす

今日けふのよき日ひのよき時ときは

この天地あめつちの開ひらけしゆ

例ためしもあらぬ御光みひかりの

朝香あさかの比女ひめの御行みゆきぞや

河<sup>かは</sup>よ引<sup>ひ</sup>け引<sup>ひ</sup>け陸<sup>くが</sup>となれ

吾<sup>われ</sup>は神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>神<sup>かみ</sup>の宮<sup>みや</sup>

神<sup>かみ</sup>とともなる神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>の

生<sup>いく</sup>言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>に歸<sup>ま</sup>順<sup>つろ</sup>はぬ

山<sup>やま</sup>河<sup>かは</sup>草<sup>くさ</sup>木<sup>き</sup>もあ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ざ<sup>ざ</sup>ら<sup>ら</sup>め

悟<sup>さと</sup>れよ悟<sup>さと</sup>れ言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の

生<sup>い</sup>きの生<sup>い</sup>命<sup>のち</sup>の功<sup>い</sup>績<sup>さをし</sup>を

生<sup>い</sup>きの生<sup>い</sup>命<sup>のち</sup>の御<sup>み</sup>光<sup>かり</sup>を

朝<sup>あ</sup>香<sup>さ</sup>比<sup>か</sup>女<sup>ひめ</sup>の神<sup>かみ</sup>は<sup>は</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>有<sup>あ</sup>様<sup>さま</sup>を<sup>を</sup>御<sup>み</sup>覽<sup>そ</sup>し<sup>て</sup>御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>給<sup>たま</sup>ふ。

か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>歌<sup>うた</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>給<sup>たま</sup>ふ<sup>ふ</sup>や、<sup>や</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>に<sup>に</sup>廣<sup>ひろ</sup>き<sup>き</sup>濁<sup>だ</sup>流<sup>りゅう</sup>漲<sup>みなぎ</sup>る<sup>る</sup>中<sup>なか</sup>野<sup>の</sup>河<sup>が</sup>も<sup>も</sup>次<sup>し</sup>第<sup>だい</sup>々<sup>し</sup>々<sup>だい</sup>に<sup>に</sup>水<sup>みづ</sup>あ<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>始<sup>は</sup>め<sup>め</sup>ける。

初<sup>う</sup>頭<sup>ぶが</sup>比<sup>み</sup>古<sup>ひこ</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>さち</sup>は<sup>は</sup>ひ<sup>ひ</sup>て

廣<sup>ひろ</sup>河<sup>かは</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>初<sup>そ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>け<sup>け</sup>り

わが伊行く道にさやれる廣河を

生言靈に陸と爲さばや

初頭比古の神の宣らせし言靈に

中野の河は陸となるべし

駿馬に翼生やせと今宣りし

生言靈に光あらずも

一度は翼を得れど二度の

功績なきぞ駒の性なる

わが駒は荒金の土をわたりゆく

眞言の貴の駒となりける

御樋代の葦原比女の神司は

吾迎へむと出で立たしける

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

目路めぢの限かぎり吾われ眺ながむれど葦原比女あしはらひめの

神かみの御姿みすがた見みえず怪あやしも

遠とほの野のに春霞はるがすみたちて吹ふく風かぜも

いと穩おたやかに物もののかげなし」

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

汝なれが目めにたしに見みえねど葦原比女あしはらひめの

神かみは御供みともを従したがへ來きませる

時とき經ふれば此この河岸かはぎしに葦原比女あしはらひめの

神かみの御姿みすがた輝かがやき給たまはむ

さりながら中野なかのの河かはの河水かはみづは

いや次々つぎつぎに引ひきはじめけり

河底かはそこを陸地くがちちとなして向むかつ岸きしに

渡らむ時ゆ比女神來まさむ

葦原比女貴の聖所は道遠み

思はず知らず時移るべし

駿馬の蹄急がせ給へども

遠き廣野はたどたどしもよ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

初頭比古神の宣らせる言靈に

中野の河水あせにけらしな

河水よ速に引けよ御樋代の

光の神の御行なるぞや

國土稚きこの浮島を照らさむと

光の神は此處に立たせり

醜神しこがみの水みづ火かよりなりし中野河なかのがはは  
生言靈いくことたまにかわかざらめや〆

天晴比女あめはれひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

次々つぎつぎに河水かはみづ引きぬ河底かはそこの

百津石村ゆついはむらも姿現かげあらはしつ

河底かはそこに數多棲あまたすまへる魚類うろくづの

生いきの生命いのちを吾われ如何いかにせむ〆

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

河底かはそこに數多棲あまたすみてし魚類うろくづは

上津瀨かみつせ指さして逃にげ失うせにけり



上津瀬を辿りて廣き清沼に  
總ての魚類逃げ入りにけり  
河底は眞白く乾き果つるとも  
魚の命にかかはりもなし。

一二三四五六七八九十

百千萬八千萬の

神の御水火を凝らしつつ

安く渡らむこの河瀬

ああ惟神々々

生言靈に光あれ

わが言靈に生命あれ

かく歌はせ給ふ折しも、河底は百雷の一時に轟く如き大音響とともに地底より  
ふくれ上り、少しの高低もなき平面地となり變りけるぞ不思議なれ。

ここに、朝香比女の神の一行は、新しく生れたる河跡の陸地を駒並めて渡り給  
はむとする折しもあれ、萱草の野に見えつかくれつ、駒に乗りて現はれ給ふ神々  
おはしけり。この神々は、朝香比女の神一行を迎へ奉るべく鷹巢山の麓なる鷹巢  
の宮居を立ち出で、ここにやうやう着かせ給ひたる八十比女神の一柱なる葦原比  
女の神を先頭に眞以比古の神、成山比古の神、榮春比女の神、八榮比女の神、靈  
生比古の神の三男三女の天津神に在しましける。

(昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 林彌生録)

## 第一章 初対面(一九六七)

朝香比女の神は、中野河の忽ち大地と變じたる新しき地を踏みわたらむとし給

ふ折をりもあれ、この島しまの守まもり神かみとかねてより天降あもりましし八十比女神やそひめがみの一柱ひとしらなる葦あし  
原比女はらひめの神かみは、三男二女さんなんにぢよの從神じゅうしんを從したがへ、朝香比女あさかひめの神かみを迎むかへ奉たてまつるべく、漸やうやくにし  
てこれの河岸かはぎしに着つかせ給たまひ、

☐ 八十柱御樋代神やそはしらみひしろがみと選えらまれし

吾われは葦原比女あしはらひめの神かみなり

醜神しこがみの醜しこの曲業まがわざうちはらひ

光ひかりの公きみは天降あもりましぬる

天晴あはれ天晴あはれ光ひかりの神かみの御功みいさをに

グロスの島しまは明あけ放はなれたり

二十年はたとせの昔妾むかむらひは此この島しまに

天降あもりて國土くにを拓ひらかむとせし

さりながら曲津見まがみの猛たけび強つよければ

中野なかのの河かはの外とに出いでざりき

よしあしのむた茂りたる大野原を

拓き給ひし光の公はも

いや尊き光の神の御功を

伏し拜みつつ涙しにけり

高地秀の宮ゆ天降りし朝香比女の

光に四方の雲霧晴れたる

グロノスやゴロスの曲津見は河を越えて

鷹巢の山にかくろひにけり

今日よりは光の神の功績に

グロノス、ゴロスの曲津言向けむ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

八十柱御樋代神にあはむとて

吾<sup>われ</sup>は荒野<sup>あらの</sup>をわけて來<sup>き</sup>つるも

顯津男<sup>あきつを</sup>の神<sup>かみ</sup>の出<sup>い</sup>でまし日<sup>けなが</sup>長くも

待<sup>ま</sup>たせ給<sup>たま</sup>ひし公<sup>きみ</sup>の雄<sup>を</sup>々<sup>を</sup>しさ

吾<sup>われ</sup>もまた顯津男<sup>あきつを</sup>の神<sup>かみ</sup>に見<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>はむと

はるばる此處<sup>ここ</sup>に進<sup>すす</sup>み來<sup>き</sup>つるも

グロノスの島<sup>しま</sup>を今日<sup>けふ</sup>より改<sup>あらた</sup>めて

葦原<sup>あしはら</sup>の國<sup>くに</sup>と名<sup>な</sup>乗<sup>の</sup>らせ給<sup>たま</sup>へ

目路<sup>めぢ</sup>の限<sup>かぎ</sup>り陽炎<sup>かげろふ</sup>もゆる春<sup>はる</sup>の野<sup>の</sup>に

御樋代神<sup>みひしろがみ</sup>とあひにけるかも

はるばると吾<sup>わが</sup>たづね來<sup>こ</sup>し比女神<sup>ひめがみ</sup>は

いとまめやかにおはしましける  
』

眞<sup>まさ</sup>以<sup>もち</sup>比古<sup>ひこ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌詠<sup>みうたよ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

葦原比女神に仕へて二十年を

この國原にいきつきしはや

力なき吾にしあれば曲津見を

よそに見るより他なかりけり

久方のよき日めぐりて朝香比女の

貴の光を拜み奉るも

眞火をもて荒野を焼かせ給ひたる

その功績に曲津は逃げたり

曲神は暫し姿をかくせども

時經て再び猛び來らむ

公こそは光の神にましますば

國土の寶と燧石をたまはれ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ 眞まさもちひこ以ひこ比かみ古こと神はの言ことの葉はを諾うべなひて

國くに土にの寶たからと燧ひうち石をを贈おくらむ

光ひかりつよ強やくわうき夜たま光なの玉なも何なにかあらむ

生いきたる眞ま火ひの力ちからに及およばず  
㊦

眞まさもちひこ以ひこ比かみ古ことの神は御みうた歌よ詠たまませ給たまふ。

㊦ 有ありがた難ひかりし光かみの神みことの神のり宣

吾われは頸うなじにうけて忘わすれじ

朝あさ香か比ひめ女かみ神かみの賜たまひし燧ひうちいし石は

曲ま津がを征き伐ための寶たからなるかも

萱かやくさ草おの生おひ茂しげりたる鷹たかし巢やまの山に

眞ま火ひを放はなちて曲ま津がを退やらはむ

かくならば葦あしはら原の國くに土は永とこ久とはに

安く榮えむ神のまにまに」

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

わが公に仕へ奉りて中野河に

生言靈の奇瑞見しかな

御樋代の神にあはむと焼野原を

夜を日につぎて驅り來しはや

千早振る神の依さしの御樋代神は

八十比女ながらも光らせ給へる

八柱の御樋代神に仕へつつ

八十柱比女にあひにけるかも

成山比古の神は御歌詠ませ給ふ。



はろばると来ませる公を犒らはむ

術もなきかな荒野の中にて

ともかくも葦原の宮居に急ぎませ

眞言の限り仕へまつらむ

漸くに春の陽氣の漂へる

大野に立ちて樂しき吾なり

眞鶴は天津御空に列をなし

輪を描きつつ公を迎ふも

百鳥の聲もさやけくなりけり

光の神の出でまししより

今日よりは此の葦原の國中に

醜の黒雲立たじと思ふ

今日までは狭霧立ちこめ黒雲は

御空覆ひて冬心地せり

血腥ちなまぐさき風かぜの覆おほひし大野原おほのはらも

春日はるひかをりて梅うめの香かただよふ

迦陵頻伽かりようびんがひねもす終日ひねもすうたへど今日けふまでは

しめりがちなる醜しこの草原くさはら」

榮春比女さかはるひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 御樋代神みひしろがみの出いでましただに迎むかへむと

葦原比女あしはらひめの神かみいそがせり

村肝むらきもの心こころあせれど黒雲くろくもの

闇深やみふかければなやみてしはや

朝香比女神あさかひめかみの放はなたせ給たまひたる

眞火まひの力ちからに野のは開ひらけたり

よしあしの風かぜに煽あふられ燃もえさかる

さまをし見れば火の海なりけり  
疾風に焼け過ぎにける大野原は

ただ一塵も止めざりける

葦原の宮居に進む道遠み

黄昏せまるを淋しむ吾なり

願はくはこれの荒野の松かげに

今宵一夜を宿らせ給へ

明日されば駒の轡を竝べつつ

貴の聖所に導き奉らむ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

神々の厚き心に動かされ

吾は進むも葦原の宮居へ

さりながら今宵は松の下かげに  
わが公と共に雨宿りせむ〆

八榮比女神は御歌詠ませ給ふ。

〆 天津日は海の彼方に傾きて

御空に白き晝月のかけ

晝月の淡き眞下に一つ星の

かげは伊添ひて輝けるかも

月舟の右上方にやや薄き

星一つあり何のしるしか

つくづくと思へば嬉し顯津男の

神の出でまし近づきにけむ

月の下に輝き給ふ一つ星は

朝香の比女の御姿なるらむ  
月の上に薄く光れる星かげは  
葦原比女の御魂なるべし  
夕されば天津日光はなけれども  
冴え渡るらむ月舟のかけも  
𠮟

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。  
たま

𠮟  
國土稚く浮脂なす島ヶ根を

永久に固むと吾渡り來し

顯津男の神にあはむと出でたたす

朝香の比女の御供仕へつ

曲神の伊猛り狂ひしグロス島も

今日はめでたし葦原の國土よ

よしあしの生おひ茂しげりたる荒野原あらのはら

辿たどりつ分わけつ吾われは來きにけり

比ひ女神めがみの身みながら曲ま津がと戰たたかひつ

吾われは雄を心こころ湧わき立たちにけり

五ご千せん方ほう里りありと聞きゆる葦原あしはらの

島根しまねに御樋代神みひしろがみと語かたるも

村肝むらきもの心こころ勇いさみてわが胸むねの

高鳴たかなり止やまず腕うではふるへり

靈生たまなり比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 朝あさ夕ゆふに御樋代神みひしろがみに仕つかへ來きつ

今け日ふ如なす樂たのしき日ひはあらざりき

御樋代みひしろの光ひかりの神かみの現あれましに

吾魂線はうなり出でけり

鋭敏鳴出の神の宣らせる言靈に

吾葦原の曲津は失せぬる

時じくに御空包みし黒雲の

跡形もなく晴れにけらしな

主の神の依さしのままに二十年を

仕へて功なき吾を恥づる

御樋代の神は雄々しくましましてど

御供の神の力足らざり

二柱御樋代神の天降りましし

此葦原の國土は永久なれ

常世ゆく闇は漸く晴れにけり

光の神の貴の功に

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 御供に仕へ奉りて今日のごと

勇ましき戦吾見ざりけり

グロノスとゴロスの曲津見言靈に

うたれし時のさまのあはれさ

主の神の賜ひし嚴の言靈と

燧石しあれば曲津はひそまむ

いざさらば彼方の森に進むべし

一夜の雨の宿り求めて

茲に十二柱の女男の神々は、野中のこんもりとした常磐樹の森かげさして、  
昏の野路を急ぎ進ませ給ひける。黄

（昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）



第一二章 月下の宿り（一九六八）

一行十二柱の神々は、黄昏の野路を駒に鞭うたせつつ、常磐樹茂る野中に珍し  
き廣き森蔭に安着し給ひける。國土稚き島ヶ根にも似ず、松の太幹は所狭きまで  
生ひ茂り、地一面の白砂は白銀を敷きつめし如く、處々に湧き出づる清水は、底  
の眞砂も見ゆるまで、夕月の影をうつして鏡の如く輝けりけり。

この森の處々に空地ありて、居ながらに御空を仰ぎ見るを得たり。先づ二柱の  
御樋代神は、蜒蜿と龍蛇の如く梢を四方に張れる笠松の根株に、萱草を敷き足ら  
はし、安らかに御息をつがせながら御歌詠ませ給ふ。

朝香比女の神の御歌。

地稚きこの浮島にかくの如

老松の森ありとは知らざりき

海原の島かげ數多くぐりつつ

初<sup>はじ</sup>めて見<sup>み</sup>たり太<sup>ふと</sup>幹<sup>みき</sup>の松<sup>まつ</sup>を

常<sup>とき</sup>磐<sup>はぎ</sup>樹<sup>き</sup>の生<sup>お</sup>ひ茂<sup>しげ</sup>りたる森<sup>もり</sup>かげに

月<sup>つき</sup>を浴<sup>あ</sup>びつつ休<sup>やす</sup>らはむかも

此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に來<sup>き</sup>て心<sup>こころ</sup>清<sup>すが</sup>しくなりけり

十<sup>と</sup>柱<sup>しらがみ</sup>神<sup>かみ</sup>の面<sup>おも</sup>輝<sup>かがや</sup>けば

大<sup>おほ</sup>空<sup>ぞら</sup>を渡<sup>わた</sup>らふ月<sup>つき</sup>の光<sup>か</sup>清<sup>きよ</sup>み

松<sup>まつ</sup>を描<sup>えが</sup>けり眞<sup>ま</sup>砂<sup>さご</sup>の上<sup>うへ</sup>に

彼<sup>あ</sup>方<sup>ち</sup>此<sup>こ</sup>方に眞<sup>ま</sup>清<sup>しみ</sup>水<sup>づ</sup>湧<sup>わ</sup>けるこの森<sup>もり</sup>の

清<sup>すが</sup>しきかも月<sup>つき</sup>の照<sup>て</sup>れれば

大<sup>おほ</sup>空<sup>ぞら</sup>も水<sup>み</sup>底<sup>そこ</sup>も月<sup>つき</sup>の輝<sup>かがや</sup>きて

そ<sup>ゆ</sup>の夕<sup>ふくれ</sup>暮<sup>くれ</sup>の吾<sup>われ</sup>を生<sup>い</sup>かせり

草<sup>くさ</sup>枕<sup>まくら</sup>旅<sup>たび</sup>の疲<sup>つか</sup>れも忘<sup>わす</sup>れけり

常<sup>とき</sup>磐<sup>は</sup>の森<sup>もり</sup>に澄<sup>す</sup>む月<sup>つき</sup>見<sup>み</sup>つつ

葦原比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ グロス島のこの浮島も今日よりは

公の神徳に蘇へりけり

久方の御空の雲も晴れゆきて

さやけく照れる月舟のかけ

西へ行く月もあしなみとどめつつ

吾等が上に輝き給へり

天心に月はいつきて神々の

今宵の宿りを守らせ給へり

荒れ果てしこの島ヶ根をまつぶさに

拓かせ給ひし光の神はや

何時までも公の恵みは忘れまじ

國土の艱みを逐ひそけ給へば

葦原あしはらの國土くにの寶たからと賜たまひてし

貴うづの燧石ひうちは生いける神かみかも

この燧石ひうち一つひとありせば曲神まががみの

潛ひそめる山野やまぬも燒やき拂はらふべし

常磐樹ときはぎの松まつの梢こすゑに澄すみきらふ

月の面おもては千々ちぢに碎くだけつ

常磐樹ときはぎの松まつの梢こすゑゆ透すかし見みる

御空みそらの月つきは一ひと入こしほひろしも  
㊦

初頭うぶがみ比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。  
。

㊦  
曲津見まがつみの朝夕あしたゆふを荒すさびたる

この國原くにはらも月つきにかがよふ

眞清水ましみづにうつらふ月つきのかけ見みれば

千々ちぢに碎くだけて風かぜそよぐなり

大空おほぞらの限かぎりも知しらぬ星ほしかげ光けは

眞砂まさしの如ごとく輝かがやけるかも

大空おほぞらの星ほしを寫うつして眞まし清水みづの

底そこひも深ふかく空そらががや輝けり

仰あふぎ見みれば御空みそらは蒼あをく俯ふして見みれば

水底みなそこ深ふかし御空みそらを浮うかべて

眞まさ以もち比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

遙々はろばろと高地たかちほやま秀山ひよより天降あもりましし

比女ひめに伊添いそひて月つきを見みるかな

高地たかちほ秀ひよの神山みやまを照てらす月光つきかけを

ここにうつして澄すめる公きみはも

今日<sup>けふ</sup>までは醜<sup>しこ</sup>の黒雲<sup>くろくも</sup>ふさがりて

澄<sup>す</sup>みきらひたる月<sup>つき</sup>を見<sup>み</sup>ざりき

夕<sup>ゆふ</sup>されど梢<sup>こすゑ</sup>の千鳥<sup>ちどり</sup>百鳥<sup>ももどり</sup>は

今日<sup>けふ</sup>の御行<sup>みゆき</sup>を祝<sup>いは</sup>ひて寝<sup>い</sup>ねずも

梢<sup>こすゑ</sup>より梢<sup>こすゑ</sup>に渡<sup>わた</sup>る百千鳥<sup>ももちどり</sup>の

かげもさやかに見<sup>み</sup>ゆる月<sup>つき</sup>の夜<sup>よ</sup>

迦陵頻伽<sup>かりようびんが</sup>時<sup>とき</sup>じく鳴<sup>な</sup>きて田鶴<sup>たづ</sup>の舞<sup>ま</sup>ふ

うましき國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>となり<sup>に</sup>けるかも  
』

起立<sup>おきたつひこ</sup>比古<sup>ひこ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌詠<sup>みうたよ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

☐  
グロノスやゴロスの潜<sup>ひそ</sup>む魔<sup>ま</sup>の沼<sup>ぬま</sup>に

のぞみし思<sup>おも</sup>へばわが魂<sup>たま</sup>をどるも

眞晝<sup>まひるま</sup>間の光<sup>かげ</sup>冴<sup>さ</sup>えにつつ魔<sup>ま</sup>の沼<sup>ぬま</sup>の

戦いくさを守まもらせ給たまひし月つきはも

天津日あまつひは海原うなばら遠とほく沈しづみませど

白玉しらたまの月輝つきかがやき給たまへり

いや深ふかき森もりかげながら冴さえ渡わたる

月の光つきひかりに明あきらかなるも

蟻ありの這はふ庭にはさへ見みゆる明あかるさに

夜よるの旅寝たびねと思おもはざりけり

はろばると焼野やけのを涉わたり河かはを越こえ

これの清すがしき森もりに休やすむも

天地あめつちの神かみの恵めぐみのしるければ

わが行ゆく道みちは曲津まがのかげなし  
㊦

成山比古なりやまひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。  
。

春はるの夜よの月つきにはあれど空そら澄すみて

星ほしの光ひかりもまばらなりけり

仰あふぎ見みれば天あまの河原かはらは東ひがしより

西にしにめぐりて夜よはくだちたり

幾いくまん萬まんの星ほしの眞ま砂さごのきらめける

天あまの河原かはらを月舟つきふね渡わたらふ

東ひがしより西にしに流ながる天あまの河がの

中なかを漕こぎゆく月舟つきふね明あかるき

嬉うれしさに心こころ勇いさみてこの夜よ半はを

眠ねむれぬままに歌詠うたみふけるも

梟ふくろふの聲こゑも濁にごりて常磐樹ときはぎの

梢しずゑに小夜さよは更ふけ渡わたりつつ

新あたらしく生うまれし國くに土との喜よろこびを

御空みそらの月つきも壽ことほぎ給たまふか



葦原あしはらの比女ひめの神言みことのしろしめす

葦原あしはらの國くに土には未いまだ稚わかしも

稚わかき國くに土にに稚わかき月つき日ひのかけ添そひて

千代ちよの榮さかえの種たねを蒔まかばや

榮春さかはる比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

初夏しよかながらこの浮島うきしまは春はるめきて

白梅しらうめの花はなはほぐれ初そめたり

常磐樹ときはぎの森もりの下したびに白々しろじろと

梅つめの蕾つぼみは綻ほころび初そめたり

小夜さよを吹ふく風かぜに送おくられ白梅しらうめの

花はなの薰かをりの親したしき夜よ半はなり

神々かみがみは各おのも各おのもに御歌みうた詠よみて

この短夜を生き榮えつつ  
眠らむと思へど心わき立ちて  
御空の月にいつきけるかも

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

海山をもるもる越えて今宵はも

松にかかれる月舟を見し

駿馬の嘶き清く響くなり

月の下びに心をどるか

神も駒も梢の鳥も勇みたちて

春の一夜をうたひ明かすも

八榮比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 神々の貴の御歌にかこまれて

わが言の葉は出でずなりける

荒野吹く風の響きもさやさやに

常磐の森に隔てられつつ

明日されば貴の宮居に進まむと

思へば心勇みたつかも

靈生比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 目出度さの限りなりけり醜神は

雲と散りつつ月はかがよふ

御樋代の光の神の出でましに

御空の月はいよさやけし

二十年をこの稚國土に住みながら

かく澄みきりし月は見ざりし

顯津男の神の御靈と輝ける

常磐の森の月は新し

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

天も地も晴れ渡りたる國原に

澄みきらひたる月はわかしも

曲津見の棲處を焼きしわが公の

眞火の光りは天を焦せし

久方の天に昇りし焰にも

染まらで月は澄みきらひませり

かく歌ひ給ふ折りしも、次第々々に夜は更け渡り、鵲の聲、森の彼方より響か

ひ來る。

ここに十二柱の神等は、東雲の空を壽ぎつつ生言靈の神嘉言を宣り終り、白馬に跨り、鷹巢の山の麓なる貴の御館を指して急がせ給ひける。

(昭和八・一二・二一 舊一一・五 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

### 第三篇 葦原新國

#### 第一三章 春野の進行(一九六九)

中野河以西の大高原は、朝香比女の神が放ち給へる眞火の力によりて黒焦となり、地上一片の枯葉も留めず、晴々しくなりけれども、中野河を劃して以東は草

莽々の原野にして彼方此方に大蛇棲息し又は異様の動物潜伏して、深夜になれば  
總ての作物に害を與へ或は國津神の老幼を傷つけるなど、未だ全く平安の域に達  
せざりける。

茲に御樋代の神とまします葦原比女の神は、鷹巢の山の麓なる櫻ヶ丘と言へる  
小山に瑞の御舎を造り給ひ、邪神の襲來を防ぐために丘の周圍に濠を繞らし、附  
近一帶の國津神を守り給ひつつありける。故に五千里の廣袤を有する此島ヶ根  
も、御樋代神の恵に浴し其生を安んずる國津神及び諸々の生物は約四五方に過  
ぎず。要するに御樋代神の權威の及ぶところは全島の千分の一位のものなり。  
常磐の松生ひ繁る野中の森に月を愛でながら、一夜を明し給ひたる女男十一柱  
の神及び國津神の長野槌彦の一行は、夜の明くると共に各自馬上にて遙か東方な  
る櫻ヶ丘の聖所を指して一目散に進む事となりけり。  
眞以比古の神は眞先に立ち、馬上ながら歌はせ給ふ。

☐ 今日は何なる吉き日ぞや

紫し微び天てん界かいのの眞ま秀ほ良ら場ばと

其その名なも高たかき高たか地ち秀ほの

宮みや居やををははるるばる立たちち出いでし

八や柱しら神がとと現あれれまませせる

朝あさ香かのの比ひ女めのの神かむつ司かさ

嚴いづのを雄こ心ろ振ふりおこ起し

萬ばん里りのの山やま野ぬをを打うちわ渉たり

萬ま里でのの海うな原ばら横よこぎりつ

地つちままだだ稚わかきあし葦はら原の

ここれの島しま根ねにに天あ降もりまし

世よににもも珍めづしめ燧ひ石つちいし

切きりい出いでたままへへばピカピカと

四よ方もにに飛とびち散ちるる火ひのひ光ひかり

忽たちちま荒あ野らのの草くさのの根ねに

パツと燃えつく折もあれ

海原渡る潮風に

吹きあふられて忽ちに

荒野ヶ原の叢を

一瀉千里に焼き盡し

グロノス、ゴロスの曲津見は

煙にまかれ火に焼かれ

何とせむ術なきままに

永久の棲處のグロス沼

水底深く忍びけり

朝香の比女は悠々と

焼野ヶ原を打ち渉り

忍ヶ丘に夕暮を

着かせたまひつ一夜の



露つゆの宿やどりをなしたまひ  
明あくるを待まちて四よ柱しらの  
神かみに曲まが津つの征せい服ふくを  
依よさしたまへば四よ柱しらは  
勇いさみ進すすんで出いでたまひ  
さしもに深ふかき沼ぬま底そこに  
潜ひそめる曲ま津がに向むかはせて  
天あま津つ祝のり詞とを奏そう上じやうし  
生いく言こと靈たまを宣のりつれば  
遠さすの曲ま津がも辟へき易えきし  
苦くるしみながらも執しつ拗えうに  
立たち退のかむとはせざりしが  
忽たちち聞きゆる唸うなり聲こゑ  
ウウーと天あめ地つちも

さけなむばかり鋭敏鳴出の

神の功いさをに曲津見は

雲くもをば起おこし雨降あめふらし

龍蛇りうだの正體現しやうたいあらはして

鷹巢たかしの山やまの谷たにの閒まを

目めざして霞かすみと逃にげさりぬ

茲ここに四柱神々よはしらかみがみは

忍しのぶがをヶ丘をかにおはします

朝香あさかの比女ひめの御前おんまへに

一伍いちぶしじふ一仕ものがたりの物語

宣のらせたまへば比女神ひめがみは

其功績そのいさをしを嘉よみしまし

野槌ぬづちの彦ひこと諸共もろともに

櫻さくらがをヶ丘をかの清庭すがにはに

進<sup>すす</sup>みゆかむと密<sup>ひそ</sup>やかに  
經<sup>しぐみ</sup>綸<sup>いと</sup>の絲<sup>く</sup>を繰<sup>く</sup>りたまふ  
道<sup>みち</sup>に當<sup>あた</sup>りし中<sup>なか</sup>野<sup>の</sup>河<sup>が</sup>の  
廣<sup>ひろ</sup>き流<sup>なが</sup>れを言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の  
光<sup>ひかり</sup>に陸<sup>く</sup>地<sup>がち</sup>となしたまひ  
河<sup>かは</sup>の東<sup>ひがし</sup>に渡<sup>わた</sup>らむと  
思<sup>おも</sup>ほす折<sup>をり</sup>しも吾<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>は  
葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>がみ</sup>に從<sup>したが</sup>ひて  
謹<sup>つつし</sup>み出<sup>で</sup>迎<sup>むか</sup>奉<sup>たてまつ</sup>り  
此<sup>この</sup>島<sup>しま</sup>ヶ根<sup>がね</sup>の曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>を  
罰<sup>きた</sup>めたまひし鴻<sup>こう</sup>恩<sup>おん</sup>を  
心<sup>こころ</sup>の限<sup>かぎ</sup>り感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>しつ  
はや黄<sup>たそ</sup>昏<sup>がれ</sup>に近<sup>ちか</sup>づけば  
野<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>の森<sup>もり</sup>の松<sup>まつ</sup>かげに

月つきのひとよ一夜を明あかしつつ

思おもひおも思おもひおもに語かたり合あひ

歡よろこぎたの樂たのしむ其その状さまは

天あまの岩いはと戸ひらの開ひらけたる

嬉うれしき樂たのしき思おもひなり

東ひがしの空そらは茜あかねさし

紫しうん雲あまをわけて天津あまつ日は

豐とよ榮さかりたまひける

百もも鳥どり千鳥ちどりのなく聲こゑは

常とこ世よの春はるをうたひつつ

處ところ々に咲さき香におほふ

白しら梅うめの花はな美はなはしく

迦かり陵よう頻びん伽がに送おくられて

眞ま鶴なづるうたふ大おほ野の原はらを

十一柱の神々は

野槌の彦を従へて

荒野ヶ原を涉りつつ

櫻ヶ丘の御舎を

さして進むぞ勇ましき

ああ惟神々々

神の眞言の御經綸

吾等は謹み敬ひて

朝な夕なを楔しつ

生言靈の幸はひに

豊葦原の新國土を

開きゆくこそ楽しけれ

櫻ヶ丘も近づきて

吹き來る風も芳ばしく

遠野とほのの奥おくに燃え立もたてる

陽炎かげろひゆたか豊はなに花はなの香かを

野邊のべ一面いちめんに送おくるなり

ああかむながらことたま惟ことたま神言靈かむながらことたまの

嚴いづの御水みい火きに光ひかりあれ

わが言靈ことたまに生命いのちあれ」

葦原あしはら比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐  
天晴あはれ天晴あはれ光ひかりの神かみはあれましぬ

葦原あしはらの雲くも吹ふき拂はらひつつ

二十年はたとせを忍しのび忍しのびて守まもりてし

この葦原あしはらの國土くには生いきたり

朝香比女神あさかひめかみの神言みことの功績いさをしに

豊葦原とよあしはらと開けゆくなり

葦原あしはらの中津神國なかつみにくには曲津見まがつみの

朝夕あさゆふ荒ぶ醜處しことなりける

醜國しこくにも豊葦原とよあしはらの安國やすくにと

開け行くひらかも生言靈いくことたまに

顯津男あきつをの神かみの天降あもらす朝迄あさまでに

開きひらおくべしこの葦原あしはらを

朝香比女神あさかひめかみの賜たまひし燧石ひうちこそ

葦原あしはらを開ひらく光ひかりなりける

此燧石このひうち二十年はたとせまへ前に吾われもたば

この葦原あしはらは榮さかえしものを

國津神くにつかみ數多あまたあれども曲津見まがつみの

醜しこの奸計たくみに滅ほろほされける

櫻さくらヶ丘宮がをかみやの近くちかの國津神くにつかみは

纒わづかに命保いのちたまちけるはも

今日けふよりは國津神等くにつかみたち大空おほぞらの

星ほしのごとくに生うみ育そだつべし

國津神くにつかみよ御子みこを生うめ生うめ榮さかえよ榮さかえ

この葦原あしはらは今日けふより安やすけし

四柱よはしらの神かみを率ひきゐて天降あもらしし

八柱やはしら比女神ひめがみを迎むかふる今日けふかな  
□

朝香比女あさかひめの神かみは馬ば上じやう豊たかに御歌詠みうたよませ給たまふ。  
□

葦原あしはら比女神ひめがみの領有うしはぐこの島しまを  
□

吾恣わがしいままに燒やき拂はらひけり

主あるじなき島しまと思おもひて曲津見まがつみを

拂はらひ退やらふと眞火まひを放はなちし



進<sup>すす</sup>み來<sup>く</sup>れば國<sup>くに</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>等<sup>ら</sup>の住<sup>す</sup>めるを<sup>み</sup>て

葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>のおはすと悟<sup>さと</sup>りし

顯<sup>あきつ</sup>津<sup>つ</sup>男<sup>を</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>許<sup>もと</sup>に侍<sup>さむ</sup>らふと

吾<sup>われ</sup>は旅<sup>たび</sup>行<sup>ゆ</sup>く道<sup>みち</sup>すがらにて

由<sup>ゆ</sup>縁<sup>かり</sup>ある此<sup>この</sup>島<sup>しま</sup>ヶ根<sup>がね</sup>に立<sup>たち</sup>寄<sup>よ</sup>りて

御<sup>み</sup>樋<sup>ひろ</sup>代<sup>が</sup>神<sup>がみ</sup>に會<sup>あ</sup>ひにけらしな

非<sup>とき</sup>時<sup>じく</sup>の香<sup>か</sup>具<sup>ぐ</sup>の木<sup>こ</sup>の實<sup>み</sup>ゆ生<sup>あ</sup>れませる

葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>の清<sup>すが</sup>しさ

主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>の永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>にまします高<sup>たか</sup>宮<sup>みや</sup>ゆ

天<sup>あ</sup>降<sup>も</sup>りし公<sup>きみ</sup>は八<sup>や</sup>十<sup>そ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>

國<sup>くに</sup>々<sup>くに</sup>に八<sup>や</sup>十<sup>そ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>がみ</sup>を配<sup>くば</sup>りおきて

國<sup>くに</sup>魂<sup>たま</sup>生<sup>う</sup>ます主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>天<sup>あ</sup>晴<sup>は</sup>れ

御<sup>み</sup>樋<sup>ひろ</sup>代<sup>が</sup>の神<sup>かみ</sup>は何<sup>いづ</sup>れも主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>の

水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に生<sup>う</sup>まれし神<sup>かみ</sup>柱<sup>はしら</sup>なる

かくのごと尊たふとき御み槌ひしろ代かみ神かみをもて

國くに魂たま生うますと瑞ずゐ靈れいたまひぬ

大だい家か族ぞく國くにをつくと主すの神かみは

顯あきつ津つ男をの神かみ獨ひとりを依よさせり

御み槌ひしろ代しろは主すの神かみの御み子こ國くに魂たまは

瑞みづの御み靈たまの御み子こなりにけり

葦あし原はら比ひ女め神かみよ吉よき日ひを待またせつつ

瑞みづの御み靈たまと國くに魂たま生うみませ

吾われも亦また顯あきつ津つ男をの神かみの御おん許もとに

進すすみて國くに魂たま生うまむとぞ思おもふ

遙はろ々と曲まが神かみの荒すさぶ西にし方かたの

國くに土にに進すすまむ吾われなやみつつ

初う頭ぶ比が古みの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 初夏の野も春彌生の心地して

大原の奥に陽炎立つも

陽炎の燃え立つ野邊を駒竝めて

進むも樂し櫻ヶ丘へ

ぼやぼやと吾面を吹く風のいきに

吾目ねむたくなりにはらしな

駿馬も歩みをゆるめて眠ること

大野の草を分けつつ進めり

駒の背にゆるく揺られて知らず識らず

ねむけ催す春野の旅なり

成山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 久方の高地秀山ゆ天降りましし

朝香あさかの比女神ひめがみ迎むかふる嬉うれしさ

仰あふぎ見みれば鷹巢たかしの山やまの頂いただきは

紫雲しうんの衣きぬをつけて迎むかふる

野路のぢを吹ふくねむたき風かぜの息いきづかひ

聞ききつつ進すすむ駒こまの遅おそきも

終夜よもすがら眠ねむりもやらず月舟つきふねの

下したびに遊あそびて睡氣ねむけ催もよほす

榮春さかはる比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

葦原あしはら比女神ひめがみの御供みともに仕つかへつつ

朝香あさか比女ひめの神かみの出いでまし迎むかへし

仰あふぎ見みれば朝香あさかの比女ひめの御上おんうへに

光ひからせたまへり鋭敏うな鳴出りづの神かみは

鋭敏鳴出の神は御姿現はさず

陰にいそひて守らせたまへる

吾公に守り神なし如何にして

この葦原を拓きますらむ

さりながら生言靈の天照らす

國土にしあれば安く開けむ

とつおひつ思案に暮れて二十年を

功績もなく過ぎにけらしな

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

狭野の島と萬里の島ケ根造りをへし

朝香の比女神ここに來ませり

葦原比女神の神業を補ふと

出いでましにけむ朝香比女あさかひめの神かみは

朝香比女神あさかひめかみに朝夕あさゆふ仕つかへつつ

眞言まことの光ひかりを悟さとり得えざるも

奥底おくそこのわからぬ御み稜威いづを保たもちます

朝香比女神あさかひめかみは御光みひかりなりけり

八榮比女やさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

桜さくらヶ丘がをの貴うづの宮居みやゐを立たち出いでて

朝香比女あさかひめの神かみを野のに迎むかへける

朝香比女神あさかひめかみの神言みことを仰あふぎてゆ

吾目眩わがめまぶしくなりにけらしな

言こと霊たまの天照あまてり渡わたす朝香比女あさかひめの

神かみは光ひかりにましましにけり

初夏しよかなれど葦原あしはらの國土くには風寒かぜさむく

櫻さくらの花はなは眞盛まさかりなりけり

白梅しらうめと桃ももと櫻さくらの一時ひとときに

櫻さくらヶ丘がをの聖所すがとに匂にほへり

せめてもの旅たびを慰なぐさめまつるべく

花はな咲さきみつる聖所すがとに導みちびかむ  
㊦

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
㊦

㊦  
梅櫻桃うめさくらももも一度いちどに咲さくと言いふ

珍うづの景色けしきを眺ながめまほしけれ

吾公わがきみの御供みともに仕つかへて百花ももばなの

薰かをる聖所すがとに進すすむ樂たのしさ

もやもやと四方よもの山野やまぬに霞かすみ立ちて

吹ふき來くる風かぜは花はなの香か包つめり  
草くさ枕まくら旅たびの宿やどりの樂たのしさは  
花はなの盛さかりの春はるにあふなり㊦

天あめ晴はれ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

㊦  
吾わが公きみは萬ばん里りの荒あ野らのを涉わたりつつ

國くに魂たま生うまむと來きたりますかも

國くに魂たまあれますまでは御おん供ともに

吾われ仕つかへむと從したがひ來きたりし

西にし方かたの國くに土には遙はろけしさりながら

神かみの御み稜いづ威すに進すすまむと思おもふ

葦あし原はらのこの浮うき島しまの風ふう光くわうを

眺ながめて國くに土にの榮さかえを偲しのぶも



遠方をちかたの遠野とほのの奥おくに輝かがやける  
眺ながめは雲くもかも山櫻やまのうゑかも  
□

靈生たまなり比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。  
□

目路めぢ遠とほく雲くもか花はなかとまがふなる  
□

聖所すがとに吾われは導みちびきゆかむ

櫻さくらヶ丘らがをの宮みやの聖所すがとの美うるはしさを

五柱神いつはしらがみに見みせたくぞ思おもふ

駿馬はやこまの脚あしを急いそげば黄昏たそがれに

櫻さくらヶ丘らがをに歸かへり得うべけむ

夕ゆふされど月つきの光ひかりのさやかなれば

櫻さくらヶ丘らがをにひたに進すすまむ  
□

かく神々は馬上にて日長の退屈さに交々御歌詠ませつつ、其日の黄昏るる前、  
漸くにして櫻ヶ丘の聖所に着きたまひ、迎へまつる數多の國津神等の敬禮をうけ、  
新しく築かれし八尋殿に上りて、月を賞め夜櫻を讚へながら、短き春の一夜を過  
させたまひける。

(昭和八・一二・二二 舊一一・六 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

## 第一四章 花見の宴(一九七〇)

葦原比女の神の廿年來鎮まりいます櫻ヶ丘の聖所は、面積比較的廣く、東西一  
里南北二里に亘り、梅、桃、櫻、楓、無花果、橘、椿、山吹等の果樹の彼方此方  
に鹽梅よく植ゑ込まれ、其周圍には曲津神の襲來を防ぐべく深き濠を圍らし、表  
門には一筋の岩以て造りたる橋を架け渡し、風光絶佳の妙境なりける。今を盛り  
と咲き揃ひたる梅、桃、櫻の花は芳香を四邊に薰じ小鳥は歌ひ蝶は舞ひ、此聖所

の彼方此方には丹頂の鶴、鷺など春の陽氣をうたひ喜び遊べる状態は、恰も廣重の畫を見る如き光景なりける。

葦原比女の神は遠來の客を心の限りを盡して犒はむとし、諸神に命じて種々の珍しき果物等を横山の如く置き足らはし、五柱の神々を正寶として大宴會を開かせ給ひける。

茲に數多の國津神は、高地秀の宮居より救ひの神現れますを傳へ聞き、先を爭ひ集ひ來り、濠の外側に「ウオウオ」と叫びながら踊り狂ひ跳び廻り、感謝と歡喜の至誠を表しにける。

茲に朝香比女の神は百花の爛漫と咲き亂れたる状を珍しみ給ひ、庭の面に立出で給へば、數多の國津神は濠を隔てて其輝ける御姿を拜し奉り、天の岩屋戸の開けたる如く、各自に言靈のあらむ限りを鳴り出で、仰ぎつ俯しつ感謝と歡喜の聲は、天地も爲に覆へるばかり思はれにける。

朝香比女の神は四邊の珍の景色を暫し眺めつつ再び八尋殿に歸り、設けの席に着かせ給へば葦原比女の神は敬意を表すべく、あらむ限りの盛裝を盡して種々の

美味物を御手づから朝香比女の神に奉り、且つ打解けて國土の現状など包まず隠さず語らひ給ふにぞ、朝香比女の神も其隔てなき眞心を甚く喜ばせ給ひ、御歌もて心のたけを宣らせ給ふ。

☪ 隔てなき葦原比女の神宣

聞きて吾魂清しく生くるも

風光の殊に勝れし櫻ヶ丘の

聖所に吾は命を延ばせり

心あつき神々等の待遇に

感謝の涙湧き出づるかも

美はしき淨き装ひ凝らしまして

吾等を迎へし神の尊さ

いつの世にか吾忘れめや清しかる

花の神苑に一日を遊びて

美はしく装ひませど光ある  
寶石の飾りなきが床しき

葦原比女の神は御歌もて酬へ給ふ。

葦原の國土には葦葦草の

生ふるのみにて寶石はなし

音に聞く萬里の島根はダイヤモンド

其他の寶石澤なりと聞く

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

この光るダイヤモンドは萬里の島の

田族比女より賜はりしはや

吾こそは光の神となりければ

ダイヤモンドの光はいらなく

此玉を燧石と共に葦原比女の

神の御前に贈らむと思ふ

いざさらば受けさせ給へ常闇の

夜さへ光るダイヤモンドよ

葦原比女の神は感謝の意を表しながら御歌詠ませ給ふ。

葦原の國士の鎮めの燧石を

賜ひし上に玉を賜ふか

有難し公が賜ひし此玉を

國士の寶と永遠に傳へむ

月のなき夜は此玉を力とし

曲津まがつを避さけて國土くにを守まもらむ<sup>□</sup>

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

吾わが贈おくるダイヤモンドの光ひかりよりも

眞火まひこそ夜光やくわうの玉たまにぞありける

此この眞火まひの功いさをによりて常世とこよゆく

闇やみの幕とぼりも清きよく晴はるべし<sup>□</sup>

葦原比女あしはらひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

眞言まことある公きみの御教畏みをしへかしこみて

國津神等くにつかみらを導みちびかむと思おもふ

龍大蛇醜たつをろちしこの曲津見まがつも今日けふよりは

公きみの光ひかりに滅ほろび行ゆくべし

此この國くに土にを豐とよ葦あし原はらの中なか津つ國くにと

永と遠はに定さだめて國くに魂たま生うまむ

五ご千せん方はう里りの國くに土に廣ひろければ端はし々ばしは

未まだ潛ひそむなり醜しこの曲ま津が見つは

今け日ふよりは百もも神が等たちと村むら肝ぎもの

心こころを合あせ曲ま津がを罰きためむ

眞まさ以もち比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

吾わが公きみは夜やく光わうの玉たまを得えましけり

朝あさ香か比ひ女め神がの心こころの光ひかりに

曲ま津が見つを燒やき盡つくすべき燧ひうち石いしと

玉たまを賜たまひし光ひかりの神かみはや



常闇とこやみを隈くまなく照てらす御光みひかりの

神現かみあれましぬ櫻さくらヶ丘がをかに

春風はるかぜに櫻さくらの花はな辨びらひらひらと

散ちり込こみにけり八尋やひろの殿とのに

杯さかづきの波なみに一ひとひら浮うきて匂におふ

櫻さくらは國くに土にの花はなにぞありける

葦原あしはらの國くに土にの標章しるしと今日けふよりは

櫻さくらの花はなを旗はたに印しるさむ

成山なりやま比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

葦原あしはらの國くに土にの曲津まがつ見言みことむ向けし

光ひかりの神かみと伊向いむかひ居あるかも

何なによりも尊たふとき玉たまを賜たまひけり

眞火まひの燧石ひうちと夜光やくわうの玉たまを

吾公わがきみの御胸みむねに翳かぎし花はなの丘をかに

立たせ給たまへば美うるはしからむを

比女神ひめがみの髪かみの翳かぎしの櫻花さくらばなも

夜光やくわうの玉たまには及およばざりける

初頭うぶがみ比古みひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

此處ここに來きて春はるの彌生やよひの心こころしぬ

花はなの林はやしに百鳥ももとりの聲こゑ

百鳥ももとりは花はなの梢こすゑを飛とび交かひつ

吹ふき來くる風かぜに香かりを散ちらせり

いつまでも花はなの盛さかりのあれかしと

願ねがふは一人ひとり吾われのみならじ

萬里までの島しまは初夏はつなつなりしに此處ここに來きて  
若わかやぎにけり春はるの花見はなみつ  
□

榮春比女さかはるひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□  
春はるの日の榮さかえを吾われは目まの前あたり

櫻さくらヶ丘がをかに清すがしみ見みるも

御光みひかりの神かみの現あれます此この丘をかは

梅桃櫻うめざくらもも一いち度どに笑わらへり

花笑はなわらふ春はるの彌生やよひを嬉うれしみて

小鳥ことりはうたひ蝶てふは舞まふなり

葦原あしはらの國くに土との常世とこよの春はるうたふ

山鶯やまうぐいすは神かみの御聲みこゑか

鶯うぐいすも迦陵頻伽かりよつびんがも花はなの春はるを

終日あかずうたひ續くる  
』

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

荒れ果てし此新國土にも斯の如

聖所ありとは知らざりにけり

葦原の此處は地上の天國か

國津神等の歡ぎの聲すも

常磐樹の松の緑の下蔭に

百花千花咲き匂ひつつ

地の上に天國建つる御樋代の

神の功と仰がれにけり

願はくは幾億萬年の末までも

梅桃櫻は傳へたきかな

仰あふぎ見みる紫し微び天てん界かいの中なかにして

斯かく麗うるはしき神み苑そのは見みざりき

八や十その國くに八や十そ島しままぎて吾われは今いま

地ち上じ天やう界てんの苑かいに遊あそびぬ

仰あふぎ見みる雲くも井みの空そらに屹きつ然ぜんと

春はるめき立たてる鷹たかし巢しの山やまかも

白しら雲くもの帶おびを締しめたる鷹たかし巢し山やまの

春はるの姿すがたは一ひと入しほさやけし

今け日ふまでは鷹たかし巢しの山やまも黒くろ雲くもに

非とき時じく包つつまれ雨あめを降ふらしつ

杯さかづきの數かず重かさなりて吾われは今いま

心こころ狂くるはしく勇いさみたつなり

八や榮さ比か女ひめの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

廣々ひろびろと廻めぐれる濠ほりの面おも蒼あをみ

眞鯉まごひ緋鯉ひごひの跳はぬる春はるなり

水みづの面もに跳とび上あがりつつ眞鯉まなごひは

春はるの光ひかりに鱗うろこを照てらせり

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

聞きくからに名なも怖おそろしきグロノスや

ゴロスの潜ひそみし島しまとは思おもへず

斯かくの如ごとき浄きよき清すがしき櫻さくらヶ丘がをに

春はるの旅路たびぢの疲つかれを慰なぐさむ

氣魂からたまも神魂みたまも春はるの光ひかり見みつ

蘇よみがへりたる櫻さくらヶ丘がをかも

山やまも野のも春霞はるがすみしてそよ吹ふく

風は千花の香り含めり  
はしけやし櫻咲くなり此丘に  
御樋代神と春を親しむ  
〓

靈生比古の神は御歌詠ませ給ふ。

曲津見の醜の荒びに艱みてしを

安けく春に今日を逢ひける

御光の神の天降りの無かりせば

櫻の薫る春は來らじ

七八年梅桃櫻の花咲かず

風冷えにつつ曇らひにつつ

花の木は數多あれども曲津見の

邪氣に曇りて春はなかりき

昨日きのふまで冷え渡りたる天地あめつちの

冬ふゆは忽たちまち春はるとなりける

二十年はたとせを此島このしまヶ根がねに住すみにつつ

花はな咲く春はるに逢あはざりにけり

梓弓あづさゆみ春はるの永日ながひも傾かたむきて

黄昏たそがれの幕まくは降おりにけらしな

天津日あまつひは隠かくろひ給たまへど大空おほぞらを

渡わたらふ月の光つきのさやけさ

常磐樹ときはぎの森もりに眺ながめし月舟つきふねを

今宵こよひは櫻ヶ丘さくらがをかに見みるかも

櫻木さくらぎの花はなの梢こすえの露つゆ照てりて

其美そのうらはしさ彌いやまさりつつ

御空みそら行く月つきも愛めでさせ給たまふらむ

櫻ヶ丘さくらがをかの花はなの盛さかりを



天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

珍めづらしき月の光ひかりに照てらさるる

夜の櫻さくらは又またも珍めづらし

草枕旅くさまくらたびの疲つかれも櫻さくらヶ丘がをかの

月つきと花はなとに忘わすらひにけり

爛漫らんまんと咲さき亂みだれたる梅桃櫻うめももさくらの

春はるの姿すがたを公きみに見みるかな

月つきも花はなもたぐはむ術すべもなかるべし

朝香あさかの比女ひめの神かみの光ひかりに

葦原あしはらの國くに士の眞ま秀ほ良ら場ばに新あたらしく

清すがしく建たてる八尋殿やひろどのはも

八尋殿やひろどのに夕ゆふへを立たちて花はなに照てる

御空みそらの月つきに吾魂わがたま生いかしつ

いつまでも花は梢に止まらで

嵐に散り行く思へば惜しきも

鶯も迦陵頻伽も百鳥も

今日の一日を楽しく遊べよ

今日こそは花の眞盛りよ明日されば

此清庭に花筵せむ

斯く神々は月と花とを賞め讃へ乍ら、終日旅の疲れを休らひ、常世の春を言祝  
ぎ給ひける。

(昭和八・一二・二二 舊一一・六 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

第一五章 聖地惜別(一九七一)

廣袤五千方里ありと言ふ葦原の島根は、朝香比女の神の生言靈の光りと眞火の功に、曲津見の棲處は焼き拂はれ、再び潛める鏡の沼の永久の棲處は打破られて、グロノス、ゴロスの邪神の巨頭も苦しさに堪へず、雲を起して鷹巢山の谷間深く忍び入りければ、一時は平穩無事に治まりたれども、時ありて黒雲を起し天日を覆ひ、寒冷の氣を四方に散布しければ、萬物の發生に大害を及ぼし、再び元のグロスの島に歸らむとしたるを、この度は葦原比女の神も朝香比女の神の賜ひし燧石の眞火の功によりて、諸神等を率ゐ邪神の潛む山野を焼き拂ひ給ひければ、遂には葦原の國土をふり捨てて惡魔は遠く西方の國土に逃げ去りにける。

朝香比女の神は櫻ヶ丘の聖所に、三日三夜月花を賞しつつ安く過させ給ひ、神々に別れを告げて再び海路の旅を續け給ふ事とはなりぬ。

朝香比女の神は朝夕神前に神言を宣らせ給ひ、天の數歌を宣り上げ給ひて、葦原の國土の天地を清め給ひければ、四季の順序よく、春は花咲き、夏は植物繁茂し、秋は五穀果實みのり、ここに國津神の生活を安からしめ給へり。

朝香比女の神は櫻ヶ丘の聖所を立ち去らむとして、御歌詠ませ給ふ。

掛巻も畏き神のもてなしに

三日の春日を遊びけるかも

したはしき神に別れを告げてゆく

今日の朝の名残惜しきも

花匂ふ櫻ヶ丘は吾が爲に

永久に忘れぬ記念となりぬ

百神の厚き心に圍まれて

一日二日三日と過ぎぬる

曲津見の再び襲ひ来るあらば

眞火の力に拂はせ給へ

御樋代の神に贈りし燧石こそ

吾神魂ぞや吾生命ぞや

國土生みの旅に出で立つ道の隈を

安く守れる燧石なりけり

葦原比女の神は別れ惜しみて御歌詠ませ給ふ。

なつかしの公は立たすか悲しもよ

長く侍らむ願ひなりしを

この丘の梅も櫻も散り初めて

公が出でまし惜しむがに見ゆ

公去らば櫻ヶ丘の百花も

小鳥の聲もとみにしをれむ

願はくは今夜の旅枕

許させ給へこれの聖所に

御空ゆく月日の駒のその如く

止まらぬ公を惜しまるかな

御光の公の恵に葦原の

國土は常世に榮えゆくべし

萬世よろづよに傳つたへて公きみの功績いさをしを

たたへ奉まつらむ宮居みややを仕つかへて

御樋代神みひしろがみ贈おくり給たまひしこの燧石ひうちは

神實かむたねとして齋いつきまつるも

曲神まががみの伊猛いたけり狂くるふ時ときしあらば

この神實かむたねに祈いのりて防ふせがむ』

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

いざさらば櫻さくらヶ丘がをかの神々かみがみに

別わかれて行ゆかむ西方にしかたの國くに土にへ

葦原比女神あしはらひめがみの愛かなしき御心みこころに

ひかれて立つ身みは苦くるしくなりぬ』

眞まさ以もち比ひ古この神かみは別わかれの御歌みうた詠よませ給たまふ。

天津あまつ日ひの如ごとく天降あもりし御光みひかりの

神かみに別わかるる今日けふぞ悲かなしき

言こと靈たまの限かぎりつくして御光みひかりの

神かみを止とどむる術すべもなきかな

曲まが神かみの醜しこの曲業まがわざことごとく

治をさめ給たまひし光ひかりの公きみはも

御光みひかりの神かみの出いでましし葦原あしはらは

又またも曇くもらむ曲津まがつの邪氣いきに

月つきも日ひも御空みそらに輝かがやき給たまひしは

公きみの光ひかりの功いさをなりけり

永とこ久しへに公きみの御魂みたまをいつきつつ

葦原あしはら國土くにの鎮しづめと爲なさむ

御光みひかりの神かみの御魂みたまをいつかひて

朝あさな夕ゆふなを吾われ仕つかふべし

顯津男あきつをの神かみの出いでます吉日よきひ迄までに

御舍造みあらかつくり待まち侍はべるべし

顯津男あきつをの神かみの御靈みたまの御前おんまへに

この有様ありさまをたしに傳つたへませよ

成山なりやま比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

七八年ななやとせ花はなを見みざりしこの丘をかも

公きみのお成なりに咲さき出いでにける

草くさも木きも公きみの御行みゆきをゑらぎつつ

一いち度どに花はなの咲さき出いでしはや

この島しまの森羅萬象よろづのものはなげくらむ



ひかり 光の神のいまさずと聞かば  
ことたま 言靈の限りつくせし御光の  
かみ 神は月日と共に去りますか

たまなりひこ 靈生比古の神は御歌詠ませ給ふ。

あしはら 葦原の國土の曲神を打ち拂ひ

いさを 功しるけき光の公はも

ひさかた 久方の天津空より天降り來て

ひかり 光の神は闇を照らせり

よはしら 四柱の御供の神のはたらきに

わかぐに この稚國土は光り満ちつつ

なかのがは 中野河の河底までも乾かせて

わた 渡り來ませし功を思ふ

草も木も公の現れましありし日ゆ

若芽萌えつつ息づきてをり

御空ゆく天津日光も止まりて

今朝の別れを嘆かせ給へり

なげくとも詮すべなけれ御樋代の

光の神の今日の御行は

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

この島に公に仕へて上り來つ

やさしき神のもてなしに會ひぬ

別れゆく今朝を惜しけく思ふかな

花も實もある神をのこして

はるばると荒野を渉り海を越えて

出いでます公きみに仕つかふる吾われなり  
いざさらば御み樋ひ代しろ神がみよ百もも神がみよ

安やすくましませ吾われは歸かへらむ

濠ほりの面もにあぎとふ小さ魚なの影かげ見みえて

春はる陽ひはゆたにさしそひにけり  
☐

榮さか春かはる比る女ひめの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 仰あふぎ待まちし光ひかりの神かみは悲かなしくも

別わかれて旅たびに今け日ふ立たたすかも

永とこ久しへの春はるの榮さかえを祈いのりつつ

公きみにいそひて守まもり仕つかへむ

花はな匂にほふ櫻さくらヶ丘らがをの聖すが所どこに

公きみの御み行ゆきの幸さちを祈いのらむ

輝ける御樋代神の御姿に

吾魂線も清まりしはや

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

朝香比女神にまつるひここに来て

ゆたけき春に吾あひにける

ゆたかなる神の眞言に包まれて

思はず知らず日は經ちにけり

吾は今春の光のただよへる

聖所を惜しく別れむとするも

今日よりは又も進まむ焼野ヶ原を

駿馬の背に鞭を打ちつつ

野邊を吹く風に鬣くしけづり

濱邊をさして進む今日かな

八榮比女の神は御歌詠ませ給ふ。

たまさかに天降りし光の神等を

見送る今日の涙ぐましも

まめやかに出で立ちませよ曲神の

伊猛り狂ふ闇世なりせば

葦原の國土の寶を賜ひつつ

出で立ちますも光の神は

せめて吾を濱邊に送らせ給へかし

又まみゆべき時のなれば

吾のみか葦原比女の神司も

送らせ給へ御舟の側まで

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 種々の清き心のもてなしに

吾は心も足らひけるかな

情深き神々に別れゆく

今日の旅路の惜しまるるかな

そよと吹く春風さへも香りつつ

吾ゆく旅をゆたに守らむ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 大空の醜の黒雲吹き散りて

天津日照らふ葦原清しも

なつかしき清しき國土を立出でて

曲神まがみにくもる國土くにに渡らむ  
種々くさくさの神かみの親したしきもてなしに  
あひし吾身わがみの幸さちは忘れじわす」

ここに朝香比女あさかひめの神かみは三日三夜の宿りやどを重ね百神等ももがみたちに別れわか、これの聖所すがとを立出たちい  
で給ふたまや、葦原比女あしはらひめの神かみはせめて濱邊はまへまで見送みおくらせ給へたまと乞こひつつ、以前の神々かみがみ  
を従したがへまして御後みあとより駒こまを打たせ進すすませ給ふたま。

眞まさ以もち比ひ古この神かみは道みちの案内あないといや先さきに駒こまを打たせ給ひつつ、御歌詠みうたよませ給ふたま。

久方ひさかたの天津月日あまつつきひに比くらぶべき

光ひかりの神かみの御行尊みゆきたふとき

吾われは今光いまひかりの神かみの御前おんまへを

守まもりてゆかむ御舟みふねのかたへに

草くさも木きも蘇よみがへりたる大野おほのがはらヶ原を

見<sup>み</sup>つつ 樂<sup>たの</sup>しも 吾<sup>わが</sup>駒<sup>こま</sup>勇<sup>いさ</sup>みつ

見<sup>み</sup>渡<sup>わた</sup>せば 醜<sup>しこ</sup>の 醜<sup>しこ</sup>草<sup>くさ</sup>ことごとく

燒<sup>や</sup>き 拂<sup>はら</sup>はれて 目<sup>め</sup>路<sup>ぢ</sup>はるかなり

天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>は 燒<sup>や</sup>野<sup>の</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>を 照<sup>て</sup>らしつつ

吹<sup>ふ</sup>き 來<sup>く</sup>る 風<sup>かぜ</sup>も 春<sup>はる</sup>の 香<sup>か</sup>ただよふ

一<sup>ひと</sup>片<sup>ひら</sup>の 雲<sup>くも</sup>霧<sup>ぎり</sup>も なき 蒼<sup>あを</sup>空<sup>ぞら</sup>の

下<sup>した</sup>びを 進<sup>すす</sup>む 公<sup>きみ</sup>の 供<sup>とも</sup>かも

成<sup>なり</sup>山<sup>やま</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>の 神<sup>かみ</sup>は 御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ 給<sup>たま</sup>ふ。

見<sup>み</sup>の 限<sup>かぎ</sup>り 荒<sup>あ</sup>野<sup>らの</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>は 清<sup>きよ</sup>らけく

眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>の 功<sup>いさを</sup>に 拂<sup>はら</sup>はれにけり

醜<sup>しこ</sup>草<sup>くさ</sup>の 中<sup>なか</sup>に 潛<sup>ひそ</sup>みし 曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>の

影<sup>かげ</sup>消<sup>き</sup>え 失<sup>う</sup>せて 天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>照<sup>て</sup>らふ



春はるの野のに駒こまを竝ならべて進すすみゆく

今日けふの旅路たびぢの悲かなしさゆたかさ

七重ななへ八重やへ十重とへに二十重はたへに包つつみたる

雲くもも御稜威みいづに晴はれ渡わたりける

御光みひかりの神かみのこの地ちに天降あもりしゆ

風塵ふうぢんもなくをさまりしはや

鷹巢山たかしやまは白雲しらくもの上へにぬき出いでて

公きみの御行みゆきをはるかに送おくるも〆

靈生たまなり比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

天地あめつちの中なかに悲かなしき極きはみこそ

光ひかりの公きみを送おくる朝あさなり

今日けふよりは光ひかりの神かみの御姿みすがたを

拜をがむよしなき葦原あしはらの國くに土に

さびしさの限かぎりなるかも地つち稚わかき

この國原くにはらに公きみのまさずば

さりながら葦原あしはら比女ひめの神かみの嚴いづ

今日けふよりますます輝かがやき給たまはむ  
□

葦原あしはら比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
□

□  
いや貴たかき御樋みひ代神しろがみを送おくりゆく

燒野やけのヶ原がはらの風かぜはさみしも

悲かなしさとさみしさ一度いちどに迫せまり來きぬ

公きみの御行みゆきを駒こまに送おくりて

天地あめつちの開ひらけし思おもひは忽たちまちに

大地だいちの沈しづみし心地ここちとなりぬ

雄心の<sup>を</sup>大和心を<sup>を</sup>ふりおこし

吾は<sup>われ</sup>仕へむ御樋代神と

葦原の<sup>あしはら</sup>國土<sup>くに</sup>稚<sup>わか</sup>けれど言靈の<sup>ことたま</sup>

水火の<sup>い</sup>光<sup>ひかり</sup>に造り固めむ

急げ<sup>いそ</sup>ども道遠<sup>みちとほ</sup>ければ今宵こそ

忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>に露宿<sup>つゆやど</sup>りせむ

神々<sup>かみがみ</sup>は御歌詠<sup>みうたよ</sup>みつつ一行<sup>いっかう</sup>五柱<sup>いつはしら</sup>の神<sup>かみ</sup>を忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>の麓<sup>ふもと</sup>まで送<sup>おく</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふ。折<sup>をり</sup>しも春<sup>はる</sup>の日<sup>ひ</sup>  
は黄昏<sup>たそが</sup>れければ、ここ<sup>こゝ</sup>に一夜<sup>いちや</sup>の宿<sup>やど</sup>をとらせ給<sup>たま</sup>ひ、忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>の月<sup>つき</sup>を賞<sup>ほ</sup>めつつ、一夜<sup>いちや</sup>を  
起<sup>お</sup>きつ眠<sup>ねむ</sup>りつ明<sup>あか</sup>し給<sup>たま</sup>ひける。

（昭和八・一二・二二 舊一・六 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録）

第一六章 天降地上（一九七二）

葦原比女の神の一行は、朝香比女の神の一行を送りまゐらせつつ、忍ヶ丘の山麓に春の永日は黄昏れければ、ここに一夜の露の宿りを定めまし、常磐樹生へる丘の上に各自登らせ給ひ、葦葦をもて國津神の編み作りたる清疊を、いやさやさやに敷き竝べ、御空の月のさやけさに溶け入りながら、各自に生言靈を宣り、或は御歌を詠ませつつ暁の至るを待たせ給ひける。

天の一方を眺むれば、一塊の雲片もなき紺青の空に、上弦の月は下界を照し給ひ、月舟の右下方に金星附着して燦爛と輝き渡り、月舟の右上方三寸ばかりの處に土星の光薄く光れるを打ち眺めつつ、三千年に一度來る天の奇現象にして稀有の事なりと、神々は各自御空を仰ぎ、葦原の國土の改革すべき時の到れるを感知し給ひつつ、御歌詠ませ給ふ。

葦原比女の神の御歌。

☐ 澄みきらふ御空の海を照らしつつ

月の御舟は靜かに懸れり

よく見れば月の眞下にきらきらと

光の強き金星懸れり

月舟の右りの上方に光薄く

輝く土星の光のさみしも

天界にかかる異變のあるといふは

葦原の動くしなるべし

光り薄き土星は天津神にして

金星即ち國津神なり

上に立つ土星の光は光り薄し

月の光に遮られにつつ

下に照る金星の光はいと強し

月の御舟の光支へて

葦原の國土に天降りし天津神の

心をただす時は近めり

朝香比女神の神言よ月と星の  
今宵の状を言解き給はれ

朝香比女の神は御歌もて詠ませ給ふ。

天津神の言靈濁り水火濁り

光の褪せし土星なりけり

國津神の中より光り現はれて

世を守るてふ金星の光よ

月舟の清き光は葦原比女の

神の御魂の光りなるぞや

此處にます天津神等心せよ

朝な夕なに神を齋きて

天津神は神を認めず國津神は

眞言まことの神かみを齋いつきまつれる

千早ちはやぶ振ぶる神かみは光ひかりに在おはしませば

神かみにかなへる魂たまはかがよふ

神かみを背せにし信仰あななひの道みち缺かくならば

神魂みたまの光ひかり次つぎ次つぎに失うせむ  
☐

葦原あしはら比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。  
☐

☐  
有ありがた難ひかりし光かみの神かみの神宣みことりを

宜うへよとわれは額うなづかれける

二十はたとせ年まがつを曲津かみの神かみに艱なやみしも

神かみに離はなれし報むくいなりける

主スの宮居みやに仕つかふる天津神あまつかみたち等は

心こころを清きよめ魂たまを磨みがけよ

主スの神かみは天津御空あまつみそらに奇くしなる

兆しるしを見みせて警いましめ給たまふも〆

眞まさ以もち比ひ古この神かみは驚おどろきて御歌詠みうたよませ給たまふ。

知しらず識しらず心傲こころおごりて主スの神かみに

仕つかふる道みちを怠をこたりにけり

朝香比女神あさかひめかみの神言みことの御教みをしへに

わが魂線たましひは戦をのきにけり

國津神くにつかみの艱なやみを思おもひて朝夕あさゆふに

主スの大神おほかみに祈いのりまつらむ

葦原比女神あしはらひめかみの御魂みたまは御空みそら行く

月つきの光ひかりと輝かがやき給たまへる

かくの如輝ごとかがやき給たまふ葦原比女あしはらひめの



神かみとは知しらず過すぎにけらしな  
光ひかり薄うすき土ど星せいの魂たまを持もちながら

月つきの光ひかりの上うへにのぼりつ

貴き身み小を身みの道みちを亂みだしし報むくいかも

今いままで曲ま津がの猛たけびたりしは

葦あし原はらの國くに土にの守まもりの吾われにして

御み樋ひ代しろ司つかさをうとみけるかも

御み樋ひ代しろ神がみよ許ゆるさせ給たまへ今け日ふよりは

眞ま言ことをもちて仕つかへまつらむ

御み樋ひ代しろ神がみは御み歌うたもて答こたへ給たまふ。

☐ 汝なれこそは眞ま言ことをもちて大おほ前まへに

仕つかへまつらむ御み名ななりにけり

曲津見まがつみに清きよき御魂みたまを曇くもらされ

土星どせいの如ごとく薄うすらぎて居をり

とにかかくに土星どせいの光ひかり出いづるまで

地つちに降くだりて世よに盡つくせかし

金星きんせいは國津神等くにつかみらの仰あふぎつる

野槌ぬづちの彦ひこの御魂みたまなりける

今日けふよりは野槌彦ぬづちひこをば天津神あまつかみの

列つらに加くはへて司つかさと爲なさむ

眞まさ以もち比ひ古こ其他そのたの神々かみがみこと悉ことく

地つちに降くだりて魂たまを清きよめよ

野槌彦ぬづちひこは今日けふより其その名なを改あらためて

野槌ぬづちの神かみと仕つかへまつれよ』

野槌彦ぬづちひこは答こたふ。

□ 國津神賤しき吾は如何にして  
國土の宮居に仕へ得べきや  
如何に吾金星の光保つとも  
一柱もて仕へむ術なし□

葦原比女の神はこれに答へて、  
御歌詠ませ給ふ。

□ 天津神の野槌の神よわが宣れる

言靈謹み國土に仕へよ

國津神の清き正しき魂選りて

天津神業を言依さすべし

葦原の國土のことごとまぎ求め

清き御魂を選びて用ひむ□

朝香比女の神は、葦原比女の神の大英斷に感じて御歌詠ませ給ふ。

葦原比女神の神言の雄々しさよ

天と地とを立替へ給ひぬ

光なくば黒雲包む葦原は

黑白も分かぬ闇の世なるよ

常世ゆく萬の災群起きるも

曇れる神のたてばなりけり

御樋代神の上に輝く神々の

土星の御魂を浄めさせ給へ

今すぐに金星の如光らねど

倦まずば遂に御楯とならむ

久方の空に奇瑞の現はれしは

我國土生かさむ御神慮なりける

成山比古の神は驚きて御歌詠ませ給ふ。

㊦ 櫻ヶ丘の宮居に二十年仕へ來て

わが魂線は世を濁らせる

今となりうら恥づかしく思ふかな

御空に魂の性現はれつ

御樋代の神の言葉を畏みて

吾今日よりは地に降らむ

國津神の列に加はり齋鋤を

持ちて田畑を耕し生きむ

葦原の國土に涌き立ちし黒雲も

吾等が爲めと思へば恐ろし

天地の神の御惠深くして

わが過を許させ給ひぬ

靈生比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 吾も亦土星の魂となり果てて

この國原を亂しけるかも

これよりは土星の性にふさはしき

地に降りて田畑を拓かむ

地の性持てる賤しき魂線の

如何で御空に光るべしやは

今迄は眞言の天津神なりと

心傲りつつ年を経にけり

わが魂の曇りは土星と現はれて

忍ヶ丘の地に墜ちける

御樋代の神の言葉は主の神の

御水火なりせば背かむ由なし

國津神くにつかみの照てれる御魂みたまを引ひき上あげて

豐葦原とよあしはらの國土くにまも守まもりませ

御供おんともに仕つかへまつるも畏かしこしと

思おもへばわが身み戦まき止やまらずも

久方ひさかたの天津空あまつそらより荒金あらがねの

地つちに降くだりし今宵こよひの吾われかも

知しらず識しらず御魂みたま曇くもりて天津神あまつかみの

位置くらは地上ちじやうにうつらひにけり  
』

榮春比女さかはるひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 榮春比女神さかはるひめかみと仕つかへて朝夕あさゆふに

御樋代神みひしろがみの御魂みたま汚けがせし

主スの神かみの尊たふとき御前みまへを知しらず識しらず

禮みやなく仕つかへしわが罪つみ恐おそろし

鷹たかしやま巢やま山に雲くもわき立たちて葦あしはら原の

この稚わか國くに土は風かぜ荒すさびたり

野ぬづちひこ槌かみ比かみ古かみ神の清すがしき魂たましひ線は

御みひしろがみ槌しろがみ代がみ神の司つかさとなりませり

今けふ日よりは野ぬづち槌の神かみの御みひかり光の

隈くまなく照てらむ葦あしはら原の國くに土に

曇くもり果はて亂みだれ果はてたる國くに原を

救すくふは野ぬづち槌の神かみの功いさをよ〆

八や榮さか比かひ女めの神かみは御みうたよ歌よ詠ませ給たまふ。

東ひむがしの國くに土の果はてなる櫻さくらがヶ丘をかに  
仕つかへし吾われの終をはりは來きにけり



おほけなくも女神の身ながら宮居の邊に

仕へまつりし事を悔ゆるも

今となりて何を歎かむ村肝の

心の曇りの報いなりせば

朝夕に神の供前に太祝詞

吾怠りつ今に及べり

主の神の御水火になりし葦原比女の

神さげしみし罪を恐るる

吾なくば葦原の國土は治まらじと

思ひけるかな愚心に

愛善の神は今までわが罪を

許させ給ひし事のかしこさ

畏しと宣る言の葉も口籠り

わが胸の火は燃え盛るなり

今宵限り天津神なる位置を捨てて

野に降りつつ田畑を拓かむ

朝香比女の神は又もや御歌詠ませ給ふ。

天の時地の時到りて葦原の

國土の光は現はれにけり

葦原の國土の標章と今日よりは

の玉の旗を翻しませ

の玉を竝べ足らはし十と爲し

眞言の國土の標章と定めよ

葦原比女の神は御歌詠ませ給ふ。

有難し國土の始めの旗標まで

賜ひし公の功は貴し

萬世に吾は傳へてこの旗を

國土の生命と祀らせまつらむ

天津神の野槌の神は國の柱

定めて吾に奉れかし

野槌比古の神は御歌詠ませ給ふ。

有難し葦原比女の神宣

吾選ぶべし四柱の神を

天津神の列に加はる神柱は

高照清晴彦を選ばむ

葦原比女の神は御歌詠ませ給ふ。

高彦を高比古の神照彦を

照比古の神と名を改めよ

清彦は清比古の神晴彦は

晴比古の神と名乗り仕へよ

野槌比古の神は感謝しながら御歌詠ませ給ふ。

有難し天津神の位置に選まれし

吾等五柱は身をもて仕へむ

今宵すぐに駿馬使を馳せにつつ

四柱神を招き仕へむ

葦原比女の神は御歌詠ませ給ふ。

一時も早く此の場に招き寄せて  
この葦原の神柱たてよ

かくして、四柱の神は小夜更くる頃、駿馬に鞭うたせつつ、此處に集り來り、  
葦原比女の神の宣示のもとに、かしこまり天津神の列に加はり給ひぬ。

夜は森々と更け渡り、曉近く百鳥の聲は爽かに響き、春野を渡る風は、かむば  
しき梅ヶ香を送り田鶴は九臯に瑞祥をうたひ、鵲は常磐の松の梢に黎明を告げて  
壽ぐが如し。

ああ惟神恩頼ぞ畏けれ。

(昭和八・一二・二二 舊一一・六 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

第一七章 天任地命（一九七三）

茲こゝに葦原あしはらの國くに土にの守まもり神がみと生うまれませる葦原比女あしはらひめの神かみは、天體てんたいに現あらはれし月星げつせいの奇現象きげんしやうに三千年さんぜんねんの天地てんちの時とき到いたれることを、鋭敏えいびんなる頭腦づなうより證覺しょうかくし給たまひ、大勇猛だいゆうまう心を發揮はつきして、天津神等あまつかみたちを一柱ひとはしらも殘のこさず地ちに降くだし、また地ちに潛ひそみたる神魂みたまの清きよき國津神くにつかみを拔擢ばつてきして、天津神あまつかみの位置くらにつらね、國土くにの政治まつりごと一切いっさいを統括とつくわつせしめ給たまふ。大英斷えいだんに、朝香比女あさかひめの神かみは感激かんげきし給たまひ、諸神しよしんに向むかつて宣示せんじてき的御歌みうたを詠よませ給たまふ。その御歌みうた、

天地あめつちの開ひらけし時ときゆためしなき

今日けふの動うごきの大おほいなるかも

天地あめつちも一いち度どに動うごく心地こちかな

國土くにの司つかさの昇のぼり降くだりは

荒金あらがねの地つちを拓ひらきて御日光みひかげは

天津御空あまつみそらに昇のぼりましける

天渡あまわたる星ほしは御空みそらの高たかきより

降くだりて地つちにひそむ夜半よはなり

葦原比女神あしはらひめかみの神言みことの英斷えいだんを

主スの大神おほかみも嘉よみしますらむ

二十年はたとせの曇くもり汚けがれも今日けふよりは

隈くまなく晴はれて月日つきひは照てらむ

神々かみがみの水い火きの曇くもりの強つよければ

天津御空あまつみそらに黒雲くろくも立たつも

新あたらしき國くに土にの生うまれし今日けふよりは

葦原あしはらの國くに土にはゆたに榮さかえむ〇

葦原比女あしはらひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ〇

御光の神の現れます忍ヶ丘に

國土の司を定めけるかな

國津神を天津神とし天津神を

國津神とし稚國土生まむ

國津神を言向け和すと此丘に

神を祈りて千代を祝はむ

かく宣り終へ給ひて、國津神もろもろに命じ、忍ヶ丘の聖所に主の大神の齋壇  
を造らせ、祝詞の聲も恭しく、天津神、國津神、十柱神の神任式の祭典を盛大に  
行はせ給ひける。

野槌比古の神は葦原比女の神の御前に、恐る畏る進み出で、歌もて答へ給ふ。

葦原の國土の守りと天降ります

御樋代神の御前畏し



卑いやしかる吾われ國津神くにつかみ選えらまれて

今日けふより仕つかへむ御側みそば近くを

天あめも地つちも醜しこの黒雲くろくもふさがりし

この國原くにはらは明あけ放はなれたり

眞心まごころの限かぎりをつくし主すの神かみを

朝夕あさゆふ齋いつきて公きみに仕つかへむ

荒金あらがねの地つちをはひ出いで久方ひさかたの

御空みそらに昇のぼるわれ畏かしこしも

卑いやしけれど御言みことば葉はなりせば慎つつしみて

仕つかへ奉まつらむ國土くにの柱はしらと

四柱よはしらの國津神くにつかみたちもろともに

御前みまへを近ちかく清きよめて仕つかへむ

高比古たかひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

御樋代の神の依さしの言靈を

畏み奉り今日より仕へむ

天津神國津神等のなやみをも

眞言の力に拂ひ奉らむ

われは野に久しくありて天津神の

日々に務むる神業に疎し

われはただ眞心もちて朝夕に

百の神たちの爲につくさむ

葦原の國土は稚しもはしばしは

まだ曲津見の雄猛び強し

今日よりは清けき明き心もて

公と國土とに神魂捧げむ

照比古の神は御歌詠ませ給ふ。

思おもひひききやや天津御神あまつみかみの位置つらに入りいて

公きみに親したしく仕つかへ奉まつるとは

駿馬はやこまの使つかひにわれは驚おどろきて

急いそぎ御前みまへにかしこみ來きたるも

主スの神かみの生うませ給たまひし葦原あしはらの

國くに土にを生いかして永と久はに守まもらむ

御樋みひしろ代神がみの例ためしもあらぬ英斷えいだんに

吾われは畏かしこみ馳はせまゐりけり

天津神あまつかみの務つとむるわざは知しらねども

神任よさしのままに仕つかへ奉まつらむ

朝夕あさゆふに禊みそぎの神事わさぎを修をさめつつ

此この稚わか國かく土にの爲ために盡つくさむ

月つきも日ひも神庭みにはに清きよく照てる比古ひこの

神かみは功いさをを永とこ久しへに立たてむ

これの世を忍ヶ丘に年さびて

世を歎きましし野槌の神はや

吾もまた忍ヶ丘に往來して

野槌の神の教うけをり

曇りはて亂れはてたる國原を

治めむとして道を求ぎける

野槌比古神の教は天地の

神の眞言の教なりけり

國津神の水火安かれと朝夕に

神を祈りし野槌の神なり

野槌比古神の教に従ひて

永き年月を神齋きけり

今日となりて野槌の神の畏さを

悟りけらしな愚なる身も

畏<sup>かしこ</sup>けれど御<sup>み</sup>樋<sup>しろ</sup>代<sup>が</sup>神<sup>み</sup>の御<sup>おん</sup>前<sup>まへ</sup>に  
仕<sup>つか</sup>へて神<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>を安<sup>やす</sup>く生<sup>い</sup>かさむ  
□

清<sup>きよ</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

□ 御<sup>み</sup>樋<sup>しろ</sup>代<sup>が</sup>の神<sup>かみ</sup>の眞<sup>ま</sup>言<sup>こと</sup>に召<sup>め</sup>されつつ

忍<sup>しの</sup>ヶ丘<sup>がをか</sup>にわが來<sup>き</sup>つるかも

吾<sup>われ</sup>もまた野<sup>ぬ</sup>槌<sup>づち</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>教<sup>をしへ</sup>を

朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに守<sup>まも</sup>りてしはや

久<sup>ひさ</sup>方<sup>かた</sup>の御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>曇<sup>くも</sup>らひ水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>汚<sup>けが</sup>れ

苦<sup>くる</sup>しき神<sup>かみ</sup>世<sup>よ</sup>となり<sup>に</sup>けらしな

天<sup>てん</sup>の時<sup>とき</sup>漸<sup>やうや</sup>く來<sup>きた</sup>りて御<sup>み</sup>光<sup>かり</sup>の

神<sup>かみ</sup>の力<sup>ちから</sup>に神<sup>かみ</sup>世<sup>よ</sup>晴<sup>は</sup>れにける

葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>なやめてし

國津神等の罪を許せよ

國津神の穢き水火の固まりて

天津御神に及びけるかも

荒金の地の司と降りましし

天津神等をいとしく思ふも

吾もまた望む位置にはあらねども

公の言葉に背く由なし

貴身と小身の道を正して天地の

神の御心なごめ奉らむ

今日よりは野槌の神に従ひて

此稚國土の爲に盡さむ

たまきはる命のはつる夕べまで

吾は盡さむ神國の爲に

貴身と小身田身の眞道明らか

明あかして御前みまへに眞心まごころ盡つくさむ〆

晴はる比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

〆  
かかかる日ひのありとは豫かねて知しりながら

今日けふのよき日ひに驚おどろきけるかも

愛善あいぜんの紫微しびてん天界かいに生いき生いきて

すべてのものを助たすけ守まもらむ

鳥獸とりけもの魚うを蟲むし螻蛄けらにいたるまで

神かみの恵めぐみに浸したし守まもらむ

新あたしき國土くにの司つかさと任まけられて

吾魂わがたましひ線をのの戦やき止やまずも

主スの神かみの水い火きの力ちからを身みに浴あびて

葦原あしはらの國土くにに力ちからを盡つくさむ

御樋代神の御稜威畏み葦原の

國土の隈々拓き進まむ

足引の鷹巢の山の雲をぬく

高き功を立てむと思ふ

曲津見はかげを潛めむ忍ヶ丘の

今日の喜び耳にしつれば

御光の神は現れまし葦原比女の

神は光らす目出度き神世かな

年長く國土のなやみを歎ちてし

わがおもひねは晴れ渡りける

主の神の生ませ給ひし貴の島を

汚す曲津見を憎みつ年經つ

久方の天の時こそ迫り來て

吾世に出でし今宵ぞ嬉しき



ちから  
力なく光なけれど吾はただ

ぬづち  
野槌の神に添ひて仕へむ

ス  
主の神の御水火に現れます御樋代神を

わがきみ  
吾公として仰ぐ今日かも

あしはら  
葦原の國土の守りの司神と

ひか  
光らせ給へ萬世までも

まへ  
前にかく各自神任式の挨拶や抱負を、御歌もて國土の大神柱なる葦原比女の神の御  
ことあ  
前に、言擧げし、英氣をその面に充し給ひけるぞ畏けれ。

しよ  
所を定め給はむとして、宣示的御歌を詠ませ給ふ。  
ここ  
茲に御樋代の神は、天津神の神任式を目出度く終らせ給ひ、ついで國津神の任

まさまちひこかみ  
眞以比古神の神言は西の國土の

つかみ  
司となりて神を治めよ

葦原あしはらの西にしの國邊くにへは國津神くにつかみ

數多あまた住すむとふとく出いで立たたせよ  
』

眞まさ以もち比ひ古この神かみは感かん激げきしながら御歌みうたもて答こたへ奉たてまつる。

御樋代神みひしろがみの惠めぐみかしこし謹つつしみて

西國にしくに土拓にひらくと勇いさみ進すすまむ

今日けふよりは西にしの國土くになる國津神くにつかみの

司つかさとなりて貴身きみに仕つかへむ  
』

葦原あしはら比女らひめの神かみは成山比古なりやまひこの神かみに向むかひ、  
宣示せんじて的き御歌みうた詠よませ給たまふ。

成山比古神なりやまひこがみは南みなみの國原くにはらに

進すすみて國土くにの長をさと仕つかへよ

南みなみの國くに土にに住すまへる國津神くにつかみを  
朝あさな夕ゆふなに勞いたはり守まもれ〇

成山なりやま比古ひこの神かみは畏おそる畏おそる御歌詠みうたよませ給たまふ。

汚けがれたる神魂みたまの吾われも捨すてまさぬ

貴身きみの言葉ことばに涙なみだしにけり

力ちからなき吾われなりながら御心みこころに

背そむかじものと朝夕あさゆふ仕つかへむ〇

葦原あしはら比女ひめの神かみは靈生比古たまなりひこの神かみに向むかひ、  
宣示せんじて的てき御歌詠みうたよませ給たまふ。

靈生比古たまなりひこ神かみは東ひがしの國原くにはらに

司つかさとなりて進すすみ行ゆきませ

鷹巢山の東に當る國土なれば

曲津の猛びを心して行け

靈生比古の神は感謝しながら御歌奉る。

許々多久の罪も汚れも許しまし

東の國主に任せ給ひけるはや

國主てふ尊きわざを任せられて

忝なさに袖しぼるなり

葦原比女の神は榮春比女の神に向ひて、

宣示的御歌を與へ給ふ。

榮春比女神はこれより北の國土の

司となりて永久に榮えよ

北きたの國くに土にはまだ稚わかければ國くに津つ神かみも

數あまた多す住すまなく曲まが津つ見み多おほし

曲まが津つ見みに心こころして行ゆけ榮さか春はる比ひ女めよ

汝なれが功いさをを吾われ守まもるべし

榮さか春はる比ひ女めの神かみは嗚をえ咽つて涕いき泣ふしながら神しん恩おんを忝かたじけなみ、御み歌うたを奉たてまつる。

吾われもまた穢きたなき弱よわき神かみなるを

惠めぐみの貴き身みは捨すて給たまはぬを

よしやよし魂たまの命いのちは失うするとも

貴き身みの惠めぐみに報むくはで置おくべき

北きたの國くに土にを春はるの彌やよ生ひの花はなの如ごと

うまま怜らに委つ曲ばらに拓ひらき奉まつらむ

いざさらば北きたの神かみ國くにに進すすむべし

まめやかにませよ御樋代の神<sup>かみ</sup>」

葦原比女の神<sup>かみ</sup>は八榮比女の神<sup>かみ</sup>に向<sup>むか</sup>ひて、御歌<sup>みうた</sup>を與<sup>あた</sup>へ給<sup>たま</sup>ふ。

八榮比女<sup>やさかひめ</sup>は野槌<sup>ぬづち</sup>の神<sup>かみ</sup>の後<sup>あと</sup>をつぎ

忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>の國津神<sup>くにつかみ</sup>守<sup>まも</sup>らへ

葦原<sup>あしはら</sup>の國土<sup>くに</sup>の眞秀良場<sup>まほらば</sup>よ忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>は

光<sup>ひかり</sup>の神<sup>かみ</sup>の天降<sup>あも</sup>らしし丘<sup>をか</sup>よ<sup>を</sup>」

八榮比女<sup>やさかひめ</sup>の神<sup>かみ</sup>は嬉<sup>うれ</sup>しさに堪<sup>た</sup>へず、歌<sup>うた</sup>もて答<sup>こた</sup>へ奉<sup>たてまつ</sup>る。

吾貴身<sup>わがきみ</sup>の厚<sup>あつ</sup>き心<sup>こころ</sup>に包<sup>つつ</sup>まれて

忍ヶ丘<sup>しのぶがをか</sup>の涙<sup>なみだ</sup>忍<sup>しの</sup>びぬ

御光<sup>みひかり</sup>の神<sup>かみ</sup>の天降<sup>あも</sup>りし此<sup>この</sup>聖所<sup>すがど</sup>の

司つかさとなりし吾わが幸さち思おもふ  
今日けふよりは心こころの限かぎり身みの限かぎり  
貴身きみの依よさしに報むくい奉まつらむ<sup>㊦</sup>

茲ここに朝あさ香か比ひ女めの神かみ一いつ行かうの神かみ々がみの立たち會あいのもとに、葦原比女あしはらひめの神かみの英斷えいだん的てき神しん任にん式しきは無事ぶじ終了しゅうれうをつげ、天津神あまつかみは國津神くにつかみとなり、國津神くにつかみは天津神あまつかみと任まけられて、いよいよ葦原あしはらの國土くにの新生命しんせいめいは輝かがき初そめにけるぞ畏かしこけれ。

（昭和八・一二・二二 舊一・六 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）

## 第一八章 神嘉言（一九七四）

妖邪えうじゃの氣鬱積きうつせきして黒雲こくうん天地てんちを塞ふさぎ、殆ほとんど亡國ばうこくに瀕ひんしたるグロスの島しまは、天てんの時ときに到いたりて、高地たかちほ秀ほの宮居みやより天降あもりませる八柱やはしら御樋みひ代神しろがみの一柱ひとしらなる朝香比女あさかひめの神かみの

御降臨によりて、天地清まり、國內一點の風塵も止めざるに至りたれば、茲にグ  
ロスの島國を葦原新國と改稱し、國津神を拔擢して葦原比女の神の國津柱の御側  
近く神業を司らしめ給ふ事とはなりぬ。茲に新しく蘇りたる葦原の國土はグロノ  
ス、ゴロスの曲津神、生言靈の御光と眞火の功に逃げ失せければ、國土の中心な  
る忍ヶ丘に宮居を移し給ひ、八尋殿を急ぎ見建て給ひて、國津神の上に臨ませ給  
ふ事とはなりぬ。十曜の神旗は春風に翩翻として翻り、日月の光は殊更に美はし  
く天に輝き地に照らひ、四方八方より國津神を初めとし禽獸蟲魚の生きとし生け  
るものの限り、忍ヶ丘の聖場に集まり來りて、新しき國土の成立を壽ぎ祝ひ奉る  
事とはなりぬ。

茲に葦原比女の神は新に言依さし給へる天津神等を率ゐて、忍ヶ丘に宮柱太し  
き立て主の大神を齋き祭り給ひ、大御前に潔齋して國の初めの神嘉言を奏し給ひ  
ける。其神嘉言に言ふ。

掛巻も綾に畏き忍ヶ丘の下津岩根に大宮柱太しき立て、高天原に千木高知りて、



國の鎮めと鎮まりたまふ主の大神の大御前に、葦原の國の國津柱と仕へまつる葦原比女の神、謹み敬ひ畏み畏みも白す、抑々これの神國は、未だ地稚く、國形定まらず、曲津見の醜の惡しき水火は天地に塞がり、雲霧深く、天日の光は地に届かず、總ての木草を初め、五穀等豊に稔らず、國津神等の生の命を危からしめ、これの稚國土は二葉にして枯果てむとしけるが故に、如何にもして神の依さしの美國を造り固めばやと、朝な夕なに心を碎き血潮をしぼり天を仰ぎ地に俯して歎かひける折もあれ、高地秀山の貴の聖所に宮柱清しく立てて仕へませる朝香の比女神の端なくもこの稚國土に天降りまし、生言靈の御光と眞火の功に曲津見の醜の棲處を焼き盡しまし、今は全く風塵治まりて、曲津見の影も朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂ふ如く散らせ失ひ給ひければ、國土の東に偏在れる櫻ヶ丘の宮居を國土の眞秀良場なるこれの聖所に移し、主の大神の神靈を永久に齋きまつりて、國の御旗を定め政所を移して國土生み、神生みの神業に心清しく眞言の水を凝らして仕へまつらむと思ふが故に、朝香比女の神の天降り給ひしを機會に、今日の佳辰の吉時に新しき國土の生れの御祭りを取行ひ、天津神八百萬の神等の

神靈を招ぎ奉りて、この國の山野に生ふる種々の美味物を百足の机代に置き足はして供へまつる有様を、平らけく安らけく聞召し相諾ひたまひて、これの新國土を千代に八千代に動くことなく變る事なく、五十櫃八桑枝のごとく茂榮に榮えしめ給ひ夜の守り日の守りに守り幸へ給へと、恐こみ恐こみも祈願奉らくと白す。

天晴れ天晴れ豊葦原と榮えます

神の御國は生れけるはや

主の神の大宮柱太知りて

仕へまつらむ今日ぞ目出度き

群雲の天地を塞ぎし島ヶ根も

隈なく晴れて月日はかがよふ

二十年の長き月日を包みてし

醜の黒雲晴れ渡りけり

光ある國津神等を選びあげて

國くにの守まもりの神かみと依よさしぬ

主スの神かみの惠めぐみは永と久はに葦原あしはらの

新あたらしき國くに土にを光てらさせたまへ

天津神あまつかみ國津神くにつかみ等は各おのも各おのも

任まけのまにまにならばせたまへ

久方ひさかたの天あまの岩戸いはとは開ひらけたり

常世とこよの闇やみも明あけ渡わたりつつ

櫻さくらヶ丘らがをの宮居みやをこの地ちに新あたらしく

移うつして治をさめむこの新國土にひくにを

葦原あしはらの國土くにの中央なかがこの忍しのぶヶ丘がをは

大政所おほまんどころにふさはしきかな

忍しのぶヶ丘がをを常磐ときはがヶ丘がをと改あらためて

神世かみよのまつり開ひらかむと思おもふ

萬世よろづよに神かみの賜たまひし燧石ひうちいしを

傳へて日繼の印と定めむ

もろもろの國津神等も生物も

今日のよき日を蘇るかな

歡びの聲は天地に響かひて

動ぐがごとし葦原の國土は

萬世も動がぬ國土の礎を

立てし功に天地は動げり

歡びの聲に天地は動ぎつつ

動がぬ國土の基礎固まりぬ

朝香比女神の神言の功績に

葦原國土は稚く生れし

朝香比女の神は壽ぎの御歌詠ませ給ふ。

葦原あしはらの國土くにの礎いしず固かたまりて

御空みそらの月日つきひも冴さえ渡わたりける

天あめ清きよく地つち又また淨きよく生うまれたる

この新國土にひくには永と久はに榮さかえよ

遙々はろはろと荒野あらのを涉わたり海うみ越こえて

國土くにの固かための吉日よきひにあふかな

過あやまちを直日なほひに見直みなほし聞きき直なほし

罪つみなる神かみも許ゆるしたまひぬ

天津神あまつかみもゆるされここに國津神くにつかみと

なりて永とこ久しへに蘇よみがへりませり

國津神くにつかみの清きよき神魂みたまを選えり拔ぬきて

依よさしたまへる神かみの畏かしこさ

新あたらしき國土くにの生うまれをことほぎて

生言靈いくことたまを奉たてまつりける」

かく歌はせ給ふ折しも天津御空より十曜の神旗を振翳し、  
數多の從神をしたがへて紫の雲に乗り此場に天降り給ひしは、  
主の大神の御使ひ神なる鋭敏鳴出の神の雄姿に在しましける。

朝香比女の神はこの光景に驚きたまひ、  
合掌敬拜しつつ御歌詠ませ給ふ。

掛巻くも畏き鋭敏鳴出の神は

今日の吉日に天降りましける

鋭敏鳴出の神の功に草枕

吾行く旅は安けかりけり

曲津見の伊猛り狂ひしこの島も

公の功に清まりにける

曲津見の伊猛る國を進みゆく

吾道の邊を守らせたまへ

鋭敏鳴出の神の助けのなかりせば

吾<sup>わが</sup>旅<sup>たび</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>びだ</sup>に<sup>ひかり</sup>光<sup>ひかり</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>」

銳<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>は<sup>おほ</sup>大<sup>おほ</sup>宮<sup>みや</sup>の<sup>まへ</sup>前<sup>まへ</sup>に<sup>くだ</sup>降<sup>くだ</sup>ら<sup>せ</sup>給<sup>たま</sup>ひ<sup>ひ</sup>、<sup>うや</sup>恭<sup>うや</sup>しく<sup>はく</sup>拍<sup>はく</sup>手<sup>し</sup>し<sup>ゆ</sup>な<sup>が</sup>ら、

㊦ 掛<sup>かけ</sup>卷<sup>ま</sup>く<sup>も</sup>こ<sup>れ</sup>の<sup>に</sup>新<sup>に</sup>宮<sup>みや</sup>に<sup>お</sup>は<sup>し</sup>ま<sup>す</sup>

主<sup>す</sup>の<sup>おほ</sup>大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>に<sup>の</sup>り<sup>ごと</sup>と<sup>まを</sup>申<sup>まを</sup>さ<sup>む</sup>

久<sup>ひさ</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>く</sup>雲<sup>くも</sup>路<sup>ぢ</sup>を<sup>わ</sup>け<sup>て</sup>神<sup>み</sup>宣<sup>こと</sup>

畏<sup>かしこ</sup>み<sup>われ</sup>吾<sup>われ</sup>は<sup>こ</sup>こ<sup>に</sup>來<sup>き</sup>つ<sup>る</sup>も

願<sup>ねが</sup>は<sup>く</sup>は<sup>ち</sup>千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>に<sup>や</sup>八<sup>ち</sup>千<sup>よ</sup>代<sup>よ</sup>に<sup>あ</sup>葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>の

國<sup>く</sup>土<sup>に</sup>を<sup>まも</sup>守<sup>も</sup>り<sup>て</sup>榮<sup>さか</sup>え<sup>ら</sup>せ<sup>よ</sup>

朝<sup>あ</sup>香<sup>さ</sup>比<sup>か</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>い</sup>出<sup>いで</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>まも</sup>守<sup>も</sup>ら<sup>ひ</sup>つ

目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>く<sup>け</sup>今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>を<sup>あ</sup>現<sup>あら</sup>は<sup>れ</sup>に<sup>け</sup>る

葦<sup>あし</sup>原<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>み</sup>神<sup>こと</sup>言<sup>こと</sup>に<sup>あ</sup>新<sup>あたら</sup>し<sup>き</sup>

國<sup>く</sup>土<sup>に</sup>の<sup>う</sup>生<sup>ま</sup>れ<sup>を</sup>こ<sup>と</sup>ほ<sup>ぎ</sup>ま<sup>つ</sup>る<sup>も</sup>

地つち稚わかく國くに土わが稚わかけれど鋭う敏なり鳴り出づの

神かみは非とき時じく守まもりまつらむ

心こころ安やすくこの稚わか國くに土にを開ひらきませ

吾われは力ちからを添そへて守まもらむ

葦あし原はら比ひ女めの神かみは驚き喜やうしながら御み歌うた詠よませ給たまふ。

思おもひきやこの新に國ひくに土にに鋭う敏なり鳴り出づの

尊たふとき神かみの天あ降もりますとは

力ちからなき吾われにありせば晝ひる夜よるを

守まもらせたまへ鋭う敏なり鳴り出づの神かみ

天あめ地つちの雲くも霧きり晴はれて新あたらしく

神かみの御み稜い威づに國くに土には生うま

朝あ香さ比か女ひめ鋭う敏なり鳴り出づの神かみの二ふた柱はしらを



齋いっきまつりて永久とほに仕つかへむ

二ふたはしら柱しらの神かみよ御魂みたまを永遠とことはに

この新國にひくに土とどに止とどめたまはれ

國くに津つかみ神ももちよろづ百千萬の生いけるもの

今日けふの吉日よきひに蘇よみがへりつつ〇

野槌ぬづち比古ひこの神かみは祝歌ほぎうたをうたひ給たまふ。

掛かけまくも綾あやに尊たふとき神々かみがみの〇

光ひかりに生あれし葦原あしはらの國くに土とよ

葦原あしはらの國くに土と稚わかけれど主すの神かみの

惠めぐみに生いきていよよ榮さかえむ

朝香あさか比女ひめ銳敏うな鳴出なりづの神かみの功績いさをしに

醜しこの黒雲くろくも晴はれ渡わたりける

櫻ヶ丘の宮居をここに移しまして

神國を知らさす今日ぞ目出度き

國津神もるもるここに集まりて

國土の基礎を壽ぎ祝ふ

吾公に選ばれわれは今日の日ゆ

天津御神となりて仕へむ

許々多久の國の罪穢れ吹き拂ひ

仕へまつらむ千代に八千代に

果しなきこの新國土を今日よりは

國津神等と共に開かむ

天地の水火を清めて今日よりは

生國原と神世を開かむ

長年の雲霧ここに晴れ渡り

公に親しく仕へまつるも

高比古の神は祝歌を詠ませ給ふ。

村肝の心を清め身を浄め

つつしみ敬ひ神國に仕へむ

朝夕に生言靈を宣りあげて

國土の榮を吾は祈らむ

惟神禊の神事を怠らず

天地の水火を清め澄まさむ

葦原比女神の畏き神宣に

常磐ヶ丘となりし聖所よ

常磐ヶ丘の常磐の宮居に朝な夕な

生言靈を宣りて仕へむ

天界は愛と善との國故に

生言靈を怠るべけむや

朝香比女の神鋭敏鳴出の神の守ります

葦原比女の神世は安けれ

主の神の御水火に生れし神司

葦原比女の神は光よ

葦原比女の神の光をつつみたる

醜雲晴れし今日の目出度さ

葦原やいや永久に彌長に

榮えましませ神のまにまに

照比古の神は御歌詠ませ給ふ。

三柱の大神等の御功に

葦原の國土今生れたり

グロスの島は跡なく消えて葦原の

國くに土あた新あらしく生うれましける

新あらしき國くに津つ柱はしらの比ひ女め神がみに

つかへて眞ま言ことを捧ささげまつらむ

野やにありて國くに津つ神かみ等をををさめつつ

今日けふの吉よ日きひを待まち佗わびしはや

葦あし原はら比ひ女めの神かみの御おん目めに見み出いだされ

天あま津つ神みくら位つに仕つかへまつるも

國くに津つ神かみの心こころ濁にごりて大おほ空そらに

醜しこの黒くろ雲くも立たち塞ふさぎける

天あま津つ神かみ國くに津つ神かみ等らは隔へだてなく

親したしみあひて國くに土ひら開ひらかばや

天あま津つ神かみと國くに津つ神かみ等らの心こころより

御み空そらに黒くろ雲くも湧わき立たちしかも

天あま津つ神かみと國くに津つ神かみ等らは村むら肝きの

心をてらして國土は榮えむ』

清比古の神は御歌詠ませ給ふ。

新あたらしく生あれましにける新國土にひくにの

千代ちよの榮さかえを壽ことほぎまつる

もろもろの國津神等は勇みたち

國土くにの生うまれをことほぎまつれり

御功みいさをは鷹巢たかしの山やまの頂いただきを

光てらして昇のぼる朝日あさひに等ひとしも

月つきも日ひも清きよく輝かがやく新國土にひくにの

この眞ま秀ほ良場らばに神嘉言かむよこと宣のる

喜よろこびの心こころは凝こりて歌うたとなり

言靈ことたまとなりて鳴なり出いでにけり』

晴比古の神は祝歌をうたひ給ふ。

久方の空に月日も晴比古の

吾は祝はむ新しき國土を

新しく神の御稜威に生れたる

國土の榮は久しかるらむ

天地と共に果なき葦原の

國土の礎定めし今日かも

樛の木のいやつぎつぎに葦原の

國土の國魂知しめすらむ

やがて今顯津男の神天降りまして

國魂神を授けたまはむ

茲に天津神々は葦原の國土の新に蘇りたる祝辭や、  
櫻ヶ丘の宮居を忍ヶ丘の中

心地に移し給ひし大神業を謳歌しながら各自言祝ぎたまひ、新國土の前途を祈らせ給ひける。又新に國津神の司に任命されたる五柱の神及び國津神等の祝ぎ歌は數限りなくあれども、餘り長ければ茲に省略しおく事とせり。

(昭和八・一二・二三 舊一・七 加藤明子謹録)

本章を口述し初むる折しも

皇太子殿下御誕生遊ばさる

との號外來り、我國民の魂を蘇らせ歡喜せしめたるぞ畏けれ。

## 第十九章 春野の御行(一九七五)

茲に鋭敏鳴出の神は建國祭の祭典を終りたるより、再び光となりて數多の從神を伴ひ、紫の雲に乗りて宇宙をウーウーと生言靈も爽かに響かせながら天の



一方いつぱうに御姿みすがたを隠かくし給たまひける。其雄々そのををしき嚴いかしき御有様おんありさまを打仰うちあふぎつつ感激かんげきの餘あまり、  
葦原比女あしはらひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☞ 天晴あはれ天晴あはれ光ひかりとなりて鋭敏うなり鳴出りづの

神かみは御空みそらに歸かへりましける

朝夕あさゆふに葦原あしはらの國土くにを守まもらすと

宣のらせし言靈ことたまふと尊たくもあるか

鋭敏うなり鳴出りづの神かみのいみじき言靈ことたまに

醜しこの曲津まがつは姿かげを隠かくせり

鋭敏うなり鳴出りづの神かみの功いさをと朝香比女あさかひめの

神かみの光ひかりに生あれし國土くにはも

久方ひさかたの空そら行ゆく月つきも光かげ冴さえて

葦原あしはらの國土くにに惠めぐみの露つゆ垂たる

天津日あまつひの光ひかりに森羅萬象もろもろ生おひ育そだち

月つき讀よみの露つゆに生命いのちを養やしなふ

月つきも日ひも星ほしもさやけき葦原あしはらの

國くに土にの御空みそらの高たかくもあるかな

今日けふよりは天津神あまつかみたち等ら國津神くにつかみ

司率つかさひきみて國土くにを固かためむ

銳う敏なり鳴出りづの神かみの御魂みたまと朝香比女あさかひめの

神かみの御魂みたまを宮居みやに齋いつかむ

主スの神かみの御殿みあらかの右みぎに銳敏鳴出うなりづの

生言靈いくことたまを祀まつり仕つかへむ

大殿おほとのの左ひだりの清きよき聖所すがどこに

朝香あさかの比女ひめの御魂みたま齋いつかむ

三柱みはしらの神かみの御魂みたまを永久とこしへに

齋いつきて國土くにの守まもりと崇あがめむ

朝香比女あさかひめの御魂みたまを齋いつく神社かむなびに

國土くにの寶たからの燧石ひうちををさめむ

葦原あしはらの國土くにの礎固いしすゑたまりて

三柱みはしらの神かみの御魂みたま光ひかるも

永年ながとせを吾われ艱なやみたる醜神しこがみも

姿失かげうせにつつ樂たのしき今日けふなり

吾力わがちから及およばざるため醜神しこがみの

醜しこの荒すさびに任せまかけるはや

今日けふよりは三柱みはしら神がみを齋いつかひて

生言靈いくことたまの光照ひかりらさむ

神々かみがみは力ちからを合せあは心こころばせを

一つひとつになして神かみ世よに盡つくせよ

新あたしき常磐ときはヶ丘がをの大宮おほみやに

吾鎮われしづまりて國土くに拓ひらかばや

惟神かむながら神かみの功いさをの貴たかければ

葦原あしはらの國くに土には常世とこよなるべし

彌や久とこ世せ彌や永えいと拓ひらけ行ゆかむ

三柱みはしら神がみの貴うづの守まもりに

大宮おほみやに十曜とえうの神しん旗き翻るがへり

神み世よの榮さかえを照てらし居あるかも

朝香あさか比ひ女めの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

神かみ々がみの功いさをによりて葦原あしはらの

國くに土に生うまれたる今日けふぞ目め出で度たき

銳う敏な鳴り出づの神かみは御空みそらに歸かへりましぬ

いざ吾われ立たたむ國くに土に生うみの旅たびに

葦原あしはらの國くに土にの榮さかえも見みえければ

吾われは是これより公きみに別わかれむ

葦原比女神の神言よ永遠に

恙あらせず榮えさせ給へ

天も地も晴渡りたる今日の日を

旅立つ吾の心は勇むも

別れ行く今日の名残の惜しけれど

國土生みの旅は留まる由なき

今よりは又も曲津の荒ぶなる

萬里の海原浪分け進まむ

葦原比女の神は再び御歌詠ませ給ふ。

願はくは公の出立ちを濱邊まで

送らせ給へ許したまはれ

亡び行く國土を生かせし神故に

一入吾は別れ惜しまる

雄々しく優しく清しくおはします

公に別る今日の悲しさ

茲に朝香比女の神一行の御供として、葦原比女の神は十柱の天津神國津神等を率ゐて、朝香比女の神の御舟を繋ぎし常磐の濱まで御見送り申すべく續かせ給ひける。

初頭比古の神は先頭に立ちて、生言靈を宣り上げ給ひつつ御歌詠ませ給ふ。

萬里の海原渡り來て

グロスの島に上陸し

天地に塞がる惡神の

醜の黒雲吹き拂ひ

沼底深く潛みたる

グロノス、ゴロスを追ひ散らし

茲こゝにグロスの新島にひじまは

月つき日も清きよく輝かがやきて

常世とこよの春はるは生うまれたり

百花ももばな千花ちばなは咲さき匂にほひ

小鳥ことりは歌うたひ蝶てふは舞まひ

櫻さくらヶ丘がの聖所すがどこは

梅桃うめもも櫻さくら一時いちどきに

咲さき匂にほひつつ天國てんごくの

光景くわうけいを忽たちまち現あらはしたり

朝香あさかの比ひめ女神がみ諸もろ共に

櫻さくらヶ丘がに花はなを愛めで

三日みつ三夜かみよを逗留とまりし

忍しのぶヶ丘がに引返ひきかへし

茲こにいよいよ葦原あしはらの  
稚わかき國くに原生はらうまれけり  
此この島しまヶ根がねに永遠とこしへに  
住すませ給たまへる神々かみがみは  
國くに士の生うまれを言祝ことほぎて  
彼かなた方こなた此方こなたゆ寄り集つどひ  
歡呼くわんこの聲こゑは天てんに満みち  
地ち上じやうを流ながれて果はてもなし  
いよいよ國くに形がた定さだまりて  
吾等われらは公きみを守りつ  
再ふたび萬里まの海原うなばらを  
雲霧くもぎり分わけて進すすまむと  
今け日ふの生いく日ひの出立いでちを  
送おくり奉まつると宣のり給たまひ



葦原比女の神司あしはらひめ かむつかさ

諸神等を従へてもみがみたち したが

公の御行を送りますきみ みゆき おく

其眞心は天地にそのまごころ あめつち

響き渡りて天津日はひび わた あまつひ

うららに照らひ晝月のて ひるつき

光は清しく冴えにつつかげ すが さ

大野を渡る春風はおほの わた はるかぜ

眞綿の如く軟かにまわた ごと やはら

百鳥千鳥蟲の音もももどりちどりむし ね

彌新しく冴えにつついやあたらし さ

常世の春をうたふなりとこよ はる

ああ惟神々々かむながらかむながら

今日の御行に光あれけふ みゆき ひかり

今日けふの御行みゆきに幸さちあれよ。

朝香比女神あさかひめかみの御尾前みをさきに仕つかへつつ

葦原あしはらの國くに土つちを別わかれむとすも

珍めづらしき春はるの眺ながめにひたされし

葦原あしはらの國くに土つちはなつかしきかも

御樋代神みひしろがみの優やさしき心こころに包つつまれて

思おもはず知しらず日ひを經ふりにけり

空そら高く地つち亦また廣ひろき新國土にひくにの

山野やまぬに別わかるる惜をしき今日けふなり  
□

起立比古おきたつひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

果<sup>はて</sup>しなき大野<sup>おほの</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>に駒<sup>こま</sup>竝<sup>な</sup>めて

進<sup>すす</sup>むも樂<sup>たの</sup>し常磐<sup>ときは</sup>の濱<sup>はま</sup>邊<sup>へ</sup>に

野<sup>の</sup>の奥<sup>おく</sup>に陽炎<sup>かげろひ</sup>燃<sup>も</sup>えてそよそよと

面<sup>おも</sup>吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かぜ</sup>は春<sup>はる</sup>をひびかふ

梓弓<sup>あづさゆみ</sup>春<sup>はる</sup>の彌生<sup>やよひ</sup>の大野<sup>おほの</sup>原<sup>はら</sup>を

吾<sup>われ</sup>は霞<sup>かすみ</sup>ととも<sup>た</sup>に立<sup>た</sup>つなり

雲<sup>くも</sup>の奥<sup>おく</sup>霞<sup>かすみ</sup>の果<sup>はて</sup>も葦原<sup>あしはら</sup>比女<sup>ひめ</sup>の

神<sup>かみ</sup>の知<sup>し</sup>らさむ食<sup>を</sup>國<sup>くに</sup>天<sup>あ</sup>晴<sup>は</sup>れ  
』

葦原<sup>あしはら</sup>比女<sup>ひめ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌<sup>みうた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

尊<sup>たふと</sup>しや朝香<sup>あさか</sup>比女<sup>ひめ</sup>が神<sup>かみ</sup>の御後<sup>みあと</sup>邊<sup>へ</sup>に

從<sup>したが</sup>ひて行<sup>ゆ</sup>く今日<sup>けふ</sup>の嬉<sup>うれ</sup>しさ

朝香<sup>あさか</sup>比女<sup>ひめ</sup>が神<sup>かみ</sup>の後姿<sup>うしろで</sup>仰<sup>あふ</sup>ぎ見<sup>み</sup>れば

御身おんみくま限かぎなく光ひかりにませるも

御姿みすがたは光ひかりとなりて葦原あしはらの

國くに土にの天地てんちを照てらし給たまひつ

朝香比女神あさかひめかみの光ひかりに比くらぶれば

吾われは小ちひさき螢火ほたるびなるも

螢火ほたるびの吾われに賜たまひし燧石ひうちこそ

吾われに光ひかりを賜たまひたるなり

賜たまひてし燧石ひうちの功いさをに吾魂わがたまは

光ひかり放はなちて國くに土をを治をさめむ

亂みだれたる吾世わがよを清きよく生いかしたる

公きみは惜をしくも歸かへらむとすも

朝香比女神あさかひめかみの惠めぐみを忘わすれじと

神社かむなび建たてて永遠とに齋いつかむ

野槌比古の神は馬上豊かに御歌詠ませ給ふ。

御樋代の葦原比女に仕へつつ

光の公を送る嬉しさ

御樋代の神は神國に止まらで

遠く行かすか名残惜しきも

大野原吹き來る風もなごやかに

光の公を静かに送るも

百鳥も公の出でまし惜しむにや

木々の梢に鳴き叫ぶなり

草の根に潜みて鳴ける蟲の音も

今日は淋しく聞え來るかも

天も地も森羅万象もおしなべて

公の旅立を惜しみ歎ける

高比古の神は御歌詠ませ給ふ。

𠄎  
駒竝めて歸り行きます御光の

神を送りつ悲しき吾なり

御光の神現れしより葦原の

國土新しく生れ出でしよ

高比古は光の神の恵にて

御側に仕ふる神となりけり

御光の神の恵は永遠に

天地失するも忘れざるべし

天は裂け地は沈むとも御光の

神の恵は如何で忘れむ

諸々の國津神等も御光の

神の功に蘇りつつ

此島このしまに生きとし生いける悉ことごとは  
神かみの恵めぐみに露つるほはぬはなし

照比古てるひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 雲霧くもぎりも隈くまなく晴はれて照比古てるひこの

吾われは御側みそばの神かみとなりける

御光みひかりの神かみを送おくりて駒こまの上へに

名殘なごりの涙なみだせきあへぬかも

御光みひかりの神かみ天降あもりしゆグロスの島しまは

彌新いやあたらしく蘇よみがへりたる

道遠みちとほみ駒こまの脚あしなみ竝はやくとも

濱邊はまべに着つかば日は黄昏たそがれむ

彼方あち此方こちと大野おほのヶ原がはらにそそり立たつ

常磐の松の光新し

清比古の神は御歌詠ませ給ふ。

天も地も澄みきらひたる大野原を

公を送ると駒に鞭うつ

葦原比女神に親しく仕へつつ

光の神を送る楽しさ

紺青の底ひも知らぬ空の海を

晝月の舟は冴え渡るなり

天津日は御空に清く輝きて

光の神の御行守れり

足引の鷹巢の山の空晴れて

公の御行を遙かに拜む



陽炎かげろひの燃もゆる春野はるのを進すすみ行く  
駒こまの蹄ひづめの音おとの清きよきも  
□

晴はる比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐  
雲霧くもぎりも光ひかりの神かみの功績いさをしに

隈くまなく晴はれし葦原あしはら清すがしも

葦原あしはらの國土くにの柱はしらと任まけられて

光ひかりの神かみを今け日ふ送おくるかも

神業かむわざの澤さはにおはせる御光みひかりの

神かみを留とどむる由よしなき吾われなり

朝香あさか比ひ女神かみを送おくりて春はるの野のを

駒こまに進すすめば陽炎かげろひ燃もゆるも

有あり難がたき神世かみよは漸やうやく生うまれたり

朝香あさかの比女ひめの現あれませしより  
□

起立おきたつひこ比古かみの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。  
。

主スの神かみの經綸しぐみの絲いとに操あやつられ

新あたしき國土くにの國形くにがた見みたりき

銳敏うなりづ鳴出なの神かみの功いさをと吾公わがきみの

貴うづの光ひかりに驚おどろきしはや

吾魂わがたまは蘇よみがへりたる心地こちして

今け日の御行みゆきの御供みともつか仕つかふる

葦原あしはらの國土くにの天地てんちは清きよまりて

御空みそらに冴さゆる晝月ひるづきの光かけ

天津あまつ日の光ひかりは清きよし葦原あしはらの

國土くにを隈くまなく照てり渡わたしつづ  
□

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

梅櫻桃の花咲く稚國土に

吾樂もしく蘇りけり

非時に梅も匂へよ桃も咲け

櫻も散らで神國を祝へ

名残惜しき神々等に別れ行く

今日の廣野の旅は淋しも

グロノスやゴロスの曲の亡びたる

鏡の沼を思へば恐ろし

醜草を焼き拂ひたる島ヶ根を

旅行く駒は安かりにけり

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 天晴れ天晴れ澄みきらひたる稚國土の

野邊を涉りて歸り路につくも

銳敏鳴出の神の守らす吾公の

功思へばひたに尊き

吾公と共にしあれば曲津見の

伊猛る國土も恐ることなし

磐石の上に佇む心地して

吾は朝夕御供に仕へつ

眞以彦は歌ふ。

☪ 眞以彦も後方に従ひて

光の神を送り奉るも

地に降り國津神等と俱に住む



國津神の卑しき司も捨てまさず

御供に召さす神の尊さ

天も地も睦び親しみ葦原の

國土拓けとの御心なるかも

靈生彦は歌ふ。

村肝の心曇りし吾にして

御供に仕ふる畏さ思ふ

國津神の司となりし吾にして

今日の御行を送る嬉しさ

榮春姫は歌ふ。

北きたの國くに土にの神かみの司つかさの吾われながら

忝かたじけなくも御み供ともに仕つかふる

葦あし原はら比ひ女め神かみの惠めぐみは永とこ久しへに

忘わすれざるべし眞まごころ心つく盡つくして

國くに津つかみ神つかさの司つかさとなりて村むら肝きもの

心こころはややに落おち付つきにけり』

八や榮さ姫かひめは歌うたふ。

忍しのヶ丘ぶがをを廻めぐれる近ちかき國くに土にの長をさと

吾われ任まけられて嬉うれしさに叫さけぶ

何なに事ごとも神かみの依よさしの儘ままなれば

吾われは嬉うれしく仕つかへ奉まつらむ

二ふた柱はしら御み樋ひろ代がみ神まもを守まもりつつ

御供に仕ふる嬉しさに泣く

斯く天津神國津神等は各自御歌詠ませ給ひつつ、其日の黄昏る頃、漸くにして常磐の濱邊に近づき楠の森に着かせ給ひ、茲に一夜の露の宿を定め給ひける。

(昭和八・一二・二三 舊一一・七 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

## 第二〇章 静波の音(一九七六)

朝香比女の神一行をはじめ、見送りまつりし葦原比女の神の主従は、漸くにして其日の黄昏る頃、常磐の海邊に近き松と楠との天を封じてそそりたつ常磐の森に着かせ給ひ、一夜を此處に明かさせ給ひつつ、いづれの神々も心の時めきに眠り給はず、廣大なる森を彼方此方と逍遙しつつ、御歌など詠みふけりて、明方を待たせ給ひける。



御空の月は皎々として冴え渡り、彼方此方の樹立まばらなる清庭に、白金の光を投げさせ給ひ、春の夜の風はおもむろに梢を吹き、實に平和の光景は天地に漲り渡れり。時々海吹く風に煽られて、磯邊によする潮騒の音靜かに聞ゆるのみなりき。

葦原比女の神は、常磐の森に冴え渡る月影を打ち仰ぎながら、心靜かに御歌詠ませ給ふ。

新しき國土の徴と大空に

白金の月冴え渡るかも

御光の神をはるばる送り來て

常磐の森の月に親しむ

仰ぎ見れば楠の梢はそよ風に

御空の月の面を撫でつつ

春の夜の長閑けき空の月見れば

わが魂線もうるほひにけり

潮騒の音聞ゆれど春の夜の

海吹く風は静かなるかも

天津空封じて茂る楠の

森の樹蔭に月を見るかな

こんもりと永久に茂れる楠の

森に夜鷹の啼く音冴えつつ

梟は楠の梢に翼休め

月の清さに啼き渡るなり

常磐樹のかげまばらなる砂の上に

かがよふ月の光は白しも

海原を遠行く公を送り來つ

常磐の森に黄昏れにけり

天津日の昇らす曉待ち待ちて

濱邊に吾は公を送らむ

御空ゆくさやけき月の光の如

晴れ渡るらむ葦原の國土は

久方の高地秀山ゆ天降りましし

光の神の別れ惜しまる

二十年の醜の艱みを拂ひましし

公は暁かけて立たすも

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

天津神國津神等に送られて

月照る森に着きにけらしな

春の日の短き夜半を此森に

月に照らされ休らふ清しさ

葦原比女神の守らす食國を

明日は立たなむ神のまにまに

わが行かば又もや醜の曲津見は

窺ひ來らむ心し給はれ

曲津見の猛びいよいよ強ければ

燧石の眞火に拂はせ給へよ

こんもりと茂れる楠の梢深く

潛みて鳴ける百鳥清しも

白々と庭の眞砂も光るなり

この新國土も月の守りに

明日されば萬里の海原の浪分けて

ひたに進まむ西方の國土へ

西方の國土をめぐらす顯津男の

神の御前に侍らふ嬉しさ

鋭敏鳴出の神の守りに数々の

功を建てて國土生みしはや

葦原の國土の果てなるこの濱邊を

明日は離れむ磐楠舟にて

葦原の國土に仕ふる天津神も

國津神々もまめやかにませよ

野槌比古の神は御歌詠ませ給ふ。

大空の月の光のさやかなれば

茂らふ楠の樹蔭は暗しも

御光の神を送りて吾は今

常磐の森の月を仰ぐも

果しなき御空を渡る月舟の

清きよきは公きみの心こころなるかも

海原うなばらを隈くまなく照てらして冴さえ渡わたる

月つきにもままして光ひからす神かみはも

朝あさ香か比ひ女神めかみのまします夜よの森もりは

眞ま晝ひるの如ごとく輝かがきて居をり

千早ちはやぶ振ぶる神かみ世よもきかぬ目め出で度たさに

あひにけらしな國くに津つかみ神われ吾は

春はるの夜よの風かぜ軟やはらかき森もり蔭かげに

曉あかつきを待まつ心こころは淋さびしも

明あ日すされば歸かへらす公きみと思おもふが故ゆゑに

この淋さびしさをわが抱いだくなり

黄たそがれ昏れの森もりにも百もも鳥とり千ち鳥どりなきて

明あ日すの御み行ゆきを惜をしむがに聞きこゆ

初頭うぶが比古みひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

葦原あしはらの國土くにの廣野ひろのをわたり終をへて

海原うなばら進すすむ時ときは近ちかめり

大空おほぞらに輝かがやく月つきの光かげ見みつつ

思おもふは瑞みづの御靈みたまなりけり

潮騒しほざめの音おとも靜しづかにひびきけり

海吹うみふく風かぜも穩おたやかにして

この森もりはわが目路めぢ遠とほくひらかれて

海吹うみふく風かぜを永とほ久はに防ふせぐも

御空みそらゆく月つきも暫しばしはこの森もりに

蹄ひつめを止とめて休やすらひ給たまはむ

はろばろと光ひかりの神かみに從したがひて

日ひ々び面おも白しろき神業みわざ見みしかな

新あたらしき國くに土にの生うまれし喜よろこびを

千ち代よに傳つたへて壽ことほぎまつらむ

高たか比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

霧きり籠こむる萬ま里での海うな原ばら渡わたらむと

光ひかりの神かみは此こ處こに着つかせり

潮しほ騒ざゐの音おとも靜しづかに響ひびくなり

空そら澄すみ渡わたる月つきの下したびに

夜よもすがら月つきを讚ほめつつ磯いそに寄よす

波なみの音ね聞ききつ曉あかつき待またむ

百もも鳥とりの鳴なきたつ聲こゑは夜よ半はながら

森もりの梢こすゑの彼あ方ち此こ方ちに聞きゆる

天あめも地つちも蘇よみがりたる心こ地ちして



常磐ときはの森もりの月つきに親したしむむ  
□

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

□  
御樋みひしろ代の神かみの光ひかりに天地あめつちの

雲霧くもきり晴はれてかがよふ月つき光かげ

萬里まの海うみの霧きりも晴はれなむ御光みひかりの

神かみの出いでます潮しほの八や百ほ路ぢは

この森もりの月つきにひとよ一ひとよ夜よを明あかしつつ

笑ゑみ榮さかえ行ゆかむ萬里まの海路うなぢを

暖あたたかく夜よ半は吹ふく風かぜにわが袖そでは

蝶々てふてふの如ごと翻ひるるなり

白梅しほひつめの花はなのかたへに夜よの森もりの

水い火き清きよまりて匂におひ満みちたり

葦原あしはらの國くに土には目め出で度たしところどころに

白梅しろうめの花はなの匂におひ出いづればら

照比古てるひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

亂みだれ果はてしグロスくの國くにの雲霧くもきりを

晴はらして光ひかりの神かみはたたすか

御光みひかりの神かみの御後みあとに從したがひて

常磐とぎはの森もりに進すすみ來きつるも

明日あすよりは御光みひかりの神かみのましまさずと

思おもへば淋さびし天津神あまつかみ吾われは

八潮路やしほぢの潮しほの八百路やほぢを乗のり越こえて

光ひかりの神かみは明日あすたたすかも

とどめまつる術すべさへもなき悲かなしさに

真心まごころの限かぎり送おくり来きつるも

明日あすの日の悲かなしき別わかれ忍しのびつつ

月つき見る吾わが眼めも曇くもらひにける

御空みそら渡る月つきのさやけさ仰あふぎつつ

曇くもるわが目の涙なみだ熱あつきも  
□

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

□  
神々かみがみの清きよき真言まことに照てらされて

思おもひもかけず日ひを重かさねける

葦原あしはらの神國みくにを明日あすは立たち出いでて

萬里まの海原うなばら霧きり分け進すすまむ

新あたらしき國くに土生にうみの旅たびを重かさねます

朝香あさかの比女ひめの神かみの功いさをよ

言こと靈たまの光ひかり充みちぬるわが公きみの

御み供ともに仕つかへて潮路しほぢをゆかむ

月つき讀よみは常磐ときはの森もりの空そら高たかく

澄すみきらひつつ吾等われらを照てらせり

百鳥ももとりも歡よろこぎ勇いさむか照てる月つきの

したびにうたひて眠ねむらずゐるも』

清比古きよひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

天津神あまつかみの列つらに選えらまれ間まもあらず

光ひかりの公きみを送おくり來きつるも

力ちからなき吾われなりながら御樋代みひしろの

神かみを送おくりて仕つかふる畏かしこさ

天地あめつちを永と久はに包つつみし雲霧くもぎりも

隈なく晴れて國土の秀見ゆるも  
豊なる國土の秀見えて月も日も  
光の限りを光らせ給へり

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

天晴れし今日のよき日に御光の

神に従ひ此處に来つるも

こんもりと常磐の松や楠の

茂れる森のかけに休らふ

小夜更けて御空の月は傾きつ

聲騒がしき濱千鳥かな

濱千鳥よび交はす聲のたしたしに

聞えて小夜は更け渡りぬる

明日あすされば公きみに仕つかへて霧きりこむる  
海路うなぢをゆかむ吾われぞ樂たのしき  
』

晴はる比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 公きみが行ゆく明日あすの海原うなばら晴はれよかし

風かぜも穩おだひに御舟みふねを守まもれ

御舟おんふねは萬里まの海原うなばらすくすくと

艱なやみもあらに進すすみますらむ

有明ありあけの月つきは白しろけて東ひむがしの

御空みそらに茜あかねの雲くもは湧わき立たちぬ

鵲かささぎの聲こゑはさやかに朝明あさあけの

御空みそらの幸さちを壽ことほぎて鳴なくも  
』

漸やうやくにして常磐ときはの森もりの一夜ひとよきはからりと明けあ放はなれ、東ひむがしの御空みそらを明あかしつつ新あたしき  
太陽たいやうは晃くわうくわう々と下界げかいを照てらし、静しづかに静しづかに昇のほらせ給たまひける。

(昭和八・一二・二三 舊一一・七 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

#### 第四篇 神戰妖敗しんせんえうはい

#### 第二章 怪體けたいの島しま（一九七七）

朝香比女あさかひめの神かみは、葦原比女あしはらひめの神かみ一行いっかうに常磐ときはの濱邊はまべまで送おくられ、互たがひに名残なごりりを惜を  
しみつつ、朝日あさひの照てらふ萬里まの海原うなばらを順風じゆんふうに乗じやうじ、南みなみへ南みなみへと舟ふねを進すすませ給たまふ折をり  
しもあれ、晴はれ渡わたりたる大空おほぞらの彼方かなたに屹立きつりつしたる鷹巢たかしの山やまの頂いただきより、黒煙こくえん濛もつ々と

噴火の如くに噴き出して天に沖し、次第々々に膨れ擴がり、萬里の海原さして押し寄せ来る状、もの凄きばかりなりける。黒雲はグロノス、ゴロスの龍蛇神の形を現はし、眞つ先に海原さして進み来る如く見えにける。  
朝香比女の神は此光景を打仰ぎながら、

鷹巢山尾根に黒雲涌き立ちて

大空高く擴ごれるがに見ゆ

鷹巢山に立つ黒雲は醜神の

吾に仇せむ下心かも

澄みきらふ御空の蒼を醜神の

醜の黒雲ぬりつぶさむとす

よしやよし萬里の海原包むとも

吾言靈に伊吹き拂はむ

曲神は棲處焼かれて鷹巢山に



忍しのびて雲くもとなりて荒すさぶも  
吾わが舟ふねは魔ま神がみの黒くろ雲くもに包つつまれて

行ゆく手ても見みえずなりにけらしな

主スの神かみの御み水いき火あに生あれし吾われにして

如い何かでひるまむ曲ま津がの荒すさびに

曲ま津が神かみ荒すさべば荒すさべ千ち萬よろづの

災わざはひ來きたるも吾われはひるまじ

初う頭づ比が古みの神かみは此この光くわう景けいをみて御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐  
グロノスもゴロスも力ちからのありたけを

盡つくして御み舟ふねにさやらむとすも

大おほ空ぞらの蒼あを海うな原ばらをぬりつぶし

萬ま里での海うみまで雲くもに包つつめる

よしやよし黒雲如何に包むとも

海原分けていや進み行かむ

曲神の醜の水火にや海風は

吹き亂れつつ御舟ゆるするも

斯く歌ひ給ふ折しも、海上俄に旋風起り、雲は大なる輪を描きて前後左右に舞

ひ狂ひ、磐楠舟は荒浪に翻弄され、一進一退如何ともすべからざる羽目に陥りぬ。

朝香比女の神は平然として微笑しながら此光景を靜に見給ひつつ、心中に深き成

算あるものの如くに在し坐しける。

起立比古の神は咫尺辨ぜぬ暴風の海原を眺めながら、儼然として御歌詠ませ給

ふ。

曲神はあらむ限りの暴力を

ふるひて御舟を顛覆さむとす

風も吹け浪も立て立て雲も起きよ

如何で恐れむ神なる吾は

面白く風の海原に御舟は

浮きつ沈みつ上りつ下りつ

荒浪は鬣振ひ御舟の

舷きびしく噛みつき来るも

主の神と朝香の比女に任せたる

吾身は天に任すのみなる

グロノスやゴロスも力の種つきて

やがて亡ばむ思へば悲しも

葦原の國土永遠に治むべく

此曲津見を罰めで止まむや

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ 奴婆玉の闇の海原に荒浪の

立ちたつ今日の旅は勇まし

曲津見の荒ぶ限りを荒ばせて

吾面白く眺めむと思ふ

荒風の響も高き浪の音も

何か恐れむ神なる吾は

グロノスもゴロスもここを玉の緒の

命かぎりに荒ぶと見えたり

荒ぶだけ荒ばせ狂はせ疲らせて

さて其の後に言靈宣らむか

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ 久方の天を晴らしの吾なれば

御空みそらの黒雲くろくも直ただに拂はらはむ

ひとふたみよいつむゆななやこのたり  
一二三四五六七八九十

ももちよろじやちよろじ  
百千萬八千萬の

かみあつ  
神よ集まりまして

けふみふね  
今日の御舟にさやりたる

しこくろくもはら  
醜の黒雲拂はせ給へ

かむながらかむながら  
ああ惟神々々

われら  
吾等となふる言靈に

いのちひかり  
命あれかし光あれかし

あさかひめのかみふたたびみうたよ  
朝香比女の神は再び御歌詠ませ給ふ。

面白き醜の猛びを見るものか

萬里の海原過ぎ行く度に

曲神もやがて疲れむ斯くの如

黒雲吐けば力盡きなむ

黒雲を起し荒風吹かせつつ

吾旅立を脅かさむとするも

斯くの如き醜の災何かあらむ

暫く待ちて吾は罰めむ

斯く神々は各自御歌詠ませつつ、闇の海の暴風怒濤に舟を翻弄されながら、神色自若として少しも恐れず、暫しを望見し落着き居給ひける。

斯かる處へ百雷の一時に轟く如きウーウーウーの唸り聲響き渡り、忽ちにして荒風は鉾先を緩め、浪和らぎ渡り、四邊を包みし魔神の黒雲は次第々に薄らぎつつ四邊に飛び散り、遂には跡形も止めず、浪平かに天津日は晃々と輝き給ふ平

靜せいなる天地てんちと變かはりけるぞ不ふ思議しぎなれ。  
朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

ひそやかにわが祈いのりたる言靈ことたまに

銳敏うなり鳴出りづの神かみは現あれましにけり

銳敏うなり鳴出りづの神かみの言靈ことたまに破やぶられて

曲津見まがつみの奸計たくみは消きえ失うせにけり

荒風あらかぜを起おこし荒浪あらなみ振ふるはせし

曲津まがつは亡ほろびむ憐あはれなるかも

主スの神かみの厚あつき守まもりと銳敏うなり鳴出りづの

神かみの功いさをに曲津まがつは逃にげたり

黒雲くろくもは次第しだい々々しだいに薄うすらぎて

其影そのかげさへも見みえずなりけり

千重ちへの浪照なみてらして御空みそらゆ日ひの神かみは

わが行く舟を守らせ給ふ

曲神は勢強く見ぬれども

眞言の神には脆きものかな

葦原比女神の神言は曲津見に

襲はれ給はむ思へば愛しき

さりながら鋭敏鳴出の神わが魂の

いつかひあれば國土安からむ

海原は春の陽氣の漂よひて

水面に跳る魚鱗は光れり

初頭比古の神は莞爾として御歌詠ませ給ふ。

神々の稜威の守りに曲津見は  
見るも哀れに亡び失せける



葦原の鷹巢の山の谷深く

潜める曲の悪戯可笑しも

黒雲の形はさながらグロノスと

ゴロスの走る姿なりける

斯の如御空は晴れて浪凧ぎて

公の御舟の安さ嬉しさ

目路遠く水の面に浮ぶ島影は

しかと見えねど巖山なるらし

主の神と鋭敏鳴出の神わが公の

御稜威に安き磐楠舟かも

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

面白き曲津の芝居の一幕を

今日けふの浪路なみぢの旅たびに見みしかな

一時ひとときは如何いかがならむかと村肝むらきもの

吾われは心こころを惱なやませにける

強つよき言こと言いひつつありしが村肝むらきもの

心こころの奥おくは慄ふるひ居ゐたりき

鋭う敏なり鳴出りづの神かみの言こと靈たまなかりせば

未まだ黒雲くろくもはさやり居ゐにけむ

上うへ下したに公きみの召めします御舟おんふねを

翻弄ほんろうしたる曲浪まがなみな風なぎしよ

斯かくならば最早もはや安やすけし西方にしかたの

曲津まがつつの國土くににひたに進すすまむ

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☪ 朝香比女神は驚きましまさず

微笑みいませし雄々しさ健氣さ

海原を闇に包みて御舟を

浪に弄りし曲津見の悪戯よ

如何ならむ曲津の災重ぬとも

神の御稜威にひたに進まむ

鷹巢山に忍びてグロノス、ゴロスの曲津は

黒雲となりて御舟艱めぬ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 久方の天晴れ渡り月も日も

水面に浮びて湯氣立つ海なり

御舟は吹く春風にすくすくと

進すすみましけり萬ま里での海原うなばらを

朝あさ香か比ひ女め神かみに仕つかへて種くさくさ々の

曲ま津がの惡いたづら戲おもしろ面しろ白く見みし

闇やみの海うみに荒あらかぜ風なみも浪なみも駿はやこま馬は

恐おそれず靜しづかに嘶いななきて居ゐし

吾われは今いま無むしん心の駒こまの幸さちはひを

つくづく覺さとりぬ荒あらし浪うみの海うみに

幾いくたび度も御みふね舟ねあやふき浪なみの上へを

無むしん心の駒こまは嘶いななき歡よろぎつ

海うなぎ路はし走はしるその苦くるしさに引ひきか替かへて

駒こまは御みふね舟ねを喜よろこびけるにや

漸やうやくに島しま影かげ近ちかくなりけり

魔ま神がみよ永と遠はに潛ひそめるらしも

舟は漸くにして海路に横はる巨大なる巖島に近づきぬ。よくよく見れば、赤黒  
さまさまの大蛇幾筋となく巖より首をさし出で、長大なる身體をうねらせながら、  
大口を開き火焰の舌を吐き、御舟に向つて襲はむとする勢を全力を盡し見せ居た  
りければ、朝香比女の神はこの状を御覽して、心穩ひに微笑みつつ御歌詠ませ給  
ふ。

此處も亦魔神の巢ぐふ巖島の

醜の大蛇はさやらむとすも

醜神は如何にさやぐも猛ぶとも

神なる吾は恐るべきやも

曲神を言向けまたは罰めつつ

神のまにまに進む吾なり

千丈の巖の上より長々と

大口開けて大蛇は火を吹けり

千百の大蛇が一度に吐き出す

炎は青く眞火にはあらず

吾伊行く道にさやらむ曲津見は

生言靈に放りて行かむ

草木一つ無き巖山に眞火を避けて

ここを先途と曲津見潜める

さりながら生言靈の御功に

この巖山を火の島とせむ。

いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ

うみのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせす

きやうの浪路なみぢの旅立ちたびだに

さやらむ曲津まがは悉ことごとく

生言靈いくことたまの御功みいさをに

伊吹いぶき拂はらひて追おひそけつ

神かみの依よさしの神業かむわざに

仕つかへ奉まつらむ惟神かむながら

神かみの御前みまへに生言靈いくことたまを

捧ささげて祈いのり奉たてまつる

もしも曲神まががみわが吾言靈ことたまに

従まづはずしてさやりなば

この巖島いはしまは悉ことごとく

眞火まひを起おこして灼熱しやくねつの

炎ほのほに残のこらず焼やき盡つくし

曲津まがの在處あrikaを絶たやすべし

カコクケキ

力の言靈ことたまに眞火まひ出でて

さしもに堅かたき巖山いはやまも

火ひの海うみとならむ惟神かむながり

曲津見心まがつみこころを改あらためて

彌永久いやとこしへに此島このしまの

守まもりの神かみとなれよかし

ああ惟神かむながらかむながら々々

生言靈いくことたまに光ひかりあれ

吾言靈わがことたまに命いのちあれよ。

海中わだなかに聳そそり立たちたる巖島いはしまに

潜ひそむ大蛇をろちを焼やきて進すすまむ



巖島は力の言霊の輝きに  
残らず火となれ炎となれよ

斯く歌ひ給ふや、千尋の海底より御空に高く屹立したる周圍約三里の巖島も、  
忽ち一面に火焰に包まれ、海水は熱湯の如く煮えくり返り、湯氣と煙は四邊を包  
みて其壯觀譬ふるに物なく、大蛇は或は焼かれ或は傷き或は命からがら雲を吐き  
出し、辛うじて是に乗じ、鷹巢の山の空を指して逃げ行きにける。巖島は瞬く間  
に根底より焼き盡され、海水は熱湯の如く沸騰し湯氣立ち昇りぬ。此光景を見て  
初頭比古の神は感激に堪へず、御歌詠ませ給ふ。

今更に吾驚きぬ御樋代神の

生言霊に島は滅びぬ

八千尋の底の巖根も火となりて

焼滅しにけり公の御稜威に

いつまでもゴロノス、ゴロスの執拗さしつえう

思へば吾は憐れを催すおも われ あは もよほ

永遠に動かぬ巖根も吾公のとこは うごこ いはね わがきみ

生言靈にかなはざりしよいくことたま

巖ヶ根は残らず火となり湯氣となりいはがね のこ ひ ゆげ

煙となりし時の見事さけむり みこと

面白き公の神業伏し拜みおもしろ きみ かむわざ ふ をが

この天地の不思議を悟りぬあめつち ふしぎ さと

吾公の功績見れば初頭比古わがきみ いさをし み うぶが みひこ

吾は小さき神にぞありけるわれ ちひ かみ

曲津見は巖の山と變じつつまがつみ いはほ やま へん

公の海路の旅にさやりしきみ うなぢ たび

心地よく曲の化身の巖島はこちち まが けしん いはしま

生言靈に滅びぬるかないくことたま ほろ

カコクケキ生言靈の幸はひに  
堅磐常磐の巖も焼けたり「

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

尊たふとさに吾われは言葉も口籠くちごもり

あきれ慄をのくばかりなりけり

今更いまさらに生言靈いくことたまの尊たふとさを

思おもひけるかな海路うなぢの旅たびに

炎えんえん々と巖島いはしま焼ゆる状さま見みつつ

今更いまさらの如ごと驚おどろき止やまずも

巖いはの上へに千ちよろづ萬をろちたの大蛇をろちた垂れかかり

大口おほぐち開あけて炎ほのほを吐はきける

斯かくの如ごとき曲津まがの猛たけびも平然へいぜんと

公きみは微笑ほほゑみ御覽みそなしける

曲津見まがつみは四度よたび破やぶれて同輩ともがらを

數多あまたうしな失なひ逃にげ去さりにける

いや廣ひろに神かみの御稜威みいづの幸さちはひて

この天地あめつちは拓ひらけ行ゆくらむ

立世比女たつよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

今更いまさらに朝香あさかの比女ひめの吾公わがきみの

いみじき功いさをを驚おどろきにけり

斯かくの如光ごとひかりと功いさをの吾公わがきみに

仕つかへて進すすまむ思おもへば嬉うれしき

心弱こころよわき女神めがみの吾われも魂たまふと太ふとり

いみじき力ちからを賜たまはりける

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

跡形もなく滅びたる曲津見の

化身の巖の跡に湯氣立つ

曲津見は萬里の海原に浪を立て

雲を起して雄猛びにける

曲津見の雄猛び煙となりにけり

御樋代神の生言靈に

浪路はるけき萬里の海原安々と

公に仕へて渡らふ樂しさ

カコクケキ生言靈の御光は

千引の巖ヶ根さへも焼きたり

巖島の燃ゆる火影はあかあかと

海底までも輝きしはや

斯く各自御歌詠ませつつ、順風に乗り舟の舳を東南に向け進ませ給ふ。

（昭和八・一二・二五 舊一・九 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録）

## 第二二章

歎聲仄聞（一九七八）

朝香比女の神の一行はグロノス、ゴロスの化身なりし巖島の邪神を生言靈の光  
に島もろとも焼き盡し給ひ、春風のそよりに渡る萬里の海原を、舳を東南に向け  
悠悠進ませ給ひける。

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

くさぐさの曲の艱みを放りつつ

御舟やうやく安くなりける

晃々と浪を照らして天津日は

春はるの海原うなばらのぞきたまへり

目路めぢの限りかぎ萬里までの海原うなばらに霞かすみ立ちて

風暖かぜあたたかき浪路なみぢ樂たのしも

黒雲くろくもに海原うなばら包み浪なみ立てて

グロノス、ゴロスは猛たけびたるかも

グロノスもゴロスも公きみの功績いさをしに

逃にげ失うせたるぞ勇いさましかりけり

海底うなそこに遊あそべる小魚さなの姿かげさへも

透すき通とほり見みゆ清すがしき今日けふなり

わが公きみの御供みともは樂たのし言靈ことたまの

水火いきの光ひかりを居ゐながら拜はいしつ

萬里まの島しまと葦原あしはらの國くに土にを拓ひらきましたて

公きみが渡わたらす萬里までの海原うなばら

月つきも星ほしも白しろく輝かがやく海原うなばらに

立つ白浪は陽に耀へる  
月と日と星の光に守られて  
吾行く舟は恙あらしな

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

↵  
樂しさの限りなるかも吾公の

御舟に曲のたはむれ見る今日

生島ゆ島に渡らふ水鳥の

翼は白く浪にうつれり

水底を飛びたつごとく思はれぬ

澄みきらひたる水鳥の影は

仰ぎ見る鷹巢の山は紫の

雲漂ひて日影は高し



曲津見は戦ふたびに破れつつ  
西方の空に消え失せにけり

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

白馬ヶ嶽は雲に霞みて空の奥に

もやもや燃ゆる白雲のどけし

白雲は天津日の下をよぎりつつ

この海原に影を落せり

遠の海は青く見えつつ目路近き

浪は白々輝けるかも

鷹巢山は白馬ヶ嶽に比ぶれば

澄み渡りつつ高さ及ばず

吾伊行く浪路遙けく守りませ

主スの大御神おほみかみ鋭敏うなり鳴出づの神かみ  
公きみが旅たびを安やすく守まもりて鋭敏うなり鳴出づの

神かみは折々をりをり唸うならせたまふも

御光みひかりの神かみの出いでます海原うなばらに

遮さやらむ雲くもは忽たちまち消きゆるも

海わだ中の岩いはに浪なみの秀ほ突き當あたり

白しろき飛沫しぶきは高たかのぼりつつ

白浪しらなみは飛沫しぶきとなりて高たかのぼり

再ふたび水みづに落おつるさやけさ

次つぎ次つぎに飛沫しぶき立たちつつ又また消きえつ

今け日の浪路なみぢの風静かぜしづかなり㊦

天晴あめはれ比女ひひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☪ 天も地も隈なく晴れし海原の

旅行く今日の穩かなるも

帆を揚げず艦權用ゐぬ磐楠舟の

進むは神の功なりけり

何事も神の心に任せたる

公の御舟は安く進むも

海鳥の啼く音か國津神等の

叫びか灰かに響き渡らふ

東北の浪に浮べる島ヶ根ゆ

怪しき聲は響き來らしも

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 浪の秀を渡り聞ゆる聲は悲し

國津神等の叫びなるらむ

兔にもあれ角にもあれや聲すなる

島に向ひて吾は進まむ

かく歌はせ給ふや、御舟は心あるものの如く、思ふ舳を東北に變じ、波上に霞

める島影さして進み行くこそ不思議なる。  
初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

天地の神の心か吾舟は

神言のまにまに方向をかへたる

風の方向變りて公が御舟は

東北の島をさして流る

彼方此方と水面に峙つ巖ヶ根は

草木も生ひず赫々映ゆるも

荒風あらかぜに立ち騒さわぎたる浪頭なみがしらの

島しまを洗あらひしあとにやあらむ

島影しまかげも次第しだいに近く見みえて

歎なげかひの聲こゑ高たかまりにける

片時かたときも疾とく速すみやけく御舟おんふねの

御行待みゆきつらむ歎なげかひの聲こゑは

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

仄見ほのみゆる島しまは廣ひろしも曲津見まがつみに

歎なげかふ神かみの聲こゑにやあらむ

曲津見まがつみは島しまより島しまに渡わたらひて

荒すさび狂くるふかこれの神世かみよに

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

𠄎  
歎かひの聲は次ぎ次ぎ高まりぬ

進めよ進め御舟よ速く

海原を右や左ととび交ひて

御舟を守る水鳥の影

水鳥は空を眞白に染めながら

歎きの島ゆ飛び立てる見ゆ

グロノスやゴロスの曲津の片割の

國津神等を艱ますなるべし

西南の風は力を増しにつつ

公が御舟の進みは速し

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 歎かひの聲は水鳥ならずして  
神の御聲と吾も思へり  
束の間も早く御舟よ進みませ  
歎きの島を救はむがために□

朝香比女の神は島影の近づきしを打ち眺めながら、

□ 曲神に艱まされたる國津神の  
最後の際の叫びなるらし  
主の神の御稜威畏み片時も  
疾く進まなむ島の岸邊に  
ただならぬ百神等の歎き聲  
いやますますも高まりにつつ□

かかる折しも、浮島の方面より荒浪を押しわけながら多角多頭の大悪龍、幾千丈とも限りなく、浪飛沫を立て、此方に向つて數萬噸級の船の走るが如き凄じき勢にて進み來るあり。

朝香比女の神はこの光景を打ち見やり給ひつつ、

「ゴロノスにあらざゴロスにあらざして

正しく八岐の大蛇なりける

吾舟を只一口に葬らむと

勢強く進み來るなり

舟よ舟よ廣くなれなれ大きくなれよ

八岐大蛇の數百倍となれ」

かく歌はせ給ふや、磐楠舟は次第々々に上下前後左右に膨れ擴がり、堅き事岩の如く、忽ち其形山の如くなりければ、初頭比古の神は餘りの不思議さに驚き給



ひて御歌うたはせ給ふ。

□ 今更に公の御稜威の畏さを

思ひて吾は心戦く

八岐大蛇來向ふ影に驚きつ

更に御稜威に畏みしはや

天界は意志想念の世界とは

かねて知りつつ今更驚きぬ

かくならば八岐大蛇も何かあらむ

御舟の舳に截り放るのみ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 進み來る大蛇の勢強くとも

公きみの御舟みふねに對むかひ得うべしや

山やまのごと彌いやひろ擴ひろごれる御舟おんふねに

乘のれる吾身わがみも大おほきくなりぬ

吾身わが體からだ次第しだい々々しだいに太ふとりつつ

無限むげんの力備ちからそなはりしはや  
□

かく歌うたひ給たまふ折をりしも、多角多頭たかくたとうの大蛇をろちは御舟間みふねまぢか近く進すすみ來きたり餘あまりの大船おほふねに驚おどろき

にけむ、大口おほぐちを開ひらき鎌首かまくびを立てたまま、さも無念むねんさうな面持おももちにて、ざんぶとばか

り水中すゐちゆうに怪あやしき姿すがたをかくしける。茲ここに朝香比女あさかひめの神かみは、臍下丹田せいかたんでんに魂たまを鎮しづめ、天てん

に向むかつて合掌がつしやうし、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、生言靈いくことたまを宣のらせ給たまへば、海水かいすゐは忽たちまち熱湯ねつたうの

如ごとく煮にえ返かへり、八岐大蛇やまたをろちは潛ひそむに由よしなく且熱湯かつねつたうに焼やかれて全身ぜんしん糜爛ただれ藻搔もがき苦くるし

み、海上かいしやうをのたうち廻まはり、遂つひには死體したたいとなりて赤あかき腹部ふくぶを現あらはし、水面すゐめんに浮うかび出い

でたり。立世比女たつよひめの神かみはこの状さまを見みて、

あはれあはれ公の言靈幸はひて

大蛇は脆くも亡びけるかな

潮水は沸き返りつつ湯氣立ちて

大蛇は遂に滅びけるかも

百旬に餘る大蛇の遺骸は

浪の上赤く浮べる凄さよ

物凄き形相なして迫り來し

大蛇はあへなく身亡せけるかも

大蛇神よ今日より御魂を立て直し

再び神と蘇り來よ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

奇びなる朝香の比女の神言に

磐楠舟は擴ごりにけり

膨れ膨れ太り太りて極みなく

公の御舟は巖となりける

常巖の堅き御舟もかるがると

進みゆくかも歎きの島に

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

曲津見の醜の大蛇は亡びたり

歎きの島は蘇るべし

黄昏に近づきければ吾舟は

歎きの島に急ぎ進めよ

かく宣らせ給ふや、御舟は一瀉千里の勢をもつて黄昏近き海原を進み行く。

(昭和八・一二・二五 舊一一・九 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

第二三章 天の蒼雲河(一九七九)

朝香比女の神の召しませる磐楠舟は、歎きの島の岸邊に近づくとつれて次第々々に其の形量を減じ、全く原形に復したりければ、渚邊近く御舟を進ませ給ひ、駒もろともに無事上陸を遂げ給ひける。

歎きの島に上りて見れば、黒煙濛々と立ち籠めて咫尺を辨ぜず、黄昏とはいひながら、御空の月は影を隠し、脚下に生ふる草木のかけさへも目に入らぬばかりとはなりぬ。

ここに朝香比女の神は、上陸早々天津神言を奏上し、七十五聲の生言靈をなり出で給へば、御空の黒雲は南北に輪廓正しく別れ、恰も銀河の如く東西に蒼雲の線を引き、月讀神は恰も其の正中を渡らせ給ひつつ、明皎々の光を地上に投げ給

ひけるにぞ、朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ はろばると海原渡り黄昏を

歎なげきの島しまに吾來われきつるかも

黒雲くろくもは天地てんちを包つつみて烏羽玉うばたまの

黑白あやめも分わかぬ歎なげきの聲こゑのみ

神言かみことを宣のり上げ七十五聲しちじふごせいの言靈ことたまを

放はなてば四邊あたりの雲くもは散ちりける

大空おほぞらの黒雲くろくも左右さいうに別わかれつつ

御空みそらの蒼あをは西にしに流ながるる

大空おほぞらの蒼雲あをくもの河かはを渡わたりゆく

月舟つきふねのかけは牙さえ渡わたりたり

八岐大蛇やまたをろち永久とほに潛ひそみて荒すさびたる

歎なげきの島しまも今日けふより生いきむ

國津神の歎きの聲は鎮まりぬ

わが言靈に曲津の逃げしか

今宵はも月の下びに夜を明し

明日さり來れば曲津を拂はむ

鋭敏鳴出の神よ現れませ國民の

歎き止めて國土を生むべく

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

わが公の生言靈の幸はひに

天地を包みし雲は別れし

大空の蒼雲の河を月舟は

輝きにつつ流らへるかも

海を吹き風の力の強ければ

磯端を打つ浪の音高しも

わが公の御召の舟は磯端に

かたく繋ぎぬ浪高ければ

わが公の渡らす萬里の海原は

静かなりけり惟神ならし

惟神主の大神の御依さしに

出でます公の功は著し

天地に著き功を建てまして

光らせ給ふ御樋代の神よ

草も木も海吹く風にしばかれて

片靡きたりこれの島根は

月讀の神よ心しまさまば

この夜もすがらを照らせ給へ

わが公の國魂生みの御行ぞや



御空みそらの月つきよ曇くもらせ給たまふな

歎なげかひの聲こゑは俄にはかにとどまりぬ

御樋みひ代神しろがみの上あがりましてゆ

曲神まががみは矛ほこを納をさめて逃にげ仕度じたく

整ととのへ居ゐるらし風かぜ出いでにけり

草くさの根ねに終夜よせずがらなく蟲むしの音ねも

悲かなしく聞きこゆ歎なげきの島しまは

向むかつ尾をの茂木しげきの枝えだに鳴なきたつる

梟ふくろふの聲こゑは悲かなしかりける

常磐樹とぎはぎの松まつの梢こすゑに月つきかけて

今宵こよひの宿やどを休やすらはむかな

千重ちへの浪なみ押し分わけ魔神まがみを打うち拂はらひ

公きみに仕つかへて此處ここに來きつるも

葦原あしはらの島しまヶ根がねたちて種々くさくさの

曲津まがの荒すさびに遇あひにけらしな

鋭う敏なり鳴り出づの神かみの補たすけとわが公きみの

光ひかりに安やすく此こ處こに來きつるも

曲津まが見みは逃にげつ隠かくれつ行ゆく先さきに

力ちから限かきりにさやらむとすも

大空おほぞらの黒雲くろくも次第しだいに別わかれゆきて

天あまの雲河くもかは擴ひろごりにけり

月舟つきふねの渡わたらふ御空みそらの雲河くもかはに

眞砂まなこの如ごとく星ほしかがよへり

春はるの夜よの宿やどりといへど梢しすゑ吹ふく

風かぜの音ね聞きけば冬心ふゆこころ地ちすも

曲津まが見みは未いまだ力ちからの殘のこれるか

公きみが宿やどりの松まつを搖ゆするも

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

起立比古吾は御側に侍らひて

百の神業珍しみ見つ

力なき吾なりながらわが公の

功に歎きの島根に来つるも

雲霧を起して醜の曲津見の

さやれる状のをかしくもあるか

艱みたる大海原の黒雲の

言靈匂ふと思へば安けし

主の神のなり出で給ひし言靈に

刃向ふ曲津は亡びゆくかも

天渡る月の面はいやますに

光さやけくなりまさりつつ

草くさの根ねに鳴なく松まつ蟲むしも見みゆるまで

輝かがやき強つよし月つき舟ふねの光かけは

萬ま里での島しまも葦あし原はらの島しまもわが公きみの

光ひかりの水い火きに治をさまりしはや

この島しまも必かならず清きよく治をさまらむ

光ひかりの公きみの出いでましし上うへは

この島しまに醜しこの曲まが津つの集あつまりて

國くに津につ神かみ等をみなやめ居ゐるらし

草くさも木きも鳥とりも獸けものもことごとく

蘇よみがへるらむ公きみの光ひかりに

曉あかつきを待まちて進すすまむわが公きみの

御み供とも仕つかへて島しまの奥おくまで

立た世つよ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

草くさの野のに立たつ夜嵐よあらしは強つよけれど

何なにかおそれむ言こと霊たまの吾われは

吾われも亦また主スの大神おほかみの言こと霊たまの

力ちからになり出いでし小ちさき神かみなり

妖邪えうじやの氣き凝こり固かたまりて曲津見まがつみと

なりし思おもへば憐あはれなるかも

主スの神かみの水い火きの濁にごりの固かたまりし

曲津見まがつみなれば憐あはれ催もよほす

さりながら曲津見まがつみ天地てんちに蔓延はびこらば

紫微しびてん天界かいは闇やみとなるべし

よしあしの差別けぢめなけれど天界かみくにを

亂みだす曲津まがつは拂はらふべきかな

拂はらへども又また湧わき出いづる曲津見まがつみの

醜しこの黒雲くろくも詮術せむすべもなき

善よき事ことの裏うらには悪あしき曲業まがわざの

潜ひそむものかなこの天地あめつちは

大空おほぞらは次第しだい々々しだいに雲くも晴はれて

御空みそらは蒼あをく星ほしは満みちぬる

吹ふく風かぜも次第しだい々々しだいにをさまりて

光ひかりの神かみの宿やどりは安やすけし㊦

天晴あめはれ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦  
天晴あれ天晴あれ光ひかりの神かみの言こと靈たまに

ぬぐふが如ごとく御空みそら晴はれつつ

見みの限かぎり月つきのしたびに輝かがやける

歎なげきの島しまの山野やまぬは清すがし

大空おほぞらの黒雲くろくも晴はれて島しまヶ根がねは

小夜更けながら明るくなりぬ  
夕さりて月讀の神のなかりせば  
この天地に曲津は荒びむ

朝香比女の神は御空の隈なく晴れ渡りしを、  
主の大神に感謝しながら御歌詠ま  
せ給ふ。

有難や主の大神の御恵に

わが言靈は照り渡りたり

次ぎ次ぎに雲霧退きて大空も

地も明るくなりけらしな

夜ながら小鳥の聲も冴えにつつ

生れむとする島を壽ぐ

この島に國津神等澤に住むか

歎かひの聲彼方此方聞えし

彼方此方の歎きの聲もをさまりて

草野を渡る風はかそけし

月は今常磐の松の茂り枝に

かからひましつ夜は冷え渡る

漸くに小夜更け渡り大空の

月は傾き初めにけらしな

明日されば駒を竝べて島ヶ根の

あらむ限りを經巡らむかな

國津神の艱みを救ひ曲神の

棲處を焼かむ眞火の力に

山も野も草生ひ茂り手も足も

入る由なき島ヶ根なるらし

曲津見は隙を窺ひ襲ひ來む



四柱よはしらの神眠かみねむらで守まもらへ  
㊦

初頭うぶが比古みひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ わが公きみの神言みこと畏かしこみ終夜よもすがら

守まもり仕つかへむ目めを見張みはりつつ

あめつつ千鳥ちどりましととの如ごとわがさける

敏眼とめもて曲津まがを睨にらみやはむ

只ただならぬ吾われの鋭すどき圓まるき眼めの

光ひかりに曲津まがは照てらされ滅ほろびむ

さりながら御樋みひしろ代神がみの御光みひかりに

比くらぶる時ときは螢火ほたるびなりけり

わが公きみの御身みまの周まはりを見張みはりつつ

曲津まがの襲おそひを固かたく守まもらむ  
㊦

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 面白き旅路なるかな萬里の海の

曲津を拂ひて終日来つるも

天津日の光はなけれど月讀の

清き光に冴え渡る島よ

明日されば言靈戦に出で立たむと

思へば楽しくわが眼は冴ゆる

駿馬の轡竝べて草の野を

焼き拂ひつつ又も進まむ

炎々と燃え擴ごれる草の野の

眺めは實にも雄々しかりけり

明日もまた野火の燃えたつ勢を

見むと思へば心勇むも

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

神々よ月の下びに草の野に

火をかけ給へば面白からむを

燃ゆる火の勢見れば面白く

心の駒も勇みたつなり

さりながら國津神等の住ひたる

宿に及べば憐れなるべし

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

燃ゆる火の面白くあれど國津神の

艱みしあれば明日を待たなむ

この島も小さき丘のところどころ

そばだてるらし月にほの見ゆ

莽々と生え茂りたる草の原に

數多の大蛇は潜むなるらむ

吾は今夜の明方を待ち佇びて

心勇みつ雄健びなすも

(昭和八・一二・二五 舊一一・九 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

第二四章 國津神島彦(一九八〇)

朝香比女の神の一行は、歎の島の濱邊に近き常磐の松の下蔭に、露の宿りの一夜を明させ給ひ、東の空を紫に照らしてのぼる天津日の光を伏し拜みつつ、御歌詠ませ給ふ。

☐ 奴婆玉の夜は明け放れ月白み

萱草の所狭きまで茂りあひて

この稚き歎の島を生かさむと

雲なき空に日は昇りたり

百鳥の聲騒がしく遠方此方の

丘の邊りゆ響き來にけり

向つ丘の常磐の森に集まりて

黎明歌ふ鵲清しも

見渡せば此島ヶ根はあちこちに

小丘浮びて高山はなし

萱草の所狭きまで茂りあひて

まだ拓けざる國形なるも

葦原の島根にのぼりし時のごと

所狭きまで雑草もゆるも

いざさらば駒を竝べて進み行かむ

國津神等の住へる丘へ

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

東の空を晴らして日の神は

のぞき給へり稚國原を

グロノスやゴロスの輩此島に

潜みて猛び狂へるらしも

國津神の歎きの聲は消え失せて

迦陵頻伽の聲はさやけし

いざさらば光の公の御供せむ

彼方に見ゆる小松ヶ丘に

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

此島に眞火を放たせ給はずや

行手に大蛇數多潜めば

醜神の永久に潜める草の野を

焼き拂ひつつ安く進まばや

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

見の限り草莽々の原野にて

葦原の國土の始めに似たるも

昨日まで閉ぢ塞ぎたる雲霧も

あとなく散りて天津日照らへり

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 面白き今日の旅路を樂しまむ

大蛇の潛む野を燒きにつつ

り、忽ち駒をひらりと飛び降り、朝香比女の神の御前にひれ伏しながら、  
かく歌ひ給ふ折しも、二柱の國津神は駒の轡を竝べながら草野をわけて進み來

□ 久方の天津空より天降ります

神迎へむと喜び來つるも

昨日まで荒び狂ひし曲津見も

公の光に鎮まりにける

親は呑まれ子は喰はれつつ國津神は  
歎きのうちに日を送りたる



御光の神は言靈響かひて

醜の曲津は姿潜めたり

此島の助けの神と現れましし

公の恵を喜び泣くも

吾こそは島彦といふ國津神よ

今日蘇りたる心地しにけり

夜も晝も醜の曲津見に襲はれて

歎きの絶えぬ吾等なりしよ

幾萬の大蛇はこれの荒野原に

光を恐れて潜みあるなり

今暫しかげ潜むれど天津神の

いまさずならばまたも荒びむ

島姫は感謝の歌を詠む。

背せの君きみと朝夕あしたゆふべを歎なげかひし

われは始はじめて安やすきを得えたりき

幾いくまん萬の國津神等くにつかみらも今日けふよりは

生いきの命いのちをとどめて歡あはぎぬ

此このしま島は三さん千方里せんはうり廣ひろけれど

心こころやす安やすくて住すむ神かみなかりき

天あめつち地つちを包つつみし雲霧くもぎり晴はれわたり

はじめて月日つきひの光かげを見みたりき

御光みひかりの神かみは此土このどに天降あもりまして

吾等われらが命いのちを守まもらせ給たまふか

晝ひるも夜よるも歎なげきの聲こゑの絶たえざれば

歎なげの島しまと稱となへ來きたりぬ

天津神あまつかみの光ひかりを浴あびて今日けふよりは

歡あはの島しまと稱たたへ奉まつらむ

グロノスやゴロスの曲津見折々に

輩率ともがひきみて來り荒ぶも

此頃このころは一人多くなりひとしほおほにけり

國津神等の損そこなはるもの

ありがたや救すくひの神かみは現あれましぬ

吾等われらを救すくふ光ひかりの神かみは

此島このしまに數多住あまたすまへる國津神も

公きみの天降あもりを歡よろこび迎むかへぬ

黄昏たそがれの海うみを照てらして寄より來きます

救すくひの神かみを闇やみに迎むかへつ

天津神島あまつかみしまに渡わたらしし夕ゆふへより

御空みそらの黒雲くろくも晴はれわたりける

幾年いくとせか見みざりし御空みそらの月光つきかけを

はじめて昨夜よべは拜をがみつるかも

天津日の光も久しく拜まざる

吾には命の限り嬉しき

曲神の姿一つさへなきまでに

追ひ退け給へ御光の神

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

吾こそは光の神に仕へつつ

汝等を救ふと渡り來つるも

國津心安かれ今日よりは

醜の曲津を焼き拂ふべし

海原を渡り來る折此島に

さやりし大蛇焼きすてにけり

醜神の司の大蛇亡びたれば

此この島しまヶ根がねも蘇よみがへるらむ〚

起立おきたつひこ比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

國津神くにつかみの永ながのなやみを今聞いまききて

吾われは思おもはず涙なみだにじむも

今日けふよりは心安こころやすかれ御光みひかりの

眞言まことの神かみの天降あまくだりませば

醜草しこくさを眞火まひもてことごと焼やきつくし

曲津まがの棲處すみかを吾われは清きよめむ〚

立世比女たつよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

女神めがみわれ光ひかりの神かみに従したがひて

歎なげきの島しまの歡よろこぎ見みしかな

今日けふよりはいよいよ歡よろこの島しまケ根がねと

蘇よみがへりつつ永久とほに榮さかえむ

果はてしなき大野おほのケ原がはらに潛ひそむなる

百ももの曲津まがつも生いきの果はてなり

天晴あめはれ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

國津神くにつかみの言靈ことたま聞ききて吾心わがこころ

憤いきどほろしもよ醜しこの荒すさびを

今いまよりは起立おきたつの神かみの手てをもちて

曲津まがつの棲處すみかを燒やき拂はらふべし

國津神くにつかみをなやます曲津まがつを悉しつじつく

眞火まひの力ちからに燒やきて清きよめむ

ここに起立比古の神は、御樋代神の御許しを得て燧石を取り出で、枯草青草の  
雑る野邊に火を放ち給へば、折りからの疾風に煽られ、忽ち原野は一面の火の海  
と化しにける。

(昭和八・一二・二五 舊一一・九 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録)

## 第二十五章 歡の島根(一九八一)

國津神夫婦は始めて眞火の燃え立つ状を見たる事とて、忽ち風に吹かれて燃え  
擴ぐる猛火に驚嘆の餘り卒倒し、暫し息も絶え絶えに見えけるより、初頭比古の  
神は側近く寄りそひ、天の數歌を數回繰り返し歌ひけるにぞ、夫婦はやつと氣を  
取り直し、頭を擡げ驚きの涙を絞りながら、

斯の如はげしき神に在すとは

さとらざりけり許させ給へ  
國津神はみな穴住居眞火に焼ける  
おそれなけれど恐ろしと思ふ

初頭比古の神はこれに答へて御歌詠ませ給ふ。

國津神の驚き宜よこの眞火は

歎の島の初光なる

みるみるに大野ヶ原の雑草は

燃えつくされて塵も留めず

曲津見は眞火の焰に焼かれつつ

あるひは亡びあるひは逃げむ

この國土に眞火の恵を與へむと

わが公は燧石を持たせ給へり



島彦しまひこは喜よろこびて歌うたふ。

☐ ありがたき天津御神あまつみかみの神宣みことのりに

われは命いのちの安やすきを得えたり

今日けふよりはこの島しまヶ根がねの國津神くにつかみの

生いきの命いのちは永ながく榮さかえむ

國津神くにつかみの住すむ丘をかの邊べは濠深ほりふかく

めぐらせ水みづを湛たたへてゐるも

火ひの力ちから如何いかに激はげしく燃もゆるとも

わが住すむ家いえは恙つつがなからむ

朝夕あさゆふに八十やその曲津見まがつは襲おそひ來きて

吾等われらが命いのちを脅おびやかしつつ

千頭ちがしらの神かみを一日ひとひに吞のみつくす

大蛇をろちの荒すさびはおそろしかりけり

國津神は歎きかなしみ天地を

祈れど神にとどかざりしよ

わが前に眞言の天津神の光

伏し拜みつつ蘇りけり

今日よりは日々の業をば喜びて

働き暮さむ國津神等は

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

朝夕に主の大神を齋きつつ

すべなき神に願ぎごとするな

天地の中には善神邪神あり

邪神を祀りて禍まねくな

朝夕に生言靈を宣りあげて

楔みそぎの神事わさぎを怠をこたるなゆめ

神言かみことと楔みそぎの神事わさぎは國津神くにつかみの

永久とほの命いのちの鍵かぎなりにけり

何事なにことをなすにも天津主あまつすの神かみの

御許みゆるしを得えて事に當あたれよ

この島しまは邪神まがみを祀まつりて曲津見まがつみの

禍時わざはひときじく受け居ゐたるなり

この島しまの眞秀良場まほらば選えりて主すの神かみの

貴うづの御舍仕みあらかつかへ奉まつれよ

何なによりも先まづ第一だいいちに主すの神かみを

麻柱あななひ奉まつりて世よに榮さかえし

わが賜たまふこれの燧石ひうちは曲津見まがつみの

ひそむ荒野あらのを燒やき放はるなり

國津神くにつかみの日々ひびの食物をしものにことごとく

味はひ與ふる眞火なりにけり  
國民の日々の食物は悉く

眞火にあぶりて食ふべきなり

島姫は喜びて歌ふ。

天晴れ天晴れ島の命を賜ひけり

眞言の神を齋けと宣らしつ

曲津見と知らずに今まで齋きたる

わが愚さを今更悔ゆるも

國津神も今日より眞言の主の神を

齋かせ申さむ教へ導きて

曲津見の荒びを退へと燧石

手づから賜ひし神の尊さ

この島の寶となして齋くべし

光の神の御魂と共に

食物をあぶりて食へと宣らします

神の尊き神宣かも

三千里の廣きに住める國津神も

眞火の恵に浴して榮えむ

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

放ちたる眞火は次ぎ次ぎひろごりて

大野を遠く舐め盡しけり

曲津見はのたうち廻り忽ちに

雲を起して逃げ去りにけり

この島に曲津見のかげの失するまで

生言靈のつとめ忘れな  
神言の力は總ての曲津見を  
拂ひて國土を生む力あり

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

この島に光の公の現れまして

森羅萬象は蘇りたり

恐ろしき歎の島も今日よりは

千代に歡の島と生れむ

御樋代の尊き神の御影を

忘れず齋け國津神等

わが公はまたもや海路を打ち渡り

旅に立たせば御魂を齋けよ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 一夜をこの島ヶ根に宿りして

國津神等を照らしけるかも

御光の神にしあれば歎かひの

島根も今日より照り渡るなり

月清く日は明らけく永遠に

照らふ光の神國と榮えむ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 歎かひの島の生きたるさまを見て

光の神の功をおもふ

斯<sup>か</sup>く神<sup>かみ</sup>々<sup>がみ</sup>は國<sup>くに</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>夫<sup>ふう</sup>婦<sup>ふ</sup>に種<sup>いろ</sup>々<sup>いろ</sup>の教<sup>けう</sup>訓<sup>くん</sup>を施<sup>ほどこ</sup>し、燧<sup>ひ</sup>石<sup>うち</sup>を與<sup>あた</sup>へて松<sup>まつ</sup>の樹<sup>こ</sup>蔭<sup>かげ</sup>より再<sup>ふた</sup>び濱<sup>はま</sup>邊<sup>べ</sup>に引<sup>ひ</sup>き返<sup>かへ</sup>し磐<sup>いは</sup>楠<sup>くす</sup>舟<sup>ぶね</sup>に駒<sup>こま</sup>諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に乗<sup>の</sup>り込<sup>こ</sup>み給<sup>たま</sup>ひ、萬<sup>ま</sup>里<sup>で</sup>の海<sup>うな</sup>原<sup>ばら</sup>に浮<sup>うか</sup>びつっ、曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>の伊<sup>いた</sup>猛<sup>たけ</sup>る西<sup>にし</sup>方<sup>かた</sup>の國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>をさして進<sup>すす</sup>ませ給<sup>たま</sup>ひける。

（昭和八・一二・二五 舊一一・九 於大坂分院蒼雲閣 内崎照代謹録）

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第七八卷 天祥地瑞 巳の卷

終り